

## 佐野花子「芥川龍之介の思い出」 附やぶちゃん注

「やぶちゃん注」 佐野花子は明治二八（一八九五）年生まれで、昭和三六（一九六一）年八月二十六日に亡くなっており、没後五十四年が経過しており、パブリック・ドメインである。

彼女（旧姓は山田）は長野県諏訪郡下諏訪町東山田生まれで、諏訪高等女学校（首席卒業。

現在の県立長野県諏訪二葉高等学校）から東京女子高等師範学校文科（現在の御茶の水女子大学）に進んだ。歌人でもあった（以下の底本には「遺詠」と題した歌集パートがある）。女子師範を卒業して一年で佐藤慶造（明治一七（一八八四）年〳昭和一二（一九三七）年）と結婚した。夫慶造は、芥川龍之介が東京帝大卒業後、横須賀の海軍機関学校で英語の教官をしていた折の同僚（但し、芥川は明治二五（一八九二）年生まれで慶造よりも八つ年下で、花子より三つ年上であった。龍之介の同校着任は大正五（一九一六）年十二月一日附で、当時は満二十四（龍之介は三月一日生まれ）であった）の物理教官で、同校勤務中の約二年余り（芥川の同校退職は大正八（一九一九）年三月三十一日）、妻花子とともに親しく龍之介と交流した。底本は昭和四八（一九七三）年短歌新聞社刊の佐野花子・山田芳子著「芥川龍之介の思い出」（「彩光叢書」第八篇）の内、佐野花子筆になる「芥川龍之介の思い出」（初版）を用いる。なお、山田芳子氏は佐野慶造と佐野花子との娘さんである（因みに、同書には山田芳子氏の「母の著書成りて」及び「母を偲ぶ歌」が併載されている。そのため、共著となっているのである。母花子の遺稿とカップリングで本書は刊行されたものである。なお、私の所持する本書は「潮音」の歌人であった父方の祖母から生前に貰い受けたものである）。

恐らく、本作をお読みになられると、その内容に驚愕される方が多いかと思われる。

但し、現在、芥川龍之介研究者の間では、そこに語られた内容は――佐野花子の妄想の類といった一部のもの者の辛辣な一言で――まず、まともに顧みられることがないのが現実である。

私は、佐野花子と芥川龍之介、彼女の書いたこの「芥川龍之介の思い出」の内容と実際の芥川龍之介の事蹟との関係について、身動き出来る範囲内では、いろいろと考察してきたつもりである。それらは[私のブログ「Blog 鬼火〳日々の迷走」のカテゴリ「芥川龍之介」の記事](#)として、古い順に以下のようなものがある。

「月光の女」（二〇〇六年六月十六日の記事）

「芥川龍之介の幻の「佐野さん」についての一考察」（二〇〇七年二月一日の記事）

『芥川龍之介「或阿呆の一生」の「二十八 殺人」のロケ地同定その他についての一考察』  
(同前二〇〇七年二月一日の記事)

『芥川龍之介 僕の好きな女／佐野花子「芥川龍之介の思い出」の芥川龍之介「僕の最も好きな女性」』(二〇〇七年二月三日の記事)

『芥川龍之介の幻の「佐野さん」についての一考察 最終章』(二〇〇七年五月五日の記事)

そこで推理もしたように、確かに佐野花子の「芥川龍之介の思い出」の叙述の中には、ある思い込みや思い違いに基づくと思われる箇所が実際にあり、そうした誤認を後年の佐野花子が事実として信じ込んでしまっていた、芥川龍之介の遺稿「或阿呆の一生」の中に登場する——謎の「月光の女」——を間違いなく自分自身だ、自分でしかあり得ない、と堅く信じてしまった、と考えられる節も、確かにある。

しかし、私は、それによって本随想が芥川龍之介研究の資料として価値を失っているとは毛頭、思わないのである。実際、本書には、他のどこからも見出すことが出来ない、芥川龍之介の未発見初期俳句六句を見出せるのである（やぶちゃん版芥川龍之介句集 五 手帳及びノート・断片・日録・遺漏）を参照。私はこれだけでも本作は評価されてよいと信じている）。

研究家の——妄想の類い——といったような非礼な一言によって葬られてしまった佐野花子と、この「芥川龍之介の思い出」は、今一度、復権すべきであると私は強く感じている。芥川龍之介研究に佐野花子を「アブナイ」ものとして埒外おいておくのは、とんでもない誤りであると私は真剣に考えているのである。

句などは読み易さを考えて、前後を行空けとした。注の形で補足するによいと思った事柄を添えてある。【二〇一六年十一月十一日 藪野直史】

## 芥川龍之介の思い出 佐野花子

### (一)

買物に出て、ふと「羅生門」の映画看板を見たのが、思い出のそもそもの発端となりました。めったに映画を見ない私が、珍しく体調のよい日に、町へ出かけ、買物袋を片手に、まだ時間のあるのを幸い映画館にはいつてスクリーンに眼を向けたのも、「羅生門」の作者が芥川龍之介だったからでございます。

初版本の「羅生門」の扉に、

干草に熊手かけたりほととぎす 龍之介

としたためて、自ら持参してくれた彼、龍之介のおもかげと、あの頃の新居、横須賀の海岸、ほのかに血のめぐっていた自分、還らぬ映像を思い起こして耐えられない懐かしさに襲われたのでございました。私は、やはり目まいを覚えながら帰宅し、あけくれ寝たり起きたりの中で、俄かにあせりを感じながら、ノートにたどたと書きはじめたのです。それは日に日に早くなり、息もつげないような気持ちに私を駆り立てて行きます。疲れると臥したまま、そばにいる娘に語り聞かせていました。私は命のもう長くないのを感じています。人にはどう思われようと、私にとりましては唯一つの淡い光のような追憶でございました。

まあ、あれから幾星霜を経たというのでしょうか。彼は若くして自命を断ち、私の夫、佐野慶造さえも、最早、地下に眠ってしまいました。それからしても十数年は経ています。

思えば私には二人の男の子もありましたが長男は東京震災のとき、次男は第二次大戦の東京空襲のとき、それぞれに命を落としております。今は一人娘になった芳子と、その婿と二人の孫との生活でございますが、病魔に魅入られ、それなりに思い出を友として走り書きの毎日を送ることになりました。

私の枕元にある現代日本文学全集二十六「芥川龍之介全集」筑摩書房刊（昭和二十八年九月二十五日発行）の年譜等を辿ってみますと「やぶちゃん注…太字は底本を再現。「全集」はママであるが、これは「芥川龍之介集」の誤りである。」、

大正五年、二十五才のとき芥川龍之介は、第一高等学校教授・畔柳都太郎の紹介で、十二月一日から、横須賀の海軍機関学校嘱託教官となり、そのため十一月下旬から住いを鎌倉に移すとあり、他に詳しくは、大正六年二十六才のとき下宿を鎌倉から横須賀に移したこともございます。このとき私は夫、佐野慶造と共に、この横須賀に住みまして、勤務先は彼と同じ機関学校にて、夫は、物理教官、彼は英語教官として既に文名も高かったのでございますが三人の親交はこの時に結ばれました。大正八年三月、彼が同校を辞し、大阪毎日新聞社員

となるまでの期間でございました。夫と彼は畑違いではありませんでしたが、たいへんに親しくしていただきました。それと申しますのも、人の善い夫は、文筆のほまれ高い龍之介を友とすることを喜び、進んで親交を求めたからでもございましょうか。文学に興味を持つ妻としても、私を彼紹介してくれました。

大正六年四月の或る土曜日でしたが、私たちは新婚旅行に出るため、横須賀駅へまいりました。そのとき丁度、すれ違いに彼と出会ったのが、最初のお見知り合いでございました。まったく偶然ではありましたが、鎌倉までご同乗下さり、そこでにこやかにお見送り下さいました。

「やあ。佐野君」

「おお。これは芥川さんでいらっしゃる。これは妻です。お茶の水女高師文科の出で」

「おお。これは、月の光のような」

と呟やかれました……。鶴のような長身にびたりと合う紺の背広。右手にステッキ。束の間の出会いではございましたが、

春寒や竹の中なる銀閣寺      龍之介

とした美しい絵葉書は、すぐ後に届けられてまいりました。私どもはその筆蹟に見入り、発句に感じ、たいせつに手箱の底へ収めたものでございます。京都からの便りでした。

新婚旅行も土曜日でございましたが、それからあと、毎土曜日といつてよい程、彼を招き、彼に招かれという交際がつづきました。新居にもお招きしましたが、そのころ鎌倉に「小町園」という料亭がございまして、ここの離れ座敷で、招いたり、招かれたりの土曜の夜は本当に三人とも楽しさに心あたたまり「お千代さん」という片えくぼのある女中さんや、「お園さん」という肥った女中さんがもてなしてくれました。彼が主人役のときには、ここに泊って私たちを夜ふけまでもてなし、一高時代の思い出話はカッパ踊りとなつて座敷中に笑いを散らしました。私も初めは人見知りをしてろくに口もきけませんでした、いつか親しんで彼と意見を交わすほどにまでなつて行きました。

そのころの彼の手紙は次のような文面で書かれていました。

「昨晩はご馳走さまに相成り有難くお礼申し上げます。実に愉快でした。今日もまだ酔いの醒めぬ思いで少しフラフラしています。駈蕩として授業も甚だいいかげんにやりました。今一度、来週の土曜日に小町園までお出かけ下さいませんか。お礼かたがたお誘いまで。奥さんよろしく」

こうして土曜日を待つのが習慣になりました。初めの内気な気持ちは弾むようになっていそいそと日が経ち、土曜日はすぐやって来ました。田舎育ちの私は、とくに洗練された東京の文士の前に出るのは、身づくろいにおどおどする思いでした。夫はいろいろと注意してくれ、束髪に結わせ、襟におしろいを刷くことなども言ってくれました。母の心づくしの藤色の小袖や、紫のコートなどを身につけるにも消え入りたい気持ちだったのです。それがし

だいに軽く済ませるようになり、心も弾み、話も自然にできるようになったのですが、彼を二人とも尊敬し敬愛したからにほかなりませんでした。

お千代さんもお園さんも、呼吸をのみこんでしまい、

「芥川さま。お待ちかねでございます」

と飛んで出てくるようになってしまいました。何とも楽しいあの頃であったと、ため息の出る今の私でございます。……前週には満開をほこっていた桜もチラホラと敷り敷いて、庭は一めんの花のしとねでございます。[やぶちゃん字注…敷り敷いて]はママ。「散り敷いて」の誤りではあるまいか。」

男二人はしきりに盃を重ね、私は彼の好意でブドウ酒に頬を染めたりしたようでございます。

また、新居の六畳の部屋に彼を招いたことが何度ございましたろうか。テーブルに白布を掛け一輪ざしには、何か庭の花を入れ、故郷信濃から送られた山鳥で、山鳥鍋を供しましたときは、ことのほかご気嫌でした、

「奥さん。ぼく、この山鳥鍋というのにはまったく感心しましたよ。よいことをお教えしましょう。これからお里へ手紙を出されるたびに、山鳥おいしかったと必ず書いてお上げなさい。すると又、きつと送って来て、ぼくはご馳走になれると、こういうことですよ」

どうですかという様に彼は眼をかがやかせるのです。私はその彼らしい機智をほめ、心から嬉しく思ったものでした。

麗らかやげに鴛鴦の一つがひ 龍之介

この一句は上気嫌の彼の唇から洩れたものでした。

彼は若い卓越した作家であり、会話も軽妙で、皮肉やユーモア、それに可成、辛辣なことをばを吐く人でした。人の善い好人物の夫と、鋭い龍之介との会話はまことによい対比をなしていました。しかし、私を交じえていることを彼は決して忘れず、礼を失するようなことではませんでした。東京育ちの垢ぬけた応待の中には女性を疎外せぬ思いやりがあったと思いますのです。それだけに、お上手やご冗談もたくみで、私はいつもその意味でうまく交わしておりました。

「佐野君はよい奥さんをお持ちで羨やましい」とか「ぼくは、どうしたらよいのでしょうか。一生、独身でいようかしら」などというふうなことばに對して、程のよいご冗談に過ぎぬと流していたのです。が、小町園の離れ座敷である宵のこと、お千代さんに命じて、硯と墨を持って来させ、すらすらと白紙に善かれましたのは、

かなしみは君が締めたるこの宵の印度更紗の帯よりや来し 龍之介

「さて、ご説明申し上げます。よい奥さんを持たれて羨やましい。心ひかれる女性だ

……とこういう意味ですよ」

とのことでありましたが、これとて私は、滑らかな社交辞令と受け取りました。

「奥さんの眼は美しい」

と、じつと見入られたこともありましたし、

「ぼくは月のひかりの中にいるような人が好きだ。月光の中にいるような」

ということばも聞いております。それは彼、芥川龍之介の理想の女性像であったのです。何げないふうで言われることばは、私にとも誰にともなく、そして私に聞けというふうでありました。

勤務の都合から、夫の帰宅の遅い夜、案じていますと、玄関に足音がして、戸がひらかれるや、夫のうしろに彼の顔が重なる帰宅というのもありました。

こうして交友の間がらは、のどかにつづいて行きました。

「やぶちゃん注…『買物に出て、ふと「羅生門」の映画看板を見たのが、思い出のそもそもの発端となりました』本随想の執筆の契機である。黒澤明監督の映画「羅生門」は昭和二五

(一九五〇)年八月二十六日に公開されている。

『初版本の「羅生門」』芥川龍之介の第一作品集「羅生門」は阿蘭陀書房より大正六(一九一七)年五月二十三日に刊行されている。

「干草に熊手かけたりほととぎす

龍之介」芥川龍之介の句としては未発見句で、現行

の芥川龍之介の作とされる句には類型句さえ見当たらない。作句推定は、五月二十三日の「羅生門」上梓の直後の、この献本が行われたであろう大正六(一九一七)年半ば辺りより以前で、純粋な花子への贈答句の可能性の高さと考ええると、大正六年四月より前には遡らない。

それは、芥川の海軍機関学校への就任が大正五年十二月三日であり、佐野花子が夫によって芥川に紹介されたのが、「大正六年の四月のある土曜日」と記されていることから推定である。「羅生門」の献本が、その後の佐野夫妻との交友が深まった後のことと考えられ、また献本の叙述に直後に「あの頃の新居」という表現が現れていることから、これが佐野夫妻の結婚からさほど隔たった時期ではないと推測する故でもある。

「ほのかに血のめぐっていた自分」「私は、やはり目まいを覚えながら」「あけくれ寝たり起きたりの中で、俄かにあせりを感じながら」「疲れると臥したまま」「私は命のもう長くないのを感じています」「病魔に魅入られ」これらの病態は、判る人には判るのであるが、結核の典型的な症状とは言える。事実、同書には山田芳子氏の「母の著書成りて」の中に、戦前・戦中に『労苦の末に結核にかかって臥床した母』とある。但し、死因がそうであったかどうかは不明である(因みに私(昭和三二(一九五七)年生まれ)も昭和三十三年に結核性カリエスに罹患したが(昭和三十六年半ばに固定治癒)、その頃にはストレプトマイシンなどが比較的安く手に入るようになっていた)。

「唯一つの淡い光」まさに花子にとってその「追憶」は「月光」なのであった。

「長男は東京震災のとき」長男佐野清一。同前の「母の著書成りて」の中に、『赤痢で病死

し』たとある。

「次男は第二次大戦の東京空襲のとき、」「命を落としており」次男佐野由信。

「畔柳都太郎」(くろやなぎくにたろう) 明治四(一八七二)年〜大正一二(一九二三)年は英語学者・文芸評論家。山形生まれ。仙台二高を経て東京帝国大学に入学、同大学院在学中に『帝国文学』に執筆、以後、『太陽』『火柱』『明星』にも文芸評論を寄稿した。明治三一(一八九八)年より一高英語担当教授となった(龍之介はその時の彼の教え子であった)。

その間、早稲田・青山学院・正則学校でも教えた。明治四十一年からは「大英和辞典」編纂に心血を注いだ。完成前に病没した(以上は主に「朝日日本歴史人物事典」に拠る)。

「十一月下旬から住いを鎌倉に移す」神奈川県鎌倉町和田塚(現在の鎌倉市由比が浜)の「海浜ホテル」の隣りあった「野間西洋洗濯店」の離れに下宿した。なお、この海軍機関学校に就職した十二月には龍之介の友人山本喜嘗司の姪塚本文(ふみ)と婚約し、文の卒業を待って結婚する旨の縁談契約書を取り交わしている。

「大正六年二十六才のとき下宿を鎌倉から横須賀に移した」大正六(一九一七)年九月十四日に鎌倉から転居し、横須賀市汐入の資産家尾鷲梅吉方の二階の八畳に間借りした。

「大正六年四月の或る土曜日」同年四月の土曜日は七・十四・二十一・二十八日であるが、直後に「京都からの便り」があったとあり、芥川龍之介はこの四月十一日から養父道章とともに京都・奈良に旅行しているから(帰京(田端の実家へ)は十五日の日曜)、この花子と龍之介の運命的出逢いは四月七日に同定されるのである。

「おお。これは、月の光のような」私はこれを花子の妄想だなどして一蹴出来る人間では断じて、ない。

「春寒や竹の中なる銀閣寺 龍之介」岩波旧全集書簡番号二七八に出る句。四月十三日附で佐野慶造宛。以下、全文。旧全集には絵葉書とはないが、これは確かに花子の叙述通り、絵葉書と思しい。

\*

春寒や竹の中なる銀閣寺

十三日

芥川生

奥さまにおよろしく先日は失禮しましたから

\*

「小町園」現在の横須賀線ガードの逗子側の陸側に、かなり広い敷地を持って建っていた和風料理店(現存しない)。東京築地本店の支店であったが、この女将野々口豊(既婚者)は。後に、やはり芥川龍之介が思いを寄せることとなる女性の一人で、龍之介は自死の前年末から当該年正月にかけて、ここに、一種の「プチ家出」のようなことをして、なかなか田端へ帰らなかったりしている。芥川龍之介の秘められた女性関係の中では最重要ランクに属する

愛人の一人である。但し、高宮檀氏の『芥川龍之介の愛した女性——「藪の中」と「或阿呆の一生」に見る』の堅実な調査と考証によれば、野々口豊が鎌倉小町園の経営を任されていた野々口光之助と正式な結婚をするのは大正七（一九一八）年九月五日のことで、高宮氏は豊と龍之介が初めて逢ったのも（単なる初会の意である）同年三月二十九日（この日に芥川龍之介は二月二日に結婚した新妻とともに鎌倉町大町字辻の小山氏別邸に新居を構えており、ここは小町園の直近であった。因みに、私、藪野家の実家は、この龍之介の新居の直近である）以降とするので、佐野夫婦が豊を知ったとしても、それは、この記載よりもずっと後のこととなる。

「カップ踊り」単なる幫間的な仕草のことか。芥川龍之介は好んでは酒は飲まなかった（飲めなかったわけではないようである）。従って酔っぱらって羽目を外し過ぎ、馬鹿囃子の幫間芸をした、と言った感じではないと思われる。彼女自身が後で「私を交じていることを彼は決して忘れず、礼を失するようなことはしませんでした」と述べている通り、「月光の女」花子の前で、そんなことは、あの芥川龍之介が、やるはずが、ないのである。

「昨晩はご馳走さまに相成り有難くお礼申し上げます。実に愉快でした。今日もまだ酔いの醒めぬ思いで少しフラフラしています。駈蕩として授業も甚だいいかげんにやりました。今一度、来週の土曜日に小町園までお出かけ下さいませんか。お礼かたがたお誘いまで。奥さんによろしく」この書簡は旧全集には載らない。この謂いも、二日酔いというのではなく、酒の氣に当てられたといった表現と読める。「駈蕩」はこの場合、ふわふわとした、なんともはや、ゆったりした気持ち、と言ったニュアンスである。

「刷く」老婆心乍ら、「はく」と訓ずる。「はけでさつと塗る」の意。

「麗らかやげに鴛鴦の一つがひ 龍之介」「麗（うら）らかや 實（げ）に鴛鴦（ゑんわう）の一つがひ」現行の芥川龍之介の俳句群に類型句はなく、花子の記憶が正しいとすれば、数少ない口誦記録の龍之介俳句で、文字化されていない可能性も孕む、極めて稀な新発見句といえる。芥川と文の結婚話の以前のエピソードであり、純粹な花子への贈答句の可能性の高さと佐野花子の直前の叙述等から考えると、大正六（一九一七）年の五、六月辺りではないかと推測される。

「可成」「かなり」。

「佐野君はよい奥さんをお持ちで羨ましい」「ぼくは、どうしたらよいのでしょうか。一生、独身でいようかしら」私は芥川龍之介なら、こういう台詞を齒を浮かせることなく、相手に言えるダンディズム（半ばは演出として、半ばは本音として）を備えていたと思っただけ。特に、芥川龍之介は翌年（実際のそれは大正七年二月二日）に文との結婚を控えていただけに、私は「なおさら」だと思ふのである。深層に吉田弥生との不幸な失恋の心傷（トラウマ）を抱えて込んでいた龍之介の心底を覗かすこれらの台詞、特に後者が、確かに芥川龍之介から発せられた密やかな告解でもあったのだと思っただけである。

「かなしみは君が締めたるこの宵の印度更紗の帯よりや来し 龍之介」この一首は岩波版新全集詩歌未定稿に載るもので、実際の創作は龍之介が花子に出逢うより遙か前のもの

である。Lucio Antonio の変名署名で書かれた歌群「さすらへる都人の歌」（八群九首）の第六歌で（全容は「やぶちゃん版編年体芥川龍之介歌集 附やぶちゃん注」を参照されたい）、

## VI

かなしみは 君がしめたる 其宵の

印度更紗の帯よりや來し

とある。旧全集書簡番号一〇七の大正二（一九一三）年九月十七日（推定）附の山本喜誉司宛書簡（ここにはこの頁にない多量の短歌群を見出せる）の末尾に「ANTONIO」の署名が見られる（因みにその後宛名として山本喜誉司のことを「DON JUANの息子へ」と呼称している）。因みに「Lucio Antonio」から即イメーじされる著名人物は作曲家 Antonio Lucio Vivaldi アントニオ・ルーチョ・ヴィヴァルディである。これらの歌群は大正三（一九一四）年夏に執筆されたものと推測され、この「かなしみは」を含む「黒船の」「海はいま」「君が家の」「初夏の」の五首は、ほぼ相同（字配は大きく異なる）のものが、後に掲げる大正三（一九一四）年九月発行の『心の花』に「柳川隆之介」の署名で掲載された「客中戀」に含まれている。この「印度更紗」は「インドさらさ」と読む。ポルトガル語「saraca」に由来。主に木綿の地に人物や花鳥獣類の模様を多色で染め出したもの。室町末期にインドやジャワなどから舶載されるようになり、国内でも生産が始まった。直接染料で模様を描く描（か）き更紗や、型を用いて捺染（なっせん）したものなどがある。十六世紀末のインドで極上多彩の木綿布を「saraso」また「sarases」と呼んだところからの名という。印花布。花布（以上「印度更紗」の注は「大辞泉」の記載を参照した）。即ち、この歌は以下に龍之介が解き明かすような、佐野花子へ捧げた一首ではないということである。但し！芥川龍之介は、極めて頻繁に、こうした過去に別の女性に捧げたり、献じたりした詩歌などを、改作したり、或いはまたそのまんまで、新しく心を動かした女性に恥ずかしげもなく、贈っているのである。しかしそれは彼のドン・ファン性というよりも、詩的な感動の普遍性として私はよいとさえ感じているとも言っておく。

「さて、ご説明申し上げます。よい奥さんを持たれて羨やましい。心ひかれる女性だ…：とこういう意味ですよ』『奥さんの眼は美しい』と、じつと見入られたこともありました』『ぼくは月のひかりの中にいるような人が好きだ。月光の中にいるような』『ということばも聞いております。それは彼、芥川龍之介の理想の女性像であつたのです。何げないふうで言われることばは、私にとり誰にとりもなく、そして私に聞けというふうでありました』これらの花子の追憶のどこに――妄想――があろうか？！これは確かに芥川龍之介が口にしたとして、全く自然なものではないか！」

或るとき、彼は青くなって詫びて来たことがございます。

「あれは、ぼくの、しわざなんです。ひらにご容赦下さい」

というのは、私どもに何の覚えもないのに、或る朝の時事新聞に、私たちの結婚写真が載っていたのです。誰が出したのだろうと私どもは驚きました。まだ私は女学校の教鞭をとっていましたので、学校は生徒の声で大騒ぎ、ここしばらく当惑の日がつづいていたのです。そこへ、彼はやって来て、実は自分のしたことだと白状したのです。

「写真を机上に飾って、眺め眺めして喜んでいたぼくでしたかね。罪は、ぼくにあるんですが。時事新聞にいる例の悪友、菊池寛がやって来ましてね。写真を見るや、

『出すから借せろ』

と言うんですよ。ぼくは、すみやかに思考をめぐらしました。よし。これは善行に非ずとも、決して悪事に非ず。佐野君におかれてはいざ知らず、奥さんにおかれては、喜び給うとも、よし憤激はなさるまじと、結論はこうなんです。よろしい。君、急ぎもって帰って一刻も早く、紙上に掲載し、満天下の紳士淑女を悩殺せしめよ。と、こういったしだいです。ぼくは、空吹く風と、すましているつもりでいました。ところが、当地の善友諸君の間に起こったセンセーションの甚だしさ。驚いた。ぼくの良心の苛責。実はぼくのしわざですと白状にまいりました。こうして、しおしとお詫びに上がったしだい、平にご勘弁願います」

「まあ。あれは芥川さまでしたの？」

と初めて解ったのでした。

切りなづむ新妻ぶりや春の葱　龍之介

この一句を贈られて、慶造もなお、彼を歓待すること常の如しでございました。

彼の曰く、

「ぼくは佐野君の相手が女教師だと聞いたとき、この温和な佐野君が、可愛い女性と結婚して一たいどうなることかと衷心から心配したのですよ。ところが予期に反して、本当に安心しましたね。佐野君と奥さんと、どちらが幸福かなあ、と考えてみたりしましたが、学校の教官諸君は、よい奥さんが来て佐野君はしあわせだと言ひ、ぼくは、これほど心酔されてしまったところをみると、奥さんの方がより、しあわせかと思ひますよ。ああしかし、どちらでもよい。同じことだ。ご両人のために乾杯ですね。この良きご家庭が、いや栄えますように」

こうして祝杯をあげてもくれたのです。私どもばかりが、何だか、しあわせで、彼にわるいような気がするのはどういうものでしたでしょう。夫は言うのです。

「龍ちゃん。それは、もう、有難う。だからそんなに人の観察ばかりしてないで、早く自分もいい奥さんをおもらいなさい。幾らもいるでしょうが」

「さあ。そう言われるとたいへんだ。ぼくはこれで、なかなか難かしいんですよ。美人で

なければだめ。そう、だめなんです。顔がいいばかりでもだめ。全体の均整がとれて恰も彫刻を見るが如くにありたいですね。それだけでもだめ。いつも愛の泉に浸っているような、そんなふうな細君でありたいものですよ」

「だから、東京には幾らもいるでしょう」「いや。いや。東京の令嬢階級なんて大したことない。つまらないものですよ。それより奥さんに天真爛漫、素朴純真な田舎の令嬢をお世話して頂くかな」

というふうに逃げられるのでした。

横須賀という狭い街の、機関学校などというおきまりのところに勤務するということは味気なく、つまらないものであったろうと思います。それに夫は最も同情し、加えて下宿生活の無味乾燥を、私の家庭の潤いでまぎらしてやろうという心組みが、いつも、あたたかく私に蔭み入り、私もそういうところで、出来得るかぎり、ねぎらったつもりでございました。そして、話はどうしても彼の結婚をすすめるという方へ向かざるを得ません。早くご良縁をと口癖のように申していました。

彼は或るとき、こういうことを問いかけてまいりました。

「奥さん。もしもです。もしも、妻子ある男子が処女に恋するとか、青年の身で人妻に恋するとかいうことになった場合、一たいどうしたらよいと思われませんか。ぼくは、このことを一度、奥さん尋ねて見たいと思っていました」

「そんなこと難かしくて、私どもには、とても解りはいたしませんわ。あなたこそ、その方面のご専門でいらっしゃるのですもの。私こそ教えて頂きたいと思えますわ」

「いえ。そんなに難かしく、奥さんと議論しようと思って申し上げてはいません。ただご意見を伺いたいと言う迄です」

こういう問いかけでしたけれども、私は女高師時代にも、文楽に出てくる小春のような女性、おさんのような女性についてどう思うか、というような研究質問をもって尾上柴舟先生が生徒らに、答えさせたわけですが、私は、どうも、いつも、順番を飛ばされるほど、そういう問題には無智だったのです。結婚してもなお、こういう問題に答えるすべをしらないものでしたから、しかたなく、

「それは、あきらめるより仕方がないのではないのでしょうか」

というしだいでした。

「はあ。あきらめる。そうですか。しかし奥さん。それが非常に真剣なものであった場合、なお、どうしたらよいと思えますか」

「そんなに真剣であったとしても、道徳というものが許しませんでしょう。あきらめるより仕方がありません」

「あきらめる——あきらめきれれるのですか。奥さんは偉いですね」

「私だって、あきらめきれれるかどうかわかりませんのよ。でもやっぱり仕方がないのではないのでしょうか。深い仲になってしまえば人にはうしろ指をさされますし、社会からも葬り去られてしまいます。犠牲になる者も出ます。心中しても同じことですわ。二人はそれでよ

いかも知れませんが、あとに残った者達、親の嘆き、子の思い。夫の憤激。それだけでも大低のことではありません。いっそ、そんな恋などしない方がよろしいのではありませんの？」  
「ぼくは一たいどうしたらよいのでしょうか。ぼくは一生独身でいようかしら。奥さんと同じ女性がいらない限り、結婚してもつまらないと思うからですよ」

そしてつけ加えて言うのを私は聞いており、今もひどく気になるのですが、  
「結婚しても、あなたを忘れることはないように思います」

ということばでございました。真実がこめられていたのかも知れません。私はあつさりと流してしまいました。

夫は、また、はからって、私の和歌を彼に見て貰えとのことで、添削などを依頼したことがございましたが、結局、ことわりの宣告を受けるに至りました。はじめは承諾してくれたのですけれど、途中から、「もう見る事ができなくなった」という理由でことわりを言われました。

「感情上、批判ができなくなるのです。だから悪しからず」  
しかし、

「ぼくは今まで、歌というものの、例の百人一首にしても、うわの空で読んでいました。ところが実にいいものがあるということを奥さんのお歌を見てから気づくようになったのです。『さしも知らじな燃ゆる思ひを』『昼は消えつつものをこそ思へ』などとね」

そして、持てあましたように立ち去って行かれたのです。

○

こう思い出を書いていて、読み返して見ても、どうも私のことに引きつけているようで気になります。ありますが、ありのままのことなので、このまま書きつづけて参ります。

「やぶちゃん注…或る朝の時事新聞に、私たちの結婚写真が載っていた」「時事新聞にいる例の悪友、菊池寛がやって来」て『出すから借せろ』佐野夫婦と芥川龍之介が懇意になった大正六（一九一七）年五月から同校退職（翌四月に大阪毎日新聞社客員社員となる）の大正八年三月三十一日の間、龍之介の盟友菊池寛は大正五（一九一六）年の京都帝国大学英文科を卒業後（龍之介と同年卒）、上京、実際に同年十月に時事新報社会部記者となっており、彼が時事新報社に在職していたのは大正八（一九一九）年二月までである（同年、彼はまさに芥川龍之介の紹介もあって同じ大阪毎日新聞社客員社員となっている）。従って、この花子の語る内容には事実措置上の齟齬はない。但し、私は当時の「時事新報」を照覧したわけではないから、実際に佐野夫妻の夫婦の写真が掲載された事実があったのか、また、あったとすれば、それはどのような形、記事として掲載されたもののかは確認出来ない。花子が当時、「女学校で教鞭をとって」たという事実については、佐野正夫氏の論文「芥川龍之介はなぜ横須賀を去ったかⅡ」（ネット上でPDFで入手可能）によって『汐入女学校』であることが判明した（これは恐らく明治三九（一九〇六）年に汐入の谷町に開校した、当時の横須賀町及び豊島町の組合立立高等女学校が翌年に横須賀高等女学校と校名を改め、明

治四一（一九〇八）年に深田台に新築移転、昭和5（1930）年に県に移管して県立となつて大津に移転（現在の共学の県立大津高等学校）するまで、横須賀市の女子教育の中心となった、其れであろうと推測する）。しかし、寧ろ、この彼女の「学校は生徒の声で大騒ぎ、こころばらく当惑の日がつづいていたのです」というリアルな述懐が、花子の勝手な創作や或いは妄想だなどとは到底、私には思えないとも述べておく。「借せろ」は「貸せよ」の方言か。龍之介は江戸っ子、菊池は香川高松、佐野花子は信州諏訪。識者の御教授を乞う。

「切りなづむ新妻ぶりや春の葱　龍之介」この句自体は他に相同句がない、やはり龍之介俳句の新発見句である。なお、芥川龍之介の「手帳（1）」（新全集編者によれば、この手帳の記載推定時期は大正五（一九一六）年から大正七（一九一八）年頃である）、

人妻のあはれや「春の葱」（一）は芥川による末梢

及び、

妻ぶりに葱切る支那の女かな

というやや類似した断片及び句がある。私は実は芥川龍之介の「手帳」の電子化注も手掛けており（作業中）、最初の句については★こちら★、後者はこちらで確認出来る。前者は本句の草稿、後者の句はこの佐野花子を詠んだ句の改作ともとれる。特に「人妻のあはれや「春の葱」」の句については、★そこで★本「芥川龍之介の思い出」を引用しつつ、既に考察を行っている。是非是非、お読み戴きたい。ともかくもこの「切りなづむ新妻ぶりや春の葱」という句は、私は紛れもなく芥川龍之介が佐野花子に心から贈答した一句に他ならぬと考えているのである。

「ぼくは、これほど心酔されてしまったところをみると」とは芥川龍之介が今は佐野花子にすっかり心酔してしまっているという表明であることを注意されたい。

「さあ。そう言われるとたいへんだ。ぼくはこれで、なかなか難かしいんですよ。美人でなければだめ。そう、だめなんです。顔がいいばかりでもだめ。全体の均整がとれて恰も彫刻を見るが如くにありたいですね。それだけでもだめ。いつも愛の泉に浸っているような、そんなふうな細君でありたいものですよ」この芥川龍之介の女性観はすこぶる彼らしいと私などは腑に落ちる告白であると思う。しかして、底本に載る佐野花子の唯一の写真をみると、「いつも愛の泉に浸っているような」女性かどうかは別として、花子はまず誰もが「美人」と言うであろう顔立ちであり、しかも「顔がいいばかりで」はなく、まさしく龍之介が言う通り、「全体の均整がとれて恰も彫刻を見るが如くにあ」るのである！　嘘だと思われる方は、是非是非、図書館でも本書の写真をご覧あれ！

「話はどうしても彼の結婚をすすめるという方へ向かざるを得ません」既に「(一)」で注した通り、芥川龍之介はこの海軍機関学校に就職した十二月には龍之介の友人山本喜誉司の姪塚

本文（ふみ）と婚約し、文の卒業を待つて結婚する旨の縁談契約書を取り交わしているのである。花子の当時の記憶に誤りがないとすれば、龍之介は既に婚約者がいることを佐野夫妻に全く話していなかったことになる。そうして、私はその通り——龍之介は慶造にも花子にも婚約者の存在を黙っていたのだ——と思うのである。

「文楽に出てくる小春」「おさん」「小春」は近松門左衛門の傑作として名高い「心中天網島（しんじゅうてんのあみじま）」で紙屋治兵衛と心中する曾根崎新地の遊女紀伊国屋小春。「おさん」はその治兵衛の妻で、夫を愛する故に、小春へ一途な夫のため、小春の身請けを自ら勧め、その支度金をさえ拵えようとするけなげな女である。コードは治兵衛が小春の喉首を刺し、自らはおさんへの義理立てのために別に背を向けて首を吊って心中を完遂する。近松は本作で以って、相対死をするものへ、神としての創作者として、無残なる結末を用意して罰している、とも言えるように私は思っている。そうしてまた、自裁した芥川龍之介もある意味、現実の中で恋多く生きた自分自身に対して、「神」として自死を演じさせた、とも大真面目に思っているのである。これについて私は「芥川龍之介遺書全6通 他 関連資料1通」2008年に新たに見出されたる遺書原本 やぶちゃん翻刻版 附やぶちゃん注で少しく考察したつもりである。未見の方は、是非、お読みあれかし。

「尾上柴舟」（明治九（一八七六）年〜昭和三二（一九五七）年）は詩人・歌人で国文学者。岡山県苫田郡津山町（現在の津山市）出身。一高時代に落合直文に師事し、明治三四（一九〇一）年に「ハイネの詩」を刊行、金子薫園と共に「叙景詩」を刊行して、『明星』の浪漫主義に対抗、「叙景詩運動」を推し進めた。東京帝国大学文科大学卒業後、幾つかの教職を経ているが、その間、花子の在学した東京女子高等師範学校でも教鞭を執っており（ここまではウィキの「尾上柴舟」に拠った）、ここはその折りの授業風景の思い出に基づく。底本の山田芳子氏「母の著書成りて」によれば、東京女子高等師範時代に、花子は、

よどみなく坂を車の登るごとわがはたとせは過ぎさりにけり

と詠んで尾上柴舟に褒められた、とある（同歌の改稿と思われる相似歌は同書の花子の「遺詠」巻頭を飾っている。ちなみにそちらでは、

音もなく坂を車ののぼるごとわがはたとせは過ぎ去りにけり

となっている。「よどみなく」は当時の現在時制の青春の爽やかさがあり、後者は「はたとせ」を淋しく追想している枯れた哀感が漂うように感ぜられる。いい短歌である。

「さしも知らじな燃ゆる思ひを」「百人一首」の第五十一番、藤原実方朝臣の「後拾遺和歌集」「戀一」所収の（第六一二番歌）、

かくとだにえやは伊吹（いぶき）のさしも草（ぐさ）

さしも知らじな燃ゆる思ひを

の下の句。

「昼は消えつつものをこそ思へ」「百人一首」の第四十九番、大中臣能宣の「詞花後和歌集」  
「戀上」所収の（第二二五番歌）、

御垣守（みかきもり）衛士（ゑじ）のたく火の夜（よる）は燃え

晝は消えつつ物をこそ思へ

の下の句。孰れも、同年代の女へは、如何にもな、恋情の迂遠にして技巧的な何だかな和歌の引用である。因みに私は実は強烈な和歌嫌いである。悪しからず。」

### (三)

横須賀の波は退屈を重ね繰り返すように、寄せて来ては返し、返しては寄せて、またそのように平凡な変りばえもない街でありましたから、私たちの彼に対する関心は何にもまして張りのある歓喜に冴えたものとなっていました。なんという天与でありましたことか。

暑熱の海岸を三人が歩いたこともございました。浴衣がけの夫も彼も大きな麦藁帽をかぶり、私は紫の日傘をさし、博多の夏帯を締めていました。彼は一人、泳ぎが得意で抜き手を切って遊泳して見せました。もぐつて、しばらく海面にいないこともありました。海だけがきらきらかがやいて、もう、どこからも彼は出てこないように思えました。が、突如、浮かび上がって笑顔に白波をあびながら近づいて来るのです。岩の上には脱ぎ捨てた浴衣と麦藁帽子が風のない日中に灼けつくような形で投げ出されています。水泳の特技を見ることができたのも、私どもには意外なたまものでした。何につけても彼は特別な姿態をもって私たちの眼をよろこばせたのでございます。

彼は先に立って行動しました。海岸からぐっと手前の藪の中を歩くときも、どんどん歩いて行くのですが、そんな時は完全に独りで私たちから抜け出していました。何を考えているのか横顔も、うしろ姿も独りだったのです。その独りの中では彼自身の悩みや苦痛がのたうっていたのでございましょう。後になって考えれば、私どもの知らないところで結婚話が進んだり滞ったりしていたことになりまし、文筆の上でも内面的な格闘があつて意外と気の弱い蒼白な面を見せたときでありました。結婚問題に関することでは、某海軍士官の忘れがたみと云々とかで、それがまだよくまとまらないなどいうのを、仄聞した某京大教授が、

「それなら、うちの娘に」

というので自身付き添いで見合をしたところ

「どうも神経が繊細過ぎる」

とそのままになってしまったそうで、夫が申しますには、

「我々は龍ちゃんのファンだから、龍ちゃんなら誰でも飛びつくだろうと思うのだが。なかなか、そうも行かないのだね」

「そりゃあ、そうですね。まあ、私にしましても、夫という場合には、芥川様は怖いみたいに思われますもの。やはり家庭の主人となれば、あなたの方を私は取りますもの」

「そりゃ、そうだったろうが」

「危惧の念が起きますわ。ほんとに怖いみたい。誰でもいいというわけには参りませんでしょう。こちらであたたかく抱擁して上げなければ、うまく行かない方の様に思われてなりませんわ。私の幼稚な感じ方ですけれども」

文学的の問題では谷崎潤一郎との論争で、

「ぼく、ヘトヘトに疲れちゃった」

という龍之介を目の前に見ましたし、

「そこへ持って来て、批評家という奴が、ブツブツ言いますしね。批評家なんて無くもがなと思いますよ。ぼく、あれを読むとイライラしたり憂鬱になったりして困るんです。だから、もう、読まぬことにしましたがね」

それに対して私は、なぐさめとも励ましとも批判ともつかないような言い方で申し上げていました。

「ヘトヘトになれるなんて少々だらしがないわ。お心持ちが弱いんだわ。実力がありませんですもの。悠々と構えて大胆にしてらっしゃればいいのに。宅で自信満々と語られるときのようにしてらっしゃればいいのに。それとも本当に谷崎さんは苦手なのかしら。潤一郎々々々って親しそうにおっしゃるし、彼より優越を感じていられる口吻をお洩らしになるときもあるのに。不思議なこと。批評家ということなんて尚更だわ。気に喰わなければ一笑に付しておしまいなさい。でも、批評家というものに一応、目を通して、とつてもって、参考にするだけの雅量がほしいと思う。あまり小心過ぎてお気の毒なこと」

「お前はなかなか辛辣だね。ぼくは、ひどく芥川君に心酔しているのに」と夫は申しました。

「辛辣というのでもありませんわ。大好きですもの。ね、そんなに神経をすりへらされない方がよろしいでしょう。おからだにさわるといけませんものね」とお慰めしたのでございました。

「そうだと。龍ちゃん。人間、呑気にしてないと毒ですよ。そうは言っても、文学の方は世間一般の事と違って、しかも世間一般を相手にするものですから、いろいろ神経にもさわるでしょう。創作なんて突きつめて行くと、悩み無くしては駄目なことでもあります。が、ぼくの方はまあ呑気なものですよ」

すると彼は、

「本当に、佐野君はいつも、のどかに見えますよ。ぼくも、文学をやめて、天文でも初めようかな。月を見たり、星を研究したりしていたら、呑気なものでしょうな」

「あら。そういえば、私、思い出します。学校の二クラス上の文科生のお話ですよ。秋

の日光修学旅行のおり、夕食後、皆で中禅寺湖畔へ散歩に出かけました。あたりは夕もやに包まれ淡い月かげが照らし、何かしら、ロマンチックな宵でした。某先生は、いつも理科生とご一緒でしたが、ふっとお一人で文科生のところへ来られましたね。静かにお話しになるんです。ぼくは元来、文学が好きでその方面が得意だったのですよ。それで、文学方面へ進むつもりでしたが、この通り神経質でしよう？これで文学をやったら藤村操の二代目になるかも知れぬと思ひましてね。好きな文学をやめて理科へ行きました。しかし、ぼくは文学が好きだな。文学は実にいいなおっしゃるのですが、食堂に蠅が一匹いてもその日は食事ヌキ。でもね。優しい美しい奥さまが来られてからはお子様もお出来になり、とても穏やかになられたとのことですの。芥川様だって味気ない下宿をお出になってご結婚遊ばしたら、ずっとお気楽になれましてよ」

すると彼は言うのでした。

「ええ。ありがとう。本当にそうかもしれませんね。せいぜいお邪魔して家庭のふんいきに浴させていただきましょうか」

私は彼の神経質を憂えてしみじみ申し上げたのですが、彼の答えはちょっと当方をイナしたものでございました。

又、或る時の話ですが、夫が帰宅して申しますには、

「今日ね。年度末賞与の辞令が出て皆ざわざわしている時にね、芥川君はぼくのところへ来てさ。『内緒々々』って辞令をスーブの中へ放り込んで燃しちまったよ」

「あら、どうしてそんなこと」

「ぼくも驚いてね。いろいろ聞いてみると龍ちゃんは養子で、両親は義理の親子。叔母上なる人もなかなか複雑な家庭の人なんだって。それで、こうしとくのが一番いいんだって言うのさ。そうかも知れんなあ。その使途についても親子意見が一致するとは限らんだろうから。辞令などなければ、芥川君の思うように運ばせても万事うまく行くからね。なかなか考えてるじゃないか。龍ちゃんを非難する気には、ぼくは、なれない。むしろ同情するね。実の親子の辞令なら、そんなに気を使うことはないからね」

「本当ね。そう伺ってみると芥川様なかなかお気苦労なのですな。私、学校で教わった倫理のお話に適ってるんですもの。深作教授のお話でしたのよ。人と屏風は、すぐには立たぬということがある。殊に家庭内のことは余り物ごとをはっきりさせるより、多少理屈はくります方がいい場合があると説かれましたわ。つまり、今のようなことですね」

私は、うんと難かしい家庭へ嫁いでそこを円満に収めてみたらさぞ楽しいだろうと、ひそかに思ったこともありました。しかし、実際にはとてもたいへんなことのようにです。二人きりの呑気なその頃の生活は、私には、まさに適材適処だったと思います。そして、改めて彼の気苦労に同情いたしました。

気苦労と言えば又、別の気苦労と申しましょうか、彼は或る時やって来て、こう言われるのです。「やぶちゃん字注…ここには句点がないが、脱字と見て、特異的に附した。」

「この頃、東京の悪友たちが、ぼくのコシッポを飛ばしてるんですよ。奥さんもご存知の、

あの小町園の女中ね」

「ええ。あの可愛いお千代さん」

「そうですよ。ぼくが、奴にぞっこん参ってて、それで、しげしげ行くなってね。それが今日、教官室で話題になりましたね。ぼく、善友諸君にすっかり冷かされてしまいましたよ。もちろん、佐野君からですよ。ゴシップなんてデタラメと解っていても、中には信ずる人もいますからね。濡れ衣も甚だしい。お二方と行く時、あれがちよこちよこ出て来まして……失礼ですが、つい、ぼくは奥さんと比較して見るんです。いくら、片えくぼがあつて可愛くても、教養のない者は駄目だと思うのですよ。月とスッポンだと。これは實際のことです。決してお世辞ではありません。真実そう思うのですから、誤解のないように願います」

すこぶる真面目に彼は言うのでした。新婚生活の、これといって用事もなく、半日女学校に勤めれば、ひまで仕方がなかった私は、このような話を聞かされたり、在学中、不充分だった英語のおさらいを彼に見てもらったり、それが亦、結構たのしいことだったのです。ロングフェローのエバンゼリンなど朗読しても呉れました。

「お前、嬉しいだろう。天下の芥川君に教えてもらえるんだ。ご無理を願うんだから、また腕にヨリをかけてご馳走するんだね」と夫も上気嫌でございました。

「佐野君は何も知らぬ顔してますがね。教官室で外人と話のできるのは佐野君なんですよ」  
「あら、そうですのか？ そんなだとは存じませんでした。外国へでも行きたい下心があるのでございますね」

「ああ。そうかも知れないねえ。龍ちゃん、ぼくがもし外遊をしたら、君に何かよいものを買って来たいんです。何がいいですか」

「有難う。ぼくはステッキが好きです」

「龍ちゃんにふさわしい極めてハイカラなのを求めて来ますよ」

これは約束になってしまいました。後日、夫は本当に外遊して約束通りのステッキを二本持ち返りましたが、一本は自分が持ち、残る一本は彼の手に渡せぬ間柄になってしまいましたので、長いこと、そのステッキは押し入れの中や、果ては故郷の土蔵などに埋藏され、ついに蟲ばんで忘れ去られてしまうのですが、スネークウッドの洒落れたものでした。

それから例の小町園のお千代さんは、これ亦、後日に文士連の口の端にのぼるK夫人となつて来るようでございます。芥川をめぐって取り沙汰される女性の中にちらちらとあがつて来るような存在になろうとは、可愛いお千代さん時代には想像もつきませんでした。私の方は誰も知る者もない存在で、ずっと家庭を守り通して来たわけでございます。

「やぶちゃん注…「暑熱の海岸を三人が歩いたこともございました。浴衣がけの夫も彼も大きな麦藁帽をかぶり、私は紫の日傘をさし、博多の夏帯を締めていました。彼は一人、泳ぎが得意で抜き手を切つて遊泳して見せました。もぐつて、しばらく海面にいないこともありました。海だけがきらきらとかがやいて、もう、どこからも彼は出てこないように思えまし

た。が、突如、浮かび上がって笑顔に白波を遊びながら近づいて来るのでした。岩の上には脱ぎ捨てた浴衣と麦藁帽子が風のない日中に灼けつくような形で投げ出されています。水泳の特技を見ることができたのも、私どもには意外なたまものでした。何につけても彼は特別な姿態をもって私たちの眼をよろこばせたのでございます」この一段は実に映像的で素晴らしい。私たちの知らない芥川龍之介の若き日の姿が髣髴としてくるではないか。ロケーションは大正六（一九一七）年、芥川龍之介、満二十五の独身最後の夏と同定出来る。事実、次の「四」で花子は「大正六年夏と言えば、春に結婚して丁度、つわりになる頃であったわけ、彼の遊泳を見ながら海岸に佇んだ日はこの少し前になるのだと回想いたします」と記しているからでもある。

「後になって考えれば、私どもの知らないところで結婚話が進んだり滞ったりしていたことになります」「滞ったりしていた」というのは誤り。文との婚約（既に示した通り、海軍機関学校に就職した十二月に婚約し、同時に、文の卒業を待って結婚する旨の縁談契約書を取り交わしている）関係にはこの時期、滞りはなかった。但し、前に述べた通り、芥川龍之介は文との婚約を佐野夫婦には長く黙っていたと考えられ、花子のこの謂いに不審は全くないのである。

「某海軍士官の忘れがたみ」後に妻となる塚本文は三中時代の同級生で親友であった山本喜誉司の姪（龍之介より八歳年下。婚約当時は満十七歳）で、文の父塚本善五郎（妻が喜誉司の長姉鈴（すず））は元飛騨高山の士族出身であったが、海軍大学卒業後、日露戦争で第一艦隊参謀少佐として明治三七（一九〇四）年二月に新造された戦艦「初瀬」に乗艦して出征したが、同年五月十五日、「初瀬」が旅順港外で機械水雷に接触して轟沈、御真影を掲げて艦とともに運命をともししている（以上は鷺只雄編著「作家読本 芥川龍之介」（一九九二年河出書房新社刊に拠った）。

「それがまだよくまとまらないなどののを、仄聞した某京大教授が、／＼それなら、うちの娘に」／というので自身付き添いで見合をしたところ／「どうも神経が繊細過ぎる」／とそのままになってしまったそうで「このような話を私は知らないが、文との婚約以前ならあったとしても不思議ではなく、婚約中であっても、「まだよくまとまらない」などと龍之介が五月蠅い慫慂に對し、うっかり誤魔化して言ってしまったとすれば、当時なら、あっても少しもおかしくはないと思われる。さらに言う、佐野夫婦が結婚を慫慂するのに辟易した龍之介がデッチアゲた話とも考えられる。この叙述は、どうみても佐野慶造の話ではなく、芥川龍之介自身の語りと読めるからである。そう読んでこそ、慶造の「我々は龍ちゃんのファンだから、龍ちゃんなら誰でも飛びつくだろうと思うのだが。なかなか、そうも行かないのだね」という台詞が如何にもしっくりくるではないか。

「谷崎潤一郎との論争で、／＼「ぼく、ヘトヘトに疲れちゃった」という龍之介を目の前に見ました」これは、かなりおかしな叙述には一見、見える。谷崎潤一郎（芥川龍之介より六歳年上）は大学も、また『新思潮』でも先輩に当たり、作品集「羅生門」の出版記念会（大正六（一九一七）年六月二十七日に日本橋のレストラン「鴻の巣」で行われた）にも出席し

ており、その直後の七月初旬に佐藤春夫とともに谷崎宅を訪問して、交流が深まっていた、まさに谷崎との親近性の増した時期と合致するからである。寧ろ、龍之介が「ヘトヘトに疲れ」た音を挙げるような「谷崎潤一郎との論争」と言ったら、これはどう考えても、所謂、〈筋のない小説〉論争であるが、これはまさに龍之介自死の年の三月以降のことであるから時期が齟齬し、花子のただの勘違いにしてはおかしく、それこそ研究者の誰彼から『妄想』と指弾されるかも知れぬ。しかし、である。当時の文壇の寵児とはいえ、たかがデビュー直後の若造龍之介が、親しくなったとはいえ、一種、精神的なサディズム傾向を強く持つ、かの谷崎から、当時、イラつくような波状的論議を吹っかけられていた可能性は、これまた、十分にあると思われ、私はこれをあげつらって、花子の叙述が変だ・おかしい・妄想だなどとは、これっぽちも思わない、と断言しておくものである。いや、あらゆる面で後輩であった龍之介、礼儀正しい龍之介にとっては、脂ぎった谷崎の、齒に物着せぬ龍之介を含めた文壇への批判批評を黙って拝聴しつつも、実は内心、大いに辟易し、「ヘトヘトに疲れ」きっていたのだと考えた方が、私は遙かに腑に落ちるのである。後の花子の台詞の「潤一郎々々々って親しそうにおっしゃるし、彼より優越を感じていられる口吻をお洩らしになるときもあるのに」というのも、そう考えた時にこそ、如何にも自然に響いてくるではないか。

「とつてもって」「取って以って」批判的だったり、見当違いだったりする馬鹿げたものでも、無視せずに取り挙げて、それを逆手に取ったり、当たり前に当然の退屈な批評箇所を見た目上、認めてあげたりして、といったニュアンスであろう。

「雅量」人をよく受け入れる大らかな心持ち。

「学校」「文科生」「秋の日光修学旅行」「理科生」とあることから、これは東京女子高等師範学校文科（現在の御茶の水女子大学）時代の話である。当時の東京女子高等師範学校が四年次の十月に日光修学旅行を行っていたことが、[奥田環氏の論文『東京女子高等師範学校の「修学旅行」](#)（PDF）で確認出来る。

「藤村操」彼については、私の共時的抄出電子テキスト注である――『[東京朝日新聞](#)』大正3（1914）年8月3日（月曜日）掲載 夏目漱石作「心」「先生の遺書」第百二回――の『[■「Kの遺書」を考えるに当たって――藤村操の影](#)』で、最も詳しく述べているので、そちらを是非、参照されたい。

「龍ちゃんは養子で、両親は義理の親子」芥川龍之介の養父芥川道章の妹であった新原（にいばら）フクが龍之介の実母であった。

「叔母上なる人もなかなか複雑な家庭の人なんだって」恐らくは田端の芥川家で同居していた実母フクの姉である伯母芥川フキ（安政三（一八五六）年～昭和一三（一九三八）年）を指す。彼女は実母の係属から見れば伯母に当たるが、養父道章の妹でもあるので、養父の係属では「叔母」と記しても実はおかしくない。「なかなか複雑な家庭の人」と言う訳ではないが、フキは幼少時の怪我で片方の眼が不自由となり、生涯、独身を通してゐる。芥川が乳飲み子の頃から母親代わりとなり、養育に当たって、彼に一身の愛情を注いだ。芥川は、例えば、[「文學好きな家庭から」](#)（大正七（一九一八）年一月『文章俱樂部』）で、『その外に

伯母が一人ゐて、それが特に私の面倒を見てくれました。今でも見てくれてゐます。家中で顔が一番私に似てゐるのもこの伯母なら、心もちの上で共通點の一番多いのもこの伯母です。伯母がゐなかつたら、今日のやうな私が出来たかどうかわかりません』とまさに――育ての母――とも言うべき言い方で記している。しかし一方で、遺稿「或阿呆の一生」には（リンク先は孰れも私の古い電子テキスト）、

\*

### 三家

彼は或郊外の二階の部屋に寝起きしてゐた。それは地盤の緩い爲に妙に傾いた二階だつた。

彼の伯母はこの二階に度たび彼と喧嘩をした。それは彼の養父母の仲裁を受けることもないことはなかつた。しかし彼は彼の伯母に誰（たれ）よりも愛を感じてゐた。一生獨身だつた彼の伯母はもう彼の二十歳の時にも六十に近い年よりだつた。

彼は或郊外の二階に何度も互に愛し合ふものは苦しめ合ふのかを考へたりした。その間も何か氣味の悪い二階の傾きを感じながら。

\*

とも述懐しており、龍之介のフキへの愛憎半ばした複雑な感情が見てとれる。なお、知られた龍之介の辞世、

自嘲

水涕や鼻の先だけ暮れのころ

龍之介

があるが、龍之介は、昭和二（一九二七）年七月二十四日の午前一時半頃、この伯母フキの枕元にやってくると、「伯母さん、これを明日の朝、下島「やぶちゃん注」芥川家の主治医で俳人でもあった下島勲（いさお）。」さんに渡して下さい。先生が来た時、僕がまだ寝ているかも知れないが、寝ていたら、僕を起こさずに置いて、その儘まだ寝ているからと言つて渡して下さい。」と言つて短冊を渡している。その後龍之介は薬物を飲み、床に入り、聖書を読みながら、永遠の眠りに就いたのであつた。

「こうしとく」「こう、しておく」の意。ポーナスの辞令を家に持ち帰つてその給与配布が知られないよう、ここでかく処理しておくこと。

「深作教授」不詳。当時の知られた倫理学者には深作安文（ふかさくやすふみ 明治七（一八七四）年～昭和三七（一九六二）年）がいるが、彼に同定は出来ない。

「新婚生活の、これといつて用事もなく、半日女学校に勤めれば、ひまで仕方がなかつた私」新婚時代の彼女の女学校勤務（前出既注。当時の横須賀高等女学校）が午前中勤務の今でい

う非常勤講師であったことが判る。

「ロングフェローのエバンゼリン」アメリカの詩人ヘンリー・ワーズワース・ロングフェロー (Henry Wadsworth Longfellow 一八〇七年～一八八二年) の最も知られた一八四七年作の、架空の悲恋叙事詩「エヴァンジェリン：アカディの話」(*Evangeline: A Tale of Acadie*) 「これは約束になってしまいました。後日、夫は本当に外遊して約束通りのステッキを二本持ち返りましたが、一本は自分が持ち、残る一本は彼の手に渡せぬ間柄になってしまいましたので、長いこと、そのステッキは押し入れの中や、果ては故郷の土蔵などに埋蔵され、ついに蟲ばんで忘れ去られてしまうのですが、スネークウッドの酒落れたものでした」「蟲」は底本のママ。これが後に、本書の内容を素材とした、田中純の小説「二本のステッキ」(昭和三一(一九五六)年二月発行の『小説新潮』初出)の題名となる。私のブログ記事『芥川龍之介の幻の「佐野さん」についての一考察 最終章』でも取り上げているが、来年二〇一七年一月一日午前零時零分を以って田中純の著作権が切れるので、来年早々には、このブログで「二本のステッキ」の全電子化をしようと考えている(なお、TPPが本年中に承認されても、著作権法の改訂が成されない限り、著作権延長は出来ないはずである。やったら、これはもう、日本は法治国家ではない)。

「小町園のお千代さんは、これ亦、後日に文士連の口の端にのぼるK夫人となっている」「お千代さん」も「K夫人」も不祥。識者の御教授を乞う。」

#### (四)

機関学校の教官室は芥川龍之介とはやはり関係浅からぬ場所でした。そして、独身でいるだけに彼の結婚話もやはりその場において重要味を帯びることがありました。

夫は或るとき帰宅してこう申しました。

「今日、木崎校長から文官一同へ話があったんだ。芥川君の縁談について、前々から話があったらしいのだが、校長はぼくと兵学校の同期で、日本海々戦で戦死した海軍大佐の未亡人から、娘の縁談について、相談と調査を兼ねての依頼があった。その忘れがたみなる令嬢は跡見高女とかに在学中で、来年三月卒業の予定だとさ」

「あら。やっぱり、あのお話の方ですね」

「そうらしいね。更に校長の言われるには、未亡人の話によれば芥川家からは頻りに早くと言つて来る由で、早くきめて式をあげてほしいそうだ。以前から校長もよく知った間柄ではあり、はっきり決めようと思うが如何なものか。なお、現在の芥川君の状況を知らせてくれと頼まれたから、どうか文官の諸君、ありのままに話してくれと言われるので、文官一同が芥川君なら大丈夫ですと太鼓判を押したわけだよ」

「あら。そうですか。結構でございましたわねえ。あんな難かしいことばかりおっしゃっても、やっぱり、そのお嬢さまのこと気に入ってらしたのですわね。まずまず万々歳ではご

さいませんか？」

「そこで、なお、校長の言われるにだ。芥川家では大変急いでいて、もし、良いとなったら、今、婚約しておいて、来年早々、令嬢の卒業を待たないで、挙式したいと言ってるそうだよ。また、馬鹿に急ぐもんだな。善は急げというから、それは結構なんだが、お前が龍ちゃんに早く早くと言うものだから、そうなったのではないかねえ。まさか。そりゃ他にいろいろ事情があろうさ。いずれにしてもよかったよ。ねえ。あれほど善良にして気弱な芥川君を、いつまでも一人、下宿に放っておく手はないから」

「本当ですわ。これで大安心というところですよ」

こういう話がありましたから、その後またどうなりましたが、私どもには聞こえて参らず、暑中休暇がまいりました。大正六年の夏でございますが、東大文科に公開講演のあることを彼から伝え聞きまして、実は、夫と共にどこか温泉で過ごつもりでおりましたのを、中止して、この公開講演に出席したいと夫に相談いたしました。一も二もなく承知してくれまして、その手続きは彼に依頼いたしましたのでございます。彼は快諾してくれまして私もすっかり出席の気分になっておりましたところ、どうも気分がすぐれなくなり、つわりであることを確認されましたため、聴講の見込みはなく、温泉に行く元氣は更になく、家に引き籠ることになり、又、取り消し手続きも彼に依頼するということになりました。大正六年夏と言えば、春に結婚して丁度、つわりになる頃であつたわけで、彼の遊泳を見ながら海岸に佇んだ日はこの少し前になるのだと回想いたします。私は暑い夏の毎日を、家にごろごろしておりますが、彼が次のようなことを話してくれたのを思い出しております。

「これは結婚問題とは別なことですがね。横須賀の女学校の、あの、ねずみ色の制服を実は、ぼく、あまり感心しないのですが、あの制服を着て汽車通学しているお嬢さんに素晴らしい方がいますよ。いいなあと思つて見ている間に、この程、ぼく、無意識にお辞儀をしてしまったんです。あとでハツとしましたが、もう、取り返しはつきません。大失敗をやっちゃつた」

「おや。どこから乗りますの？」

「逗子からです」

「どんなふうなお嬢さん？」

「背五尺とちよつとかな。容姿が実にすんなりしている。あんな木綿縞の制服を着ていて、それで又、実にすばらしいんですから大したものですね。足は恰も、かもしかのようなんです」

「顔は？」

「優しい愛嬌顔に眉が美しく、眼も亦、美しい黒眼勝ち。鼻がちよつと上を向いてますけど」

「ああ。教え子の鈴木たか子ですよ。実科二年で成績もよく温なお嬢さんですよ。あなたにお辞儀されて光栄と思つているでしょうねえ」

「どういふところのお嬢さんか、わかつてるかい？調べてごらん。汽車通勤も亦楽し、か」

そうかと思うと、こんなこともありました。

『ぼく、この程、令嬢中条百合に会いましたよ。よく勉強してるらしいんですが、ぼくと初めて会うというのに、派手な友禅の前掛けをかけてるんです。驚きましたね。これが趣味なんだって。自分で説明してましたが、ちょっと変な感じを受けましたよ』

「ああ。中条さん。私のお茶の水在学中、付属高女にしまして、文才があると評判でした。私よく存じていますわ」

「頭がよかったですか」

「それがね。国語は満点で、数学はゼロというあんばいで評判でした」

「世の中は狭いですね。奥さんがご存知だとは思わなかった」

「龍ちゃん。そういう方面の令嬢と結婚されてはどうです？」

「さあ。ぼくは、あまり好みませんね」

彼にもいろいろと気迷いがあったようです。右の二つの例など、判然とした確証あるものでないながら、何となしに迷わしげなようすを示す例になるとも考えました。教官室での先日のはっきりした話で、いずれ定まることであろうと思い、自分の気分すぐれぬ夏の日々を重い心で過ごしておりました。

そうしているうち公開公演は開催され、彼から三枚も切手を貼った重い封書が届けられました。それには東大における講演のようすが、こまごまと記されてありましたのです。

何々夫人、何々百合子女史など、多勢の注目を集めているなどと書いてあります。そして末尾に、「これは奥さんに『ああ自分も』という欲望を起こさせようために書いたのだ」と解釈までつけてありました。

次の便りには、

「どうもこの頃、癩癩が起きて家人を困らせていたが、ようやく収まったから、奥さんも安心してくれ」

などと書いてこられました。そして、まあ、

「原因は親しらず菌発生のため」

としてあるのです。思わず笑い出してしまいました。

「いよいよ休みが終わろうとするので、心細くなっています。『航海記』を封入しますが、これは私のスクラップブックに貼る分ですから、お読み済みの上は私までお返し下さい。さて、私はこの手紙を書きながら大いに良心の苛責を感じています。これは特に奥さんに申し上げます。もっと早く書くべき手紙もあれば、もっと早く送るべき『航海記』でもありました。誠に申しわけありません。しかし私が用事で忙しくない時は、遊び回るので忙しいことをお察し下さい。横須賀に善友がいる程それほど、東京には悪友がしまして、私は彼らに誘惑されては無闇に芝居を見たり音曲を聞いたりしていました。それで、生来の筆不精が、ますます不精になってしまったのです。今、悪友のことごとくが帰ったところです。そのあと甚だ静かな夜となりました。私は小さな机と椅子を縁側へ持ち出してこれを書いているのです。」

即興にて 銀漢の瀬音聞ゆる夜もあらん 龍之介

これで止めます」

私はどこへも出かけられぬ憂鬱な日々に、こういう彼の手紙を貰うことが何より嬉しくて日に幾度となく受信箱を覗きに行きました。

そうして夏休みは過ぎてしまいました。相変わらず、ぶらぶらしながら、それでもいつか軽くなってゆく、つわりを、やはり持てあましながら、故郷信州を思い浮かべるのです。親の元にいれば、こんなとき、どんなにか気楽であろうと、つい思ったりして、何でも自分でやらねばならない家事を少々いとわしく思うしだいでした。信州の富士が不思議と思ひ出されました。大気の中に浮かぶ朝な夕な富士のことを彼にも語った日がありました。

「奥さんはお国自慢ですね。ぼくのような都会児にとって実際、大都会は墓地です。人間はそこに生活していないという感じで適いません」  
と、彼は言うのでした。

「ぼくも、田舎で生まれ、豪荘な自然を見て荒っぼく育てばよかった。もっと線の太い人間になれたかも知れない」

とも言いました。すると夫は、

「芥川君。そんなことを言うけれど、ぼくは都会のよさを充分みとめる方ですよ。まあ田舎に行つて一日もいてごらんなさい。恐ろしく退屈して来ますよ。不便極まる暮らしですよ」

三人はそこで笑つたのですが、夫の話すのをなお聞いていますと、かつて、一夏を田舎で勉強する氣になったことがあります。夫は一頭の馬を雇ひ、書物をどっさり背負わせ運ばせたところ、都育ちのためすぐ都恋しくなり、本は一冊も読むことなく、すぐ又、馬の背に書物を託して帰京したというのでした。彼は、「なる程ね」と、じつと考え込んでしまいました。そして「馬」ということばで思ひ出したのでしよう。

「ぼくは、あの馬も哀れなのだが、牛もそうです。牛の鼻に通された鉄の輪を見ると非情な氣がしてなりません」

すると夫は、やはり別でした。

「しかし、我々人間だつて生きて行く苦しみは、なまじ頭脳があるだけ、あれより、たいへんなですよ。だけど、やっぱり牛に生まれるより、人間に生まれたいものです」

彼は牛を哀れだと言ひ、夫は人間の方がよりたいへんだらうが、やはり人間に生まれると言っているのです。私は聞きながらこれが文科と理科の違いかしら。それとも性格の違いかしらと考えていました。そして、彼龍之介の神経の暗く尖鋭なのに戦いたことでした。

彼には確かに付きまとう影のようなものがあつたと思います。

そんなことより、彼から書いて貰つた俳句の数々を書き並べて見ましよう。

紫は君が日傘や暮れやすき 龍之介

これは確かにあの夏の海への印象になっております。日傘を紫と覚えていてくれた懐か

しさ。私にとりましてまことに得がたい一句なのでございます。

揚州の夢ばかりなるうすものや 龍之介

これも夏の句で、うすものというところに、何か掴みきれないほのかな夢を残してあるように思われます。

青簾裏畑の花をかすかにす 龍之介

これも真夏の一角を視点としてあります。かすかな花にやはり夢が託されているような味わいです。

読み足らぬじゃがたら文や明けやすき 龍之介

一夜、読み通して朝になり、まだ読み足らないという感懷でございますが、やっぱり何かが残されている思いでしょう。

衣更へお半と申し白歯なり 龍之介

やはり、夏へ向う頃の一肌すがしい女の様相で半と名づけてあり、白歯というのはまだ歯を染めてない女：もちろん、江戸時代あたりにさかのぼっての材ですが、おはぐろに染めてない白歯の時代、まだ嫁がない女の清しさを言っているのでしょうか、やはり手触れないものへの哀歎とでも申すような芥川流の好みが出ているように思います。

天には傘地に砂文字の異草奇花 龍之介

これは彼の中にある異国好みが奇想天外な形で出た奇術のような不思議さを持ったものと思います。キシタンバテレンの語から傘をひらき、花を咲かせた連想でもございましょうか。

花笠の牡丹に見知れ祭びと 龍之介

お祭りの情景から出たものと思います。江戸っ子の彼はこんなところも垣間見て心に残していたと思われれます。

廃刀会出でて種なき黄惟子 龍之介

このことはよく解しかねますが。

毒だみの花の暑さや総後架 龍之介

夏の句でございますが、結句で、暑さの陰のやや冷やつこさが感じられます。おもしろい視点だと思えます。このような句を興に乗って白紙に書いてくれました。おそらくその時に、頭にのぼって来るもの、日ごろ頭にとめていたものが、一度に湧き出して来るときであったでしょう。

次に和歌についてですが、私がまだ自作の歌を見せては、何か言って頂いていた頃のことでございます。

柿の実は赤くつぶらに色づきて君を待ちつつ秋更けてゆく 花子

「おやおや。柿の実が、ぼくを待っていてくれるんですね。これは恐縮至極です」もちろん、柿の実には私の心が託されてありまして、私が彼の来訪を待つという意味なのです。それを感じとってくれています。

朝戸出に一本咲けるコスモスの花見てあれば君ぞ恋しき 花子

これは丁度、来訪されたとき、主人は出張中で不在でした。その思いを述べたものでございました。ちょっと寂しくつまらぬところへ、来て下さいまして嬉しかったことを思い出します。夕食は怠けてお寿司をとり、ビールは止してお茶とココア、シュークリームと果物だけで、お話に身を入れました。

暮れてゆくみ空眺めて佇めば雁なきてゆく父ます方へ 花子

これは信州にいる父を慕って作歌したものでした。

果てしなきみ空仰ぎて得ることは雲なかりきといふ安らけさ 花子

これは晴れた日の大空に対する感慨であり、同時に悩みなき自己の述懐でもありました。

大空はいよよ冴えたり仰ぎみる瞳に写る上弦の月 花子

木犀の花の香りをあびて立つ朝な夕な秋のわが庭

大輪の黄色き菊のいみじさにつとふれし手のつめたきあした

ほのかにもばつと漂ふ一輪の菊のかをりぞ朝のよろこび

わが庭の紅の芙蓉の色ましぬ秋のあしたの雨のめでたさ

萩のはな月の光に輝きて薄紫に匂ひこぼるる

悲しみも憂ひも持たぬ身なりぞと思ふ端より物案じする

かりそめのことに憂へてかりそめのことに心の和みけるかな

いささ川水のめでたささらさらと底のさざれの数みせてゆく

いささ川浮びては消ゆるうたかたのそれにも似たる我が思ひかな

思ひ葉を流して吉と占ひぬ心うれしき朝なりしかな

何ごともしとみて皆喜ばむさやけき秋に心安かれ

針もちて物縫ふ折の安らけさ静けさにただ命死なまし

誠ある我に生きむと願ひけり君や知りますわれの心を

というふうにはノートに書きつけてある歌をお見せしました。彼はずっと読んでいて、

「この中で、ぼくは、「針もちて物縫ふ折の安らけさ静けさにただ命死なまし」が一番好きですね。ぼくも、そんな心境を経験しますよ。だが、奥さんのお歌は優しくてきれいですね。全部よく見えてくる。もう、添削なんて止めますよ。拝見するだけで、自然と心が和んで来ますよ。不思議だ。実際不思議だと思うんです。どうか、沢山作っておいてぼくを慰めて下さい。拝見するのが楽しみだけです。ところで「何ごととも言はじとすれどしかすがにとどめかねたるわが涙哉」これだけはFさんが作られたお歌だそうですね」

「あら。まじっておりまして。ご存知なのですか。この一首を。まあ」

「ええ。ええ。ご婚約中、ぼくはあなたのお歌を佐野君から拝見していましたし、ご結婚なさるとき、この一首を、つまり藤原咲平君が詠まれたことは、その後伺ってるんです」

「まあ。なんでも主人は申しますこと」

「それはそうですよ。ご婚約中からぼくと佐野君は、どんな奥さんがいいとか何とか、話

し合っていましたよ。呑気な佐野君が女房操作法も知らないで大変と心配でもしたんですよ。来られたら、どういう女性か、ぼくが見定めて上げましょうとも約束してあったんです」

「まあ。そんなに……」

「大丈夫ですよ。みごとパスですからね。それどころか羨やましい限りになってしまってるんですから」

結婚前に男同志というものは何を話しているか解らないと思い赤面の至りでございました。

「その藤原君ですが、あなたが嫁がれる時この歌を詠まれたとは、ただごとじゃない。理学方面では、彼、もはや、権威ですが、文学方面も豊かであられるようですね」

「ええ。どの方面にも優れた本当によい方でございます」

「このお歌は、なかなか深刻ではありませんか。佐野君へあなたが嫁がれるときのお歌だというだけに、しみじみとしたものがあり、いい歌ではありませんか」

どうして、その一首がそこに書きしるされていたのか、私もうかつだったと思います。自作をお見せしているときに、そういう人の一首が記されているとはうかつなことでございます。それを目ざとく見つけられその事情まで知られており、ちゃんと覚えられていたとは驚いたこと였습니다。

「ぼくは大体、俳句ならやりますが、和歌もなかなかよいものだと思うようになりました。これは奥さんのおかげですが。いや、和歌は本当にいいものだ。近々、ぼくも、もっと和歌をやってみようと思いますよ」

「あの私。芥川様にだけはお耳に入れて解って頂きたいと思っていたことがございますのよ」

「一たい、それは何ですか」

「覚えていらっしゃいますか。あの春のころでしたけれど。私に下さいました俳句の中で、

花曇り捨てて悔なき古恋や 龍之介

というのがございました。あれを頂いたときちょっと意味が解らなくて。芥川様ご自身のことかとも思ってみたりしまして」

「ああ。あれについては、ぼくも、奥さんにお話しして置きたいと思っておりました。

ぼく、あれを差し上げて、その後、奥さんとお付き合っているうち、ひよっとして禍誤を犯していたのではないか、奥さんはそういう方ではぜんぜんないのに、これはしまった、と時々、意識に浮かべては気にしていたのですよ」

「さすがは芥川様でいらっしゃいますわ。根も葉もない噂が飛んでちょっと困りましたけれど、でも、佐野だけ理解してくれましたわ。で、世間のことは構いませんけれども芥川様にだけは解って頂きたいものと、いつも思っていましたの」

「よく解りました。ぼくの罪は万死にも値いしましょう。徒らに風評を信じて、ああいう

俳句をお目にかけたとは、軽卒をお許し下さい。深く取り消しますから」

と、深刻な顔して黙ってしまいました。別に彼を詰問したわけではありませんのに、例の一句が、ふとしたことから或る方面へ公になって、いろいろ取り沙汰されたことがあったからです。今、考えますとこの俳句の意味は、「お互いに、ともかく、今までの恋人のことなど忘れてしまう」ということではなかったかと思うのですが、どういふものでございましょう。いまだに判然といたしません。

秋立って白粉うすし※夫人 龍之介

「やぶちゃん字注…「※」は「郭一（おおざと）＋虎」。」

白粉の水捨てしよりの芙蓉なる 龍之介

これはその折に下さった俳句で、説明をおつけ下さいました。  
「土曜日には奥さんが、白粉をつけておいでのそうですね」

妻振りや襟白粉も夜は寒き 龍之介

とも書いて下さいました。

私は大体、白粉をつけることが嫌いで、余りお化粧をしなかったものですから、それを材になさったのでございました。それも、夫に注意されて、たまに刷く程度なので、かえって目立ったことになりました。どうか。號夫人とは中国の昔、蛾のような眉をわずかに指で払うのみで君前にまみえた麗人のことを申します。白粉をつけない私の感慨を高くお汲みになつたような句と思います。

こうして俳句をいただいたり、拙歌をお目にかけたり、お話を伺ったりのひとときは又過ぎ去りました。

残念乍ら、その後、歌をお見せする機会は無くなりました。「もう、見る事ができなくなりましたから。あしからず」の、あのおことばによりました。

「やぶちゃん注…佐野花子自身の短歌群（一首他者のものが含まれる）以外の前後行空けは底本のままである。

「木崎校長」表記は「木佐木」の誤り。[ウィキの「海軍機関学校」](#)によれば、[横須賀海軍機関学校の歴代校長の中に木佐木幸輔機関少将という人物がおり、彼が同校校長であったのは大正五（一九一六）年四月一日から大正六（一九一七）年十二月一日までとあるので、まさに時期としてぴったり合うからである。](#)

「今日、木崎校長から文官一同へ話があったんだ。芥川君の縁談について、前々から話があ

ったらしいのだが、校長はぼくと兵学校の同期で、日本海々戦で戦死した海軍大佐の未亡人から、娘の縁談について、相談と調査を兼ねての依頼があった。その忘れがたみなる令嬢は跡見高女とかに在学中で、来年三月卒業の予定だとさ」この内、「校長はぼくと兵学校の同期」の「校長とぼく」を、校長と話者である佐野ととらないように。佐野慶造は明治一七（一八八四）年生まれで、東京大学物理学科卒であり、前の横須賀海軍機関学校の校長の木佐木は機関少将、しかも調べてみると、日露戦争自体に相応の高官として従軍している（個人ブログ「Para Bellum」の[こちら](#)で写真（日露戦争後の集合写真の中に木佐木を発見）から「兵学校の同期」であるはずが、ない。ここは「校長は『ぼくと兵学校の同期で、日本海々戦で戦死した海軍大佐の未亡人から、娘の縁談について、相談と調査を兼ねての依頼があった。その忘れがたみなる令嬢は跡見高女とかに在学中で、来年三月卒業の予定だ』と言った」の謂いである。さて塚本文、後の芥川文であるが、既に述べているので、ここでは[ウィキの「芥川文」](#)を引いて纏めとしておく。芥川文（ふみ 明治三三（一九〇〇）年七月八日〜昭和四三（一九六八）年九月十一日）は『東京府生まれ。海軍少佐・塚本善五郎の娘』。善五郎は日露戦争で第一艦隊参謀少佐として明治三七（一九〇四）年二月に新造された戦艦「初瀬」に乗艦して出征したが、同年五月十五日、旅順港外で「初瀬」が機械水雷に接触して轟沈、御真影を掲げて艦とともに運命をともにした。『葬儀に参加した東郷平八郎連合艦隊司令長官は文を抱き上げ、秋山真之参謀はピアノを練習するよう薦めた』という。『一家の大黒柱を失った母は、実家である山本家に』文及びその弟の八洲（やしま）とともに寄寓するが、この時に既に文は、母の末弟であった『山本喜誉司の東京府立第三中学校以来の親友・芥川龍之介と知り合』っている（当時は未だ七歳）。大正五（一九一六）年十二月、『龍之介と縁談契約書を交わ』し、大正七（一九一八）年二月、『跡見女学校在学中に龍之介と結婚する。龍之介の海軍機関学校赴任に伴い、鎌倉市で新婚生活を送る』とある（下線太字やぶちゃん）。

「芥川家では大変急いでいて、もし、良いとなったら、今、婚約しておいて、来年早々、令嬢の卒業を待たないで、挙式したいと言ってるそうだよ」当初、芥川龍之介が塚本文と交わした大正五（一九一六）年十二月の縁談契約書では卒業を待つて結婚するとあったのであるが、考えてみると、当時の学制の終了・卒業は七月であるから、彼女は事実、確かに在学中に挙式したのである。

「大正六年の夏でございますが、東大文科に公開講演のあることを彼から伝え聞きまして、実は、夫と共にどこか温泉で過ごすつもりでおりましたのを、中止して、この公開講演に出席したいと夫に相談いたしました。一も二もなく承知してくれまして、その手続きは彼に依頼いたしましたのでございます。彼は快諾してくれまして私もすっかり出席の気分になっておりましたところ、どうも気分がすぐれなくなり、つわりであることを確認されたため、聴講の見込みはなく、温泉に行く元気は更になく、家に引き籠ることになり、又、取り消し手続きも彼に依頼するということになりました」うっかり読むと、この講演には芥川龍之介が講演者として出ているかのように読んでもうが、そんなことはどこにも書いてない。単に東京帝国文科大学の夏季公開講座があるのを、芥川龍之介が佐野夫婦（というより佐野花

子)に紹介慫慂し、夫婦と龍之介三人で聴講する手続きを龍之介がし、ところが妊娠が判つて、二人のキャンセルの手続きも何もかも、龍之介がやって呉れたというのである。龍之介の年譜では、この夏季休暇時期にそのような講演に行った記録は載らないが、後で多量の同講座の資料をわざわざ花子に送付していることから、彼は講演に行ったのであろう(夏季休暇中いた田端の実家からならば、ごく近い)。さればその辺りのさりげない細かな描写も、本内容全体が、かえって事実であることを伝えているものと、私は信ずるものである。

「大正六年夏と言え、春に結婚して丁度、つわりになる頃であつたわけで、彼の遊泳を見ながら海岸に佇んだ日はこの少し前になるのだと回想いたします」前の「三」の冒頭の印象的な映像を参照のこと。

「横須賀の女学校の、あの、ねずみ色の制服を実は、ぼく、あまり感心しないのですが、あの制服を着て汽車通学しているお嬢さんに素晴らしい方がいますよ。いいなあと思つて見ている間に、この程、ぼく、無意識にお辞儀をしてしまったんです。あとでハツとしましたが、もう、取り返しはつきません。大失敗をやっちゃつた」これはもうご存知、芥川龍之介の私小説風の保吉(やすきち)物の一篇「お時儀」(大正一二(一九二三)年十月『女性』)の素材となつた原体験である。発表はこの記述内時制の六年後であるが、全然、ちつとも、おかしくないのである。何故なら、同作の冒頭は(下線太字はやぶちゃん)、

\*

保吉は三十になつたばかりである。その上あらゆる賣文業者のやうに、目まぐるしい生活を営んでゐる。だから「明日(みやうにち)」は考へても「昨日(さくじつ)」は滅多に考へない。しかし往來を歩いてゐたり、原稿用紙に向つてゐたり、電車に乗つてゐたりする間(あひだ)にふと過去の一情景を鮮かに思ひ浮べることがある。それは從來の経験によると、大抵嗅覺の刺戟から聯想を生ずる結果らしい。その又嗅覺の刺戟なるものも都會に住んでゐる悲しさには惡臭と呼ばれる匂(にほひ)ばかりである。たとへば汽車の煤煙の匂は何人(なんびと)も嗅ぎたいと思ふはずはない。けれども或お嬢さんの記憶、――五六年前に顔を合せた或お嬢さんの記憶などはあの匂を嗅ぎさへすれば、煙突から迸(ほとばし)る火花のやうに忽ちよみがへつて來るのである。

このお嬢さんに遇つたのは或避暑地の停車場(ていしやば)である。或はもつと嚴密に云へば、あの停車場のプラットフォームである。當時その避暑地に住んでゐた彼は、雨が降つても、風が吹いても、午前は八時發の下り列車に乗り、午後は四時二十分着の上り列車を降りるのを常としてゐた。なぜ又毎日汽車に乗つたかと云へば、――そんなことは何でも差支(さしつか)へない。しかし毎日汽車になど乗れば、一ダズン位(ぐらゐ)の顔馴染みは忽ちの内に出來てしまふ。お嬢さんもその中(うち)の一人である。けれども午後には七草(ななくさ)から三月の二十何日か迄、一度も遇つたと云ふ記憶はない。午前もお嬢さんの乗る汽車は保吉には縁のない上り列車である。

お嬢さんは十六か十七であらう。いつも銀鼠(ぎんねずみ)の洋服に銀鼠の帽子をかぶつてゐる。背は寧ろ低い方かも知れない。けれども見たところはすらりとしてゐる。殊に脚は、

——やはり銀鼠の靴下に踵（かかと）の高い靴をはいた脚は鹿の脚のやうにすらりとしている。顔は美人と云ふほどではない。しかし、——保吉はまだ東西を論ぜず、近代の小説の女（ぢよ）主人公に無條件の美人を見たことはない。作者は女性の描寫になると、たいてい「彼女は美人ではない。しかし……」とか何とか斷つてゐる。按ずるに無條件の美人を認めるのは近代人の面目（めんぼく）に關（かかは）るらしい。だから保吉もこのお嬢さんに「しかし」と云ふ條件を加へるのである。——念のためにもう一度繰り返すと、顔は美人と云ふほどではない。しかしちよいと鼻の先の上つた、愛敬（あいきやう）の多い圓顔（まるがほ）である。

\*

である（引用は岩波旧全集に拠った。「青空文庫」の[こちら](#)で全文を読めはするが、正直、このテキストは表記も読みも原型をとどめておらず、流石の芥川龍之介も怒る類いの、作らぬ方がよい部類の電子テキストと言える）。執筆当時の龍之介は数え三十二である。そこから六年前ならば龍之介は二十六、満で二十五歳、まさに大正六（一九一七）年！ドンピシャリである。意地の悪い読者の中には、後年、「お時儀」を読んだ花子が創作したのだ、と言いつ出すかも知れぬ。しかし、である。にしては、あまりにも自然に語られているではないか。拵えたエセ物には、その臭さが多かれ少なかれ、必ず纏いつき、鼻につくものである。しかし、この話を受けた花子との会話の方が、この龍之介の小説よりも、遙かに事実らしさを持っていると言える。寧ろ、「お辭儀」で「なぜ又毎日汽車に乗つたかと云へば、——そんなことは何でも差支（さしつか）へない」と誤魔化している（機関学校時代の仕事は龍之介にとって嫌悪以外の何ものでもなく、思い出したいくないという意識は強くあるであろう）龍之介の方が、よほど意味深で、作り物の臭さを漂わせているではないか！

「五尺とちよつと」一メートル五十二センチ越えぐらい。

「鈴木たか子」不詳。かの「お時儀」の少女のモデルなら、俄然、私は写真を見て見なくなるのである。

「どういうところのお嬢さんか、わかつてるかい？調べてごらん。汽車通勤も亦楽し、か」言わずもがな、佐野慶造のチャチャである。

「中条百合」「ちゅうじょうゆり」と読む。後の左翼作家宮本百合子（明治三二（一八九九）年～昭和二六（一九五二）年）のこと。彼女の旧姓実名は「中條ユリ」である（東京生まれ）。

東京女子師範学校附属高等学校（現在の「お茶の水女子大学附属中学校・お茶の水女子大学附属高等学校」）在学中から小説を書き始め（後の花子の台詞と一致）、この前年の大正五（一九一六）年、日本女子大学英文科予科に入学するなり、「中条百合子」名で白樺派風の人道主義的な中編「貧しき人々の群」を『中央公論』九月号に発表、天才少女として注目を集めた。なお、同大予科はほどなく中退している（ここはウィキの「宮本百合子」に拠った）。

「龍ちゃん。そういう方面の令嬢と結婚されてはどうです？」慶造の台詞である。

「何々百合子女史」先に出た「中条百合」宮本百合子のことであろう。

「原因は親しらず齒發生のため」芥川龍之介は事実、この大正六（一九一七）年七月三十日

に（夏季休暇で七月二十四日に鎌倉から田端へ戻っている。戻っているために、癩癩で家人と諍いが起こるのである。なお、この同日中、離れる前の鎌倉で、ずつと後に芥川龍之介最後の思い人となることになる歌人片山廣子（この時は未だ対面していない模様）に手紙を認めていることは記憶してよい）『**歯痛のために本郷の医院に行き、奥歯を抜かれる**』とある（岩波新全集宮坂覺年譜より引用。下線太字はやぶちゃん）。

「いよいよ休みが終わろうとするので、心細くなっています。『航海記』を封入しますが：以下」以下の書簡は全集に載るので、念のため、引いておく（旧全集書簡番号二一三・田端発信・八月二十九日附・佐野慶造・花子宛）。

\*

愈々休みがなくなるので大に心細くなつてゐます

航海記これへ封入します甚恐縮ですが私のスクラップブックに貼る分ですから御よみずみの後は私迄御返し下さいさて私はこの手紙を書きながら大に良心の苛責を感じてゐますこれは特に奥さんへ申し上げますもつと早く書くべき手紙もあればもつと早く送るべき航海記だつたんです誠に申譯ありません

しかし私が用事で忙しくないときは遊びまはるので忙しい事は御察し下さい横須賀に善友がゐる程それ程左様に東京には悪友がゐます私は彼等に誘惑されて無闇に芝居を見たり音曲を聞いたりしてゐましたそこで性來の筆不精になつてしまつたのです

今悪友の遊びに來てゐた連中が歸つた所でさうしてそのあとが甚靜な夜になりました私は小さな机と椅子を椽側へ持ち出してこれを書いているのです

即興

銀漢の瀬音聞ゆる夜もあらむ

これで止めます 頓首

八月二十九日

芥川龍之介

佐野慶造様

全 花子様

\*

句（前書含む）の前後は一行空けた。この「航海記」というのは「軍艦金剛航海記」のこと、これは、この年大正六（一九一七）年の六月二十日（水曜）午後から、勤務していた海軍機関学校の航海見学のため、巡洋戦艦「金剛」へ搭乗、同月二十二日に山口県玖珂（くが）郡由宇（ゆう）（現在の山口県岩国市由宇町）に到着するまでの見聞を記したものである。その時の体験が「軍艦金剛航海記」で、これは同年七月二十五日から二十九日附の『時事新報』に連載されている（旧全集では初出誌を未詳としていた。また、別に資料としての『軍艦金剛航海記』ノート）も現存している）から、恐らくはその『時事新報』掲載分を芥川龍之介自身が切り抜いて纏めたものかと思われる（芥川龍之介はしばしば自作の初出誌をそ

のように丁寧に貼った「貼り混ぜ帳」ようなものを作り、これまたしばしばそれに添書きや訂正を行って、それを最終形として単行本の決定稿の草稿にしていたことが知られている。ここで龍之介が返却を求めているのはそのためである。本作は後に単行本「點心」「梅・馬・鷺」に再録されている。これは「青空文庫」の「[軍艦金剛航海記](#)」で安心して読める。何故ならこれは、旧全集を底本とした正字正仮名の正統な電子テキストだからである。なお、私の電子テキスト注「[芥川龍之介手帳 1―15](#)」・「[芥川龍之介手帳 1―16](#)」・「[芥川龍之介手帳 1―17](#)」そして「[芥川龍之介手帳 1―18](#)」を参照されたい。これらはまさに「[軍艦金剛航海記](#)」を書いたためのメモ類であり、そうして最後の「[芥川龍之介手帳 1―18](#)」には以前に紹介した通り、まさに[佐野花子の影が落ちて](#)いるのである。

「信州の富士が不思議と思ひ出されました。大気の中に浮かぶ朝な夕なの富士」花子の生地は冒頭に示した通り、長野県諏訪郡下諏訪町東山田で、諏訪湖の北岸を少し入った位置に当たる([ここ](#))([グーグル・マップ・データ](#))。ここから富士山は南東に百キロメートル強ある。諏訪盆地から富士山が見えるかどうかをさえ疑う人(そういう人は花子の作品を妄想と断ずるのと同じ程度に愚かである)のために、Hajime HAYASHIDA氏のサイト「富士山のページ」の「[諏訪湖から見る富士](#)」をリンクさせておこう。

「ぼくは、あの馬も哀れなのだが、牛もそうです。牛の鼻に通された鉄の輪を見ると非情な気がしてなりません」これは芥川龍之介の言葉として、私は非常に腑に落ちるものがあるリアルな台詞と思う。

「紫は君が日傘や暮れやすき 龍之介」「これは確かにあの夏の海への印象になっております。日傘を紫と覚えていてくれた懐かしさ。私にとりましてまことに得がたい一句なのでございます」この句は、[翌年の大正七\(一九一八\)年『ホトトギス』八月号「雑詠」欄に投句された句群中](#)に(署名は「我鬼」)、

むらさきは君が日傘や暮れ易き

とあるもので([「やぶちゃん版芥川龍之介句集 二 発句拾遺」](#)を参照されたい)、後の句群の出る旧全集の第九巻の「雑」の部(大正八(一九一九)年頃の作と推定はされているもの、[そう限定出来る根拠はないと私は思う](#))にも(私の「[やぶちゃん版芥川龍之介句集 五 手帳及びノート・断片・日録・遺漏](#)」を参照されたい)、

むらさきは君が日傘やくれやすき

の句形で出る。なお、前者の句群は「芥川我鬼」が芥川龍之介であることを読者は知らずに読んだ、殆んど最初に大衆の目に触れた、龍之介が満を持して発表したまず最初の本格的な句群なのである。だからこそ、これが一年前の夏の花子と龍之介の情景を読んだとしても、

何ら、おかしなところは全くない、寧ろ、そうした素材を詠んだとして自然に腑に落ちる句と言えるのである。

「揚州の夢ばかりなるうすものや 龍之介」これは旧全集の第九巻の「雜」の部に含まれる句の一つ。これを芥川龍之介の中国特派まで引き下げる必要などは全くない。これは、かの晩唐の知られた詩人杜牧の以下の七絶に基づく、龍之介の青い年の、ほろ苦さを漂わせた感懷句である。

#### 遣懷

落魄江南載酒行  
楚腰纖細掌中輕  
十年一覺揚州夢  
贏得青樓薄倖名

懷（おも）ひを遣（や）る

江南に落魄し 酒を載せて行く

楚腰（そえう） 纖細（せんさい） 掌中に輕（かろ）し

十年 一たび覺（さ）む 揚州の夢

羸（か）ち得たり 青樓（せいろう）薄倖（はくかう）の名を

この「青樓薄倖」とは「妓楼でも有名な薄情野郎」という蔑称である。

「青簾裏烟の花をかすかにす 龍之介」出典は同前。そこでの表記は、

青簾裏烟の花を幽（かすか）にす

である。

「読み足らぬじゃがたら文や明けやすき 龍之介」出典は同前。そこでの表記は、

よみたらぬじゃがたら文や明易き

である。「じゃがたら文」（ジャガタラぶみ）とは江戸初期に幕府が鎖国政策を強化する過程で、寛永一〇（一六三三）年、日本人の海外渡航を禁止するとともに、その翌年に南蛮人及び彼らと日本婦人との間に生まれた二百八十七人もの混血児をマカオに追放、次いで同十六年には、そうした紅毛系混血児及び彼らの日本人の母親三十二人を「ジャガタラ」（現在のジャカルタ、当時のオランダ領「バタビア」）に追放した。この「ジャガタラ文」とは、

その追放された人々が故国へ寄せた哀切々たる書簡群を指す（ここは「ブリタニカ国際大百科事典」を参照した）。

「衣更へお半と申し白齒なり 龍之介」出典は同前。そこでの表記は、

衣更へお半と申し白齒なり

と完全に一致する。「お半」は「おなか」か。料亭の仲居或いは芸妓の名と私は読む。或いは後者でしかもたまたま彼女が半玉（未だ水揚げをせず、ただお酌をしたり、舞いを舞うだけの年端（としは）ゆかぬ若い芸妓）であったのを興がったものともとれる。この手の挨拶句を龍之介はかなり創っている。花子はこれを時代句（創造句）ととっているが、それはそれで浄瑠璃の一場面の如くにして面白い腑に落ちる解釈である。

「天には傘地に砂文字の異草奇花 龍之介」出典は同前。そこでの表記は、

天に日傘地に砂文字の異艸奇花

で、ほぼ完全一致と言ってよい。この句はかなり龍之介が気に入っていた素材で、大正七年八月『ホトトギス』『雑詠』欄にも、

日傘人見る砂文字の異花奇鳥

という改稿で投稿されてある。中田雅敏編著の蝸牛俳句文庫「芥川龍之介」の鑑賞文によれば、砂文字は大道芸の一つで、色の付いた砂で絵を描いて見せたとあり、浅草辺りの囁目吟であろうと推定しておられるが、同感であるが、花子の「これは彼の中にある異国好みが奇想天外な形で出た奇術のような不思議さを持ったものと思います。キリシタンバテレンの語から傘をひらき、花を咲かせた連想でもございましょうか」という鑑賞もこれまた、実に美事な句の幻想性を剔抉しており、龍之介もこの感懐には諸手を挙げて賛同したに違いないと思うのである。

「花笠の牡丹に見知れ祭びと 龍之介」出典は同前。そこでの表記は、

花笠の牡丹にみしれ祭人

でほぼ完全に一致する。

「廃刀会出でて種なき黄惟子 龍之介」出典は同前であるが、これは三箇所誤りで、そこでの表記は、

## 廢刀令出でて程なき黄帷子

で花子の、龍之介の直筆の誤判読と思われる。「廃刀令」は明治九（一八七六）年三月二十八日に太政官布告第三十八号として発せられた「大禮服竝ニ軍人警察官吏等制服著用ノ外帶刀禁止」という太政官布告の略称。所謂、「帯刀禁止令」で、大礼服着用者・軍及び警察以外の者が刀を身につけることを禁じるものであった。「黄帷子」は、ここは「きかたびら」と読んでいようが、「きびら」で「生平」とも書き、曝さない麻糸で平織りにした布。男子の夏物で特に羽織に用いた。夏の季語。近代（当時から）の夢想句である。かくも三重に誤つては「このことはよく解しかね」る句とはなってしまう。しかし、これが誤判読であるということは、実は確かに彼女が芥川龍之介直筆のこれらの句を記したものを持っていたことを立証することとなることに気づかれたい。そんなものがなく、花子が全集から単に引き写したものだとしたら、こんな間違いは絶対にしないからである！

「毒だみの花の暑さや総後架　　龍之介」出典は同前。

どくだみの花の暑さや總後架

「總後架」は江戸の長屋等の外に作られた共同便所。これも一種の時代詠である可能性が高い。

「これは丁度、来訪されたとき、主人は出張中で不在でした。その思いを述べたものでございました。ちよつと寂しくつまらぬところへ、来て下さいまして嬉しかったことを思い出します。夕食は怠けてお寿司をとり、ビールは止してお茶とココア、シュークリームと果物だけで、お話に身を入れました」これは芥川龍之介の確信犯の訪問である。同僚の出張は職員室の不在どころか、掲示板を見れば、一目同前だからである。

「木犀の花の香りをあびて立つ朝な夕な秋のわが庭」この歌以降は、底本では行空なしで「花子」の署名も打たずに連なつて書かれてある。

「いささ川」小さな流れ細流。小川。

「思ひ葉を流して古と占ひぬ心うれしき朝なりしかな」こういう占いの風俗はありそうには思う。ただ「思ひ葉」とは「触れ合つて重なり合つて茂っている葉」を指し、そこから多く、男女の相愛に譬える語でもある。この一首を夫でない芥川龍之介に見せるというのは、私にはかなり危ない冒険かと思われぬでもない。

「Fさん」「藤原咲平」（ふじわらさくへい　明治一七（一八八四）年～昭和二五（一九五〇）年）は気象学者で理学博士。長野県諏訪郡上諏訪町（現在の諏訪市）生まれ。東京帝国大学理科大学理論物理学科明治四二（一九〇九）年卒。明治四十四年に中央気象台技師となり、

大正九（一九二〇）年に「大氣中における音波の異常伝播」を発表して、学士院賞を受賞。同年、ノルウェーに留学し三年後に帰国、中央氣象台測候技術官養成所（現在の氣象大学校）主事を経、大正十三年、東京帝国大学教授、大正十五年には地震研究所員を兼務した。同年「雲を掴む話」、昭和四（一九二九）年「雲」を刊行、昭和一六（一九四一）年に第五代中央氣象台長となり、戦時下の氣象事業を統括した。この間、風船爆弾の研究にも参画。戦後の昭和二十二年に氣象台長を退任した後、参院選に立候補したものの、公職追放となり、以後は執筆活動に専念した。「お天気博士」として一般にも親しまれ、独創的な渦巻きに関する研究が有名。他の著書に「渦巻の実験」「日本氣象学史」「群渦―氣象四十年」などがある（日外アソシエーツ「20世紀日本人名事典」に拠る）。佐野慶造と同年生まれであるから、大学での慶造の友人であったものか。しかし彼の生地が気になる。花子の生地と近いからである。彼が慶造の親友であったなら、花子が師範卒業のすぐ後に慶造と結婚した以上、慶造は咲平に結婚前に花子を紹介し、逢っていたのではないか？ 彼と花子が同郷であればこそ、その可能性は強い。とすれば、或いは、実際、咲平はそれを言祝ぎ乍らも、実は花子に惹かれもした、そうして、彼らの婚姻の前に、この、

何ごとも言はじとすれどしかすがにとどめかねたるわが涙哉

というかなりアブナイ一首を詠じ、彼ら、否、花子に献じたとするのはどうか？ これは、十分にあっておかしくはなく、それをかの恋多き龍之介がまた、それを鋭敏に感じとつていた、というのも、私にはすこぶる、腑に落ちるのである。

「自作をお見せしているときに、そういう人の一首が記されているとはうかつなことでございました」これは不謹慎にして迂闊にして不謹慎だろうか？ いや、不謹慎でも迂闊でも不思議でも、さらさら、ない。花子が芥川龍之介に見せたのは自分の、自分のためだけの歌稿を記した、メモランダである。もともとからして他人に見せることを意識したものではない。さすれば、先の花子の自作の一首、

何ごともよしとみて皆喜ばむさやけき秋に心安かれ

を記した際、思わず、咲平の献じて呉れた一首である、この初句が一致する、意味深の、

何ごとも言はじとすれどしかすがにとどめかねたるわが涙哉

を思わず並べ記して、ほんと、人知れず、花子が溜息をついたのだとしても、私は何ら、不謹慎とも迂闊とも不思議とも思わぬ。そう思いたいひねくれた連中が、花子を妄想を持った危ない女に仕立て上げたのである。

「花曇り捨てて悔なき古恋や 龍之介」これは旧全集書簡番号二八八の大正六（一九一七）年五月十七日附松岡讓宛に、

#### 偶感

花曇り捨てて悔なき古戀や

と出る。この句、当たり前前に考えるなら、芥川龍之介自身のトラウマとなった吉田弥生との失恋を詠んだ句と読める。しかし、前にも述べた通り、龍之介は使い廻しの天才である。だから、あたかも花子の内実をくすぐるように、このまさに「古戀」の句を彼女に示した可能性はすこぶる「ある」と言える。そうして、それを私は精神的詐欺だとは思わぬ。それが俳句のような短律文芸の欠陥であると同時に使い勝手のよい長所でもあると考える。私は作為された文学作品と恋情とはそうした共犯関係に常にあるものと心得ている人種であるからである。

『例の一句が、ふとしたことから或る方面へ公になって、いろいろ取り沙汰されたことがあったからです。今、考えますとこの俳句の意味は、「お互いに、ともかく、今までの恋人のことなど忘れてしまおう」ということではなかったかと思うのですが、どういうものでございましょう』芥川龍之介の先の句が、佐野花子と関わって風説を生んだ、という事実については、残念ながら、確認出来ない。これを花子の妄想と言うなら、そうかも知れぬ。そうでないかも知れぬ。ともかくも、私はその孰れも「確認は出来ぬ」と言うにとどめおくのみである。これについては私はどちらの肩も持つ気はないし、それはだからと言って、佐野花子の本「芥川龍之介の思い出」が妄想の産物だというような、凡そ馬鹿げた批判の証左になる、などとも、さらさら思わぬ人間である。

「秋立つて白粉うすし※夫人 龍之介」（※）＝「郭一（おおざと）＋虎」これは他に類型句を見ない新発見句である。しかもこの句は底本の冒頭写真版に出る、大正六（一九一七）年十一月十日刊行（新潮社）の第二作品集「煙草と悪魔」の佐野慶造への献本に記された、芥川龍之介自筆の句（署名有り）であって、前書もあるのである。以下に示す。

土曜日には奥さんがおしろひをつけて

お出でのさうですね そこで句を作りました

但甚不出來です

秋立つて白粉うすし號夫人

私は「やぶちゃん版芥川龍之介句集 五 手帳及びノート・断片・日録・遺漏」で以下ように注した。

\*

「やぶちゃん注…昭和四十八（一九七三）年短歌新聞社刊佐野花子・山田芳子「芥川龍之介の思い出」の佐野花子による「芥川龍之介の思い出」より。冒頭写真版から、活字に起こした。類型句なし。「※」は「郭」（おおざと）＋虎」。但し、このような漢字は、「大漢和辭典」にも存在せず、「號夫人」と誤記で、芥川自身の誤字である。「號夫人」は楊貴妃の姉で、正しくは號國夫人と呼ばれた美女である。

さて、佐野は、この句と次に掲げる「白粉の水捨てしより芙蓉なる」及び「妻ぶりや襟白粉も夜は寒き」の句と共に、芥川から直接もらった句であるとし（このエピソードは夫佐野慶造が不在の折に、芥川が尋ねて来、そこで詩歌談義となり、芥川の「花曇り捨てて悔いなき古戀や」にまつわる、やや危うい会話の後、「その折に下さった」と記している）、芥川が説明をつけたと書いている。これは、佐野の原本を仔細に検討すると、この日に芥川は大正六（一九一七）十一月十日に上梓された題二短編集「煙草と悪魔」を佐野花子に献本しており（前書からみると形式上は佐野慶造への献本である）、その本の見返しに献句したものであることが、原本の冒頭写真版によって分かる。

佐野は更に「私は大体、白粉をつけることが嫌いで、余りお化粧をしなかったのですから、それを材になさったのでございました。それも、夫に注意されて、たまに刷く程度なので、かえって目立ったことになりました。どうか。號夫人とは中国の昔、蛾のような眉をわずかに指で払うのみで君前にまみえた麗人のことを申します。白粉をつけない私の氣概を高くお汲みになったような句と思います。」と記している。」

\*

なお、明らかな直筆であるにも拘わらず、現行の出版された芥川龍之介句集には、この句も次の句も全く載らない。こんな呆れた馬鹿な話は、ないよ……

「白粉の水捨てしよりの芙蓉なる　龍之介」前注に出した冒頭写真版に載る類型句のない新発見句。

「妻振りや襟白粉も夜は寒き

龍之介」前注に出した冒頭写真版に載る類型句のない新発見句。写真版では、

#### 追加

妻ぶりや襟白粉も夜は寒き

である。「追加」の前書は、前掲二句に対しての「追加」の意である。」

(五)

彼を神経質な人と私は申しましたが、その上に影のような暗さが尾を引いていると思うことは、やはり拭い去れない事実でございました。

「煙草と悪魔」を携えて、或る宵のこと、暗鬱な表情で彼はやって参りました。当方からお招きしたのでございましたが、丁度、すぐ、雨になりました。濡れないで来られたこと喜ぶでもなく、窓際へ行ってガラスに顔を押しつけて外を見ていられますが、灯を背にした彼は、ひどく力なく肩を落して、からだ全体で泣いているかのように見えるのでございます。私はなぜか、ドキンと胸を打たれて、それでも牛鍋の用意や燗の仕たくにまぎらしておりました。

「もう、何でも構わず結婚してしまおうかと思うのですよ」

と彼は座に返って来て言いました。極めて難かしいことをいう彼に、いよいよ理想の婦人が見つかったのであらうと喜ぶには、なんと暗いことば、暗い表情でありましたらう。

「ぼくは、それに、どうも神経衰弱で」

とも言うのです。

「それは、早く美しい奥様をお迎えになればよいことなのですわ。お可愛らしいお子様もできてごらん遊ばせ。神経衰弱なんてものは飛んでつてしまいますよ。家庭の楽しみというもの、あなたのように孤独な方が思っていらいっしやるより、ずつとあたたかいものでございましてよ」

と、私はお酒をすすめながら申します。夫も同じ考えですから、

「そうとも。そうとも。ぼくだって三十まで独身でいて、下宿生活をしていたので、それと言えることなんだが、結婚すると、その今までの空虚だった心が薄らいで行くのは妙なもののなんですよ」

すると、彼は力ない中にも元気をしぼるふうで、

「そら。そのところですよ。あの頃、ぼく、小町園で申し上げたでしょう？あのことばね。まさに適中ですよ。あなた方のご結婚が非常にいいご結婚だったから、このようなよい結果が生まれたんですよ。それは確実ですね。しみじみ佐野君のために喜んでるのです」

相手のしあわせを祝し、同時に自分の将来を計算して力の出しようのない様子に見えるのを私は案じました。やはり、さきほどのことば通り、進まぬ気持ちで、周囲に押され、とにかく、なんでもいいから結婚してやろうと思っているようでした。その証拠に、次のようなことを彼は申しました。

「結婚後、自分の理想とまったく相反した状態になったら」

と、口を切って、

「ああ」

と、ためいきを洩らし、そして一気に言いつづけたのです。

「あなた方はおしあわせですね。ぼくが、もし、結婚したとして、その婦人がことごとく自分の気に入らなかった場合、実に悲惨ですね。ぼくは果たして恵まれた家庭を持てるのでしょうか」

「どうしてそういうふうにお考えになりますの？そんなことはありません。あつてはいけません。あなたの奥様になりたい人は、一ぱいなのですもの。候補者が山ほどあって、選択

にお困りなのでしょう。早くいい奥様をお持ち遊ばせ。そして今度は私ども笑いに羨やましがらせて下さいまし。そして、一そう近しくしていただきたいのが、私どもの願いでございますもの。こちら二人で、芥川様がお一人でいらしては、物足りなくていけませんのね」夫もこれに相槌を打って励ましたのですが彼はそれでも沈んでいたのでございます。私は氣を引き立てるようにつとめ、

「お決め遊ばす方、なんというお名前の方でいらっしゃいますの？」

と伺ってみましたがお答え下さいませんでした。ただ、

「ぼくは新婚旅行は、あなた方のように箱根へ行きますよ。箱根はいいですね。結婚したら、家内には奥さんから和歌を仕込んでいただきましょう。今からお願ひしておきます」

冗談も、まじめともつかぬ大仰な申し出で、私はびっくりするほどでしたけれど、ようやくこの宵のふんいきは微笑を生み、楽しさと呼んだようでした。けれどもやはり哀感を伴う影がありまして、お帰りになるうしろ姿も初めのときのように寂しいものでした。

その後、彼は私ども夫婦の住んでいる海岸の近くに居を転じました。学校も近くなった場所、その家を探したのは私でした。彼のため、よいところをと一心に探し当てました。

しかし、やがて私は初産も軽く、母となり、彼は彼で、美しい婦人を娶り、新居は更に鎌倉に構えられました。

新夫人を伴った彼の訪問を受けたのも、まだ私の産褥中でありましたので、夫だけが、ここにことして彼らを迎えましたのです。私の初産のため郷里から出て来た母は、私に代わって何くれとなくもてなしていました。夫と母とは美しい客を送り出してのち、私の枕元へ参りまして、口を揃えて、お似合いのご夫婦だということです。母などはすっかり感動してしましまして、

「まあ。なんてご立派なご夫婦でしょう。信州などではとても見られませんよ。どんな様はお背が高く、すつきりとした痩せ型。ハイカラというのは、ああいうふうを申すのでしょね。奥様は、また、ふくよかな本当に美しい方。お似合いですとも」

私は嬉しいような悲しいような涙ぐましさを覚えました。いよいよ芥川さんも結婚なされたのだわ。そして、自分は母になったと何か一安堵の思いで眼を閉じたのです。

汲み交はすその盃に千代かけて君がみ幸を壽ぎまつる 花子

とはそのときの胸中に浮かんだ歌でございました。

或る日、帰宅した夫は、今度は当方から芥川君の新居をお祝いかたがた訪問することにして来たと申しました。私は子供連れでたいへんだからと、ためらっては見たしたものやはり夫の意見に従い、出かけることにいたしました。

新居は松原を背に茂る青葉に包まれた小ぎれいな構えでございました。門辺には大きな芭蕉の葉がそよいでおりました。

彼は私ども一家揃っての訪問を心から待ち受けて呉れておりました。新夫人も初めての挨拶

拶を私に与えられ、都育ちのあでやかさを清楚に整えた初々しきで若紫ということばにも例えたい佳人でいられました。この新妻のもてなし振りに私はすっかり嬉しくなり、しまいには初対面ということも忘れて寛いでおりました。私の田舎育ちの荒さや、女学校時代のスパルタ教育の名残りがどこかに出るようで、注意をしながらもはしゃいでしまうのです。彼の方は今日の訪問客のために髪を洗い、仕立て下ろしの浴衣を着て、すがすがしさを身につけた感じでした。若主人振りを私は心中まことに可愛らしいと思ったのです。

「実は今日、親友、久米正雄をご紹介しようと思ひましてね。もうすぐ来ることになっているんですよ。どうぞ、夕方までおくつろぎ下さい。赤ちゃんは女中さんと海岸へでもおやりになつては如何ですか。うちの女中もお伴させますよ」

と、しきりに引きとめられたのですが、子供連れであり、初めての外出でございましたので、名残り惜しくも、頃よい時に辞去することになりました。

考えればこのときが、あとにも先にも、私にとつては彼を訪う一度の日だったのです。

ついでに思い出を書きますと、このとき、彼から贈られた初着は、男の子の柄ですから如何にも、すかつとした、見立てのよいもので、私自身がすっかり気に入入り、実は、主人を通して彼の承諾も得てありましたが、私の羽織の裏に使わせていただくことになったのです。機関学校では各々に子供誕生の折りには、初着用三丈の布を贈り合うことになっていたので。彼もその規則にしたがつて、彼自身の見立てで贈ってくれたのでございました。

また、当方からのお返しには、お盆をそれぞれ送りましたが、まだ、独身の彼のみは、お盆でも困るだろうとの話が、うちうちに交わされまして、主人と私で、お誘いかたがた横須賀の町でご馳走し、「さいか屋」という店で財布を買って差し上げ喜ばれました。財布は使つて下さった由。羽織裏は長く、色あせるまで使用いたしました……………。

彼はそれから創作一路に東京へ去って行きました。

帰らなんいさ草の庵は春の風 龍之介

墨痕あざやかにしたためられた、彼の愛著<傀儡師>を記念にと私に手渡して行きました。遠く離れる儚なさを私は悲しみましたが、彼の前途のため、それは祝うべきことであると思ひきめましたのです。

「啓。その後暫らくごぶさたしました。皆さん。お変わりもございませんか。私は毎日、甚だ閑寂な生活をしています。時々、いろんな人間が遊びに来ては気焰をあげたり、のろけたりして行きます。ところで横須賀の女学校を昨年か一昨年に卒業したのに岩村京子という婦人がおりましようか。これは奥様に伺うのです。もし、居たとすれば、容貌人物など大体を知りたいのですが、いかがでしょう。手前勝手ながら当方の名前が出ない範囲でお調べ下さればあり難いと存じます。

この頃や戯作三昧花曇り 龍之介

という彼の通信に接し、私は真心をもって、調査に当たりました。そして、彼の悠々自適の生活を心から礼讃し祝福した手紙を夫と共にしたためて送ったのでございました。

この調査の要は何のためであったか、そのままに知らず過ぎてしまいました。が、とにかく、遠く離れても、私どもは彼に寄せる手紙によって、また、彼から来る手紙によって彼との交友の深まりを願ひ、特別の心情をねがうばかりでした。それゆえ、かえって、この交際は末長くつづくであろうことを確信しておりましたのです。

心より心に通ふ道ありきこの長月の空の遙けさ 花子

とは、その当時の私の心境を歌ったものでございます。

彼が少し健康を害したことがありまして、私どもは案じて見舞状を出したこともございました。

「お見舞ありがとうございます。煙草をのみ過ぎたことが、わざわいして咽喉を害し甚だ困却しています。しかし、もう大部よろしい方ですから、はばかり乍らご休心下さい。

病間やいつか春日も庭の松 龍之介」

という返事をもらって胸なでおろす私でもございました。

その後、彼から男子出生の吉報を得て私どもは、取り敢えず、その町における最上という赤ん坊の帽子と、よだれ掛けを心祝いに贈りました。応えて、あの可憐な夫人より丁重な礼状が届けられましたが、不思議なことにそれきり、まったく、それきり、私どもの寄せる音信にも、なしのつぶての、たった一度の返信さえも来なくなってしまうたのです。一たい、これは、どうしたことでございましょうか。何か自分たちに落ち度でもあったのではないか、失礼なことでもしたのではないかと、いくら考えて見ても更に解らないのでございました。なんととしても腑に落ちないことでございました。

突然に音信の絶えたこと、いろいろに考えあぐねて見ますが、夫は、ただ、創作生活一本にはいつて、創作に忙しいのだらうと、あつさりしておりますが、私の方は、どうにも収まらない気持ちで一ぱいになるのです。

つきつめて考えれば、私も彼を好きでたまらないわけではございました。今までの心的交友のあり方が、私の心を高揚した友情に慣れさせ、急に外されると、どうしてよいか解らない気持ちにさせました。こうなつて初めて私は友人として彼をどのように好きであったかを知りました。ユーモアと機智に富んだ話し振や、薄く引き締まった唇。長い睫の奥に輝く漆黒の瞳。時には、じつと見つめる面ざしの、はかり知れぬ深さ、対座していると、どうにも引き入れられずには居られなかったのです。

「奥さん」

と声を掛けられると、無口な私も一心になって、身構えして太刀打ちすべく彼に向ったものでした。うっかりしていると、きらりと刺されそうな恐れに對しての身構えでした。

「奥さんには適いません。インテレクチュアルですから奥さんは」

と勝利の上においても彼は冷かすように私をほめるのを忘れませんでした。

私が丸髷に結って見た折り、彼は来訪して来たことがあり、それをたいへんにほめまして、夫にも、

「佐野君。ぼくなら丸髷に結わせるためにも、女学校の教師などは止めさせますがね」と言いました。午前中だけ町の女学校に教えに行くのさえ、あまりお氣に入らなかったようです。……とにかく音信の絶えたこと……。

今こそ打ちのめされた思いでした。それから時が流れ年が過ぎ、夫も外遊をして、約束のステッキは買って来ましたものの、手渡すこともできない間柄になってしまったのを、どうしようもありませんでした。それほど絶えて音信も交友関係も切れてしまいましたのです。境遇が変わったことが、まず第一の条件でもありませんようか。すっかり先方は専門家の生活環境にはいられたのですから。それにしても年賀状一枚来なくなっていました。

「やぶちゃん注…ここは本「芥川龍之介の思い出」の「四」の中間点（より少しだけ後ろ）であるが、この直後に非常に重大な事件が発生する転換点があるので、特異的にここで注を挟むこととする（文章は実際には空行もなく、上記の段落の後、改行して「或る、それは冬の日のことでした。私は火鉢に寄りながら雑誌をひもといていました。」（改行）「ふと、私は一文を読んだのです。そして、再三読み返したのです。繰り返し、繰り返し読みました。そして、流れ出る涙を押えることができなかったのです。」と、そのまま続いている）。

「煙草と悪魔」前の「三」で注した通り、これは大正六（一九一七）年十一月十日刊行（新潮社）の第二作品集「煙草と悪魔」の佐野慶造への献本で、その見返しに芥川龍之介自筆の前書附きの三句（「龍之介」の署名もある）が載る（これも前に述べたが、この三句は他に類型句のない驚天動地の新発見句であり、その筆跡は明らかに龍之介のものである）。底本の冒頭写真版で現認出来る。因みに、同作品集の所収作品は「煙草と悪魔」「或日の大石藏之助」「野呂松人形」「さまよへる猶太人」「ひよつとこ」「二つの手紙」「道祖問答」「Mensura Zoi」「父」「煙管」「片戀」の十一篇である。最後の「片戀」（かたこひ）は飲み屋の女中「お徳」が「活動寫眞」（映画）の俳優に片思いを抱いたという小品（芥川龍之介とらしい「自分」が「京濱電車」の中で「親しい友」と逢い、そこで彼が語った話という設定）であるが、私はその末尾で「お徳」の謂ったと言う台詞、『みんな消えてしまつたんです。消えて儚くなりにつけりか。どうせ何でもそうしたもんね。』、それを友人が「これだけ聞くと、大に悟つてゐるらしいが、お徳は泣き笑ひをしながら、僕にいや味でも云ふような調子で、こう云うんだ。あいつは悪くすると君、ヒステリイだぜ。」「だが、ヒステリイにしても、いやに眞剣な所があつたつけ。事によると、寫眞に惚れたと云ふのは作り話で、ほんとうは誰か我々の連中に片戀をした事があるのかも知れない。」と語る末尾を、私は何故か、ここでふと、思

い出した。この後の方で花子が「遠く離れる儚なさを私は悲しみました」というのと響き合うような気がしたから。「片戀」は大正六（一九一七）年十月発行の『文章世界』を初出とするが、作品末には『六、九、十七』のクレジットがあり、これは実に芥川龍之介が横須賀に転居した三日目に当たる。

「そら。そのところですよ。あの頃、ぼく、小町園で申し上げたでしょう？あのことばね。

まさに適中ですよ。あなた方のご結婚が非常にいいご結婚だったから、このようないい結果が生まれたんですよ。それは確実ですね。しみじみ佐野君のために喜んでるのです」これは

【一】の小町園での、「さて、ご説明申し上げますよう。よい奥さんを持たれて羨やましい。心ひかれる女性だ……とこういう意味ですよ」という龍之介の言った言葉を指す。

「ぼくは新婚旅行は、あなた方のように箱根へ行きますよ」芥川龍之介は新婚旅行で箱根に行った記録はない。新婚旅行自体をしていない模様である。

「その後、彼は私ども夫婦の住んでいる海岸の近くに居を転じました。学校も近くなった場所、その家を探しましたのは私でした。彼のため、よいところをと一心に探し当てました」

「その後」とあるのは記憶違いであろう。芥川龍之介が鎌倉から転居し、横須賀市汐入の資産家尾鷲梅吉方の二階の八畳に間借りしたのは、前注で示した通り、大正六（一九一七）年九月十四日で、「煙草と悪魔」の刊行は大正六（一九一七）年十一月十日だからである。作者用の出版前献本としても、二ヶ月前以前にそれが出版社から届けられ、それを贈呈した可能性は考え難いからである。なお、横須賀の間借り住居を花子が探したという事実は知られていないが、あっても当然で、自然なことである。

「彼は彼で、美しい婦人を娶り、新居は更に鎌倉に構えられました」文とは大正七（一九一八）年二月二日（龍之介は満二十五（彼の誕生日は三月一日）、文は満十七）で田端の自宅で式を挙げ、自宅近くの「天然自笑軒」という会席料理屋で披露宴をしているが、佐野夫妻は出席していない（呼ばれていない）ものと思われる。なお、これは花子が出産直後で、彼女が出ていないのは自然であるが、慶造は呼ばれてもおかしくないのに、出席していない様子なのは、やや解せない。二人が当時の鎌倉町大町字辻の小山別邸に新居を構え（女中と三人のみ）たのは一ヶ月後の三月九日である。因みにこの間、二月十三日に芥川龍之介は機関学校教官のまま、大阪毎日新聞社社友となっている（社の定額給与分（原稿料は別）は月額五十円であった）。

「私は嬉しいような悲しいような涙ぐましさを覚えました」産褥中とは言え、全く逢っていないのは少し不自然である気はするが、この感懷などは後発性のマタニティ・ブルーとして腑に落ちるし、直後に「いよいよ芥川さんも結婚なさったのだわ。そして、自分は母になったと何か一安堵の思いで眼を閉じたのです」と落ち着いており、言祝ぎの一首を胸中に詠むなど、特に奇異とは私には思われない。

「門辺には大きな芭蕉の葉がそよいでおりました」以前にも注で述べたが、私の父方の実家は川を挟んで、この小山別邸の向かいにある。小さな頃、その実家の川向うのに実際に私は芭蕉を確かに見た記憶があるのである。

「この新妻のもてなし振りに私はすっかり嬉しくなり、しまいには初対面ということも忘れて寛いでおりました。私の田舎育ちの荒さや、女学校時代のスパルタ教育の名残りがどこかに出るようで、注意をしながらもはしゃいでしまうのです」当時の花子は満二十三か二十二で、文より五、六歳年上である。

「実は今日、親友、久米正雄をご紹介しようと思ひましてね」この時、花子は久米に逢わなくてよかったと心底、私は思う。久米正雄は漱石の長女筆子との失恋と筆禍事件などで判る通り、異様に女に惚れっぽい男で、美貌の花子に逢っていたら、とんでもないことになっていたのは火を見るより明らかだからである。鷲忠雄氏などは「作家読本 芥川龍之介」（一九九二年河出書房新社刊）で久米を『恋愛病患者』と断じてさえいる。

「彼から贈られた初着は、男の子の柄ですから如何にも、すかつとした、見立てのよいもので、私自身がすっかり気に入る、実は、主人を通して彼の承諾も得てありましたが、私の羽織の裏に使わせていただくことになったのです」これは、ごく当たり前のことである。私の産着も、亡き母は袱紗に仕立てて、亡くなるまで大事にしていた。

「三丈」着尺の一反に相当する。幅約三十七センチ、長さ約十二メートル五十センチほどが標準。正絹だと、かなりの値段がする。

「さいか屋」現在の「横須賀さいか屋」（現在の横須賀市大滝町にあるのは新館）ウィキの「さいか屋」（この創業者名表記には疑問があるので「ノート」に「創業者の表記について」の意見を書き込んでおいた）などによれば、創設者でかつての雑賀衆（さいかしゅう）鉄砲傭兵・地侍集団）の出自であった岡本伝兵衛が明治五（一八七二）年にここ横須賀本町に雑賀（さいか）屋呉服店を開業したのをルーツとする「さいか屋」の旧本店（後の吸収合併によって「川崎店」が本店となった）。因みに私は藤沢の「さいか屋」を幼少より鼻根としているが、お恥ずかしいことに、二十代の初めまで「さいかいや」とずっと発音し続けていたことをここに告白しておく。

「彼はそれから創作一路に東京へ去って行きました」芥川龍之介の海軍機関学校の退職は大正八（一九一九）年三月三十一日（二十八日が最後の授業。授業後職員室のストープの中に出席簿や教科書などを放りこんで焼き捨てており、その幾分、尻をまくったような、さつぱりとした心境が次の詠となったとされる）で、翌四月二十八日に芥川龍之介は文とともに鎌倉を引き払い、終生の棲家となった田端の自宅に戻った。

「帰らなんいさ草の庵は春の風 龍之介」表記はママ。「我鬼窟句抄」では、

歸らなんいさ草の庵は春の風 （學校をやめる）

とある。濁音を打たないのはごく当たり前のことで、誤りではない。

「墨痕あざやかにしたためられた、彼の愛著く傀儡師」を記念にと私に手渡しして行きました」第三作品集「傀儡師」は大正八（一九一九）年一月十五日に新潮社から刊行されている。

収録作品は「奉教人の死」「るしへる」「枯野抄」「開化の殺人」「蜘蛛の糸」「袈裟と盛遠」「或日の大石内藏之助」「首が落ちた話」「毛利先生」「戯作三昧」「地獄變」と名作揃いで、芥川龍之介の作品集中の白眉と呼んでよい。因みに、私は本作品集の「[芥川龍之介作品集『傀儡師』やぶちゃん版（バーチャル・ウェブ版）](#)」を公開している。是非、ご覧あれかし。

「啓。その後暫らくごぶさたしました。皆さん。お変わりもございませんか。私は毎日、甚だ閑寂な生活をしています。時々、いろんな人間が遊びに来ては気焰をあげたり、のろけたりして行きます。ところで横須賀の女学校を昨年か一昨年に卒業したのに岩村京子という婦人がおりましたか。これは奥様に伺うのです。もし、居たとすれば、容貌人物など大体を知りたいのですが、いかがでしょう。手前勝手ながら当方の名前が出ない範囲でお調べ下さればあり難いと存じます。

この頃や戯作三昧花曇り 龍之介「旧全集初書簡番号五三五。大正八年五月二十七日附で田端発信、佐野慶造宛。以下に示す。

\*

啓 御無沙汰致しました皆さん御變りもございませんか私は毎日甚閑寂な生活をしてゐます時々いろんな人間が遊びに来て気焰をあげたりのろけたりして行きます所で王横須賀の女学校を昨年か一昨年卒業したのに岩村京子と云ふ婦人が居りませうかこれは奥様に伺ふのですもし居たとすれば容貌人物等大體を知りたいのですが如何でせう手前勝手ながら當方の名前が出ない範囲で御調べ下さればあり難有いと存じます 以上

この頃や戯作三昧花曇り

芥川龍之介

佐野様 侍曹

\*

「侍曹」は「じさう（じそう）」と読み、脇付の一つ。「傍（そば）に侍する者」の意で「侍史」に同じい。「岩本京子」不詳。但し、芥川龍之介の日記「[我鬼窟日録](#)」の大正八年の五月二十六日（本手紙の前日である）の条の末尾に、「受信、南部、岩井京子、野口眞造」とある。恐らく、愛読者として何かを書き送ってきた文学少女であり、出身校が花子の勤めていた汐入の横須賀高等女学校卒であったことに由来する依頼であろう（リンク先は私の電子テクスト注）。「この頃や戯作三昧花曇り」の句は「餓鬼句抄」の大正七年のパートに、

この頃や戯作三昧花曇り

（人に答ふ）

と出る旧句である。因みに、彼の名篇「戯作三昧」はさらに遡る大正六（一九一七）年十月二十日から十一月四日まで『大阪毎日新聞』に連載されている。

「心より心に通ふ道ありきこの長月の空の遙けさ 花子」大正八年の長月、九月となると、これは花子の思いとはうらはらに、芥川龍之介は、この月、かの後に蛇蝎のように嫌悪するこ

ととなる歌人秀しげ子への恋慕が急発（初めて出逢ったのはこの年の六月）、肉体関係を持つも、急速に失望していった月であったのである。この花子の透明な一首は、その爛れきった龍之介を知ってしまったている私には限りなく、哀しいものとして響く。

「お見舞ありがとうございます。煙草をのみ過ぎたことが、わざわざして咽喉を害し甚だ困却しています。しかし、もう大部よろしい方ですから、はばかり乍らご休心下さい。

病間やいつか春日も庭の松　龍之介「前の書簡の時制とは前後する（別に徒然に古い記憶を思い出しつつ記している花子を責めるのは全く当たらない）。旧全集初書簡番号四九八。大正八年二月二十六日附で田端発信、佐野慶造・花子宛。以下に示す。

\*

御見舞有難うございます日頃煙草をのみ過ぎた事が、祟つて咽喉を害し甚困却して居りますしかしもう大分よろしい方ですから乍憚御休心下さい

病間やいつか春日も庭の松　龍之介

\*

「病間やいつか春日も庭の松」の句は同日発信の松岡譲宛（旧全集初書簡番号四九七）で、同じく、煙草の吸い過ぎで喉を害して、発熱気味の由の記載の後に、

春日既に幾日ぬらせし庭の松

と異形を示す。私は「病間やいつか春日も庭の松」の方がいいと思う。

「その後、彼から男子出生の吉報を得て」芥川龍之介の長男比呂志は大正九（一九二〇）四月十日に出生している（戸籍上は学齢を考えてであろうか、三月三十日生まれとして戸籍に入籍されてある）。

「インテレクチュアル」= intellectual は意志・感情に対して「知的な・知性の優れた・理知的な」の意。

「それから時が流れ年が過ぎ、夫も外遊をして、約束のステッキは買って来ましたものの、手渡すこともできない間柄になってしまったのを、どうしようもありませんでした」既注乍ら、クドク拘って再掲する。これが後に、本書の内容を素材とした、田中純の小説「二本のステッキ」（昭和三一（一九五六）年二月発行の『小説新潮』初出）の題名となる。私のブログ記事『芥川龍之介の幻の「佐野さん」についての一考察 最終章』でも取り上げているが、来年二〇一七年一月一日午前零時零分を以って田中純の著作権が切れるので、来年早々には、このブログで「二本のステッキ」の全電子化をしようと考えている（TPPが国会で本年中に承認されようと、TPPの発効が行われない限り、著作権延長は出来ない）。」

或る、それは冬の日のことでした。私は火鉢に寄りながら雑誌をひもといっていました。ふと、私は一文を読んだのです。そして、再三読み返したのです。繰り返し、繰り返し読

みました。そして、流れ出る涙を押えることができなかったのです。

私は読みました。あまりにも判然と。そして黙ってしまいました。文の終わりに私は、「この悲しさに涙ながるる」と書きつけました。

彼の名声の日に日に上がるのを見、彼の業績の年ごとに重くなるのを知り、彼の家庭のいや栄えゆく様を聞いて衷心から喜びに耐えないのですが、この時の文面の悲しさ、憎らしさはどうすることもできませんでした。幾たびか確かめるように読み返し、よみ返してついにその雑誌を焼き捨ててしまったのでございます。私は黙りました。夫にも申しませんでした。

忘れぬをかく忘るれど忘れずいかさまにしていかにせむ

などという古歌を口ずさんだりして、夫と共に彼を慕っていた人の好きが哀れに思われるばかりで、私は黙って涙を流したのですが、やはり、とうとう事件が持ち上がってしまいました。或る宵のことですが、夫は浮かぬ顔をして帰宅いたしました。

「芥川君はね。『佐野さん』という題で、ぼくの悪口を書いているのだよ。新潮誌上でね。

今日、学校でそれを読んだ。学校当局も問題にしているよ」

「……………」

「お前もその文を読んでごらん。解るだろうこの気持ち。つまり、物理学なんてやっている人間の非常識な野暮ったい面を突いて強調したような書き方なんだ。ばくも自分のことながら、なるほどなあと思って可笑しくなったくらいだ。芥川君のような文学者から見たら、可笑しく見える要素が多分にあるのだろうな。お前から見たって、ああ見えるかも知れないなあ。こんなことくらい、放って置いてもいいんだけど、海軍機関学校というところも難かしいからね」

私は新たに涙のあふれ出るのを押えきれませんでした。私は既に読んでおりました。夫を彼一流の眼、彼一流の筆で鋭く嘲笑していたのです。私は既にそれを読み、すでに焼き捨てていたのです。私は、ただ、涙を流していました。そうして黙っていても夫に向あやしまれるわけはありません。あまりの情けなさに泣くだけなのだと、夫には思われましょう。夫は独りで語りつづけました。

「しかし、芥川君としては、ちょっと変なことをしたものだ。とは、ばくも思うな。お前が来ないうちからの交わりで、来てからも、あの通り上乘の交際だったと思うし、彼も良い結婚をして円満のようだし、別に何ごともなかったと思うのだが、不可解な事だ。龍ちゃん、創作に凝り過ぎて少々異常を来したかも知れないね。それにしてもあれだけ好意を持ち合って親しくして居ったんだから、どうも変だ。こんな推察をしては悪いけれども、龍ちゃん、ヒヨツとして結婚生活に多少不満でもあるんじゃないか。考えてみれば、結婚の決意をしたらしい時、そら、うちへ来て、ちょっと不思議なことを言ってたね。結婚した婦人が、ことごとくに気に入らなかつたら悲惨だとか、一生、恵まれた家庭は作れないとかね。しかし、ばくにはね。幼な馴じみで嫌いじゃないって言ってたから、別に不満はないだろうがねえ」

「……………」

「ヒョツとすると、お前という人間が龍ちゃんの心に喰い入り過ぎたかも知れないね。ぼくは、うっかりして芥川君を余りうちへ呼び過ぎたかも知れないね。これは、ぼくが龍ちゃんに心酔の余り、やったことで、少しも悪気でしたことではない。悪気どころか、まあ、芥川君に絶大の好意を寄せて下宿生活の单调さを補っても上げたいし、又、お前のためには良い友だちとなってもらえるし、そんなふうに考えたのだよ。芥川君も喜んでよくやって来たねえ。お前も楽しそうに見えた。ぼくも楽しかった。だから、ぼくに疾ましい点は、ちっとも無いんだもの。可笑しいことをしたもんだ。考えてみれば、しかし、いろいろあるよ。約束して、あれほど、待っていたのに結婚写真はいずれないし、その果て最近撮した写真だと言って、自分の一人写しを持って来てさ。それが一番、気に入ったものだそうで『どうぞ永久に記念として、取って置いて下さい』なんて……。お前はあの時、『これも結構ですけど、お揃いのでなくては厭』と頻りに龍ちゃんをやっつけていたが、それでもとうとう呉れなかった。何か闇に迷うという大きなシコリがあったのかも知れない。人間というのは弱いものだからね。お互い気をつけなければいけないよ」

と、思いの丈をと申しますか、ひとりで語りつづけました。私にはその気持ちがよく解りました。私は長いことぼの代わりに、長い長い時間、涙を流したのですから。しかし、夫のこゝとばを聞いて私も自分を反省してみました。自分は何か出過ぎたことをしたのでしょうか。けれど、どう考えても、心には一点の曇りも無かった筈に思えます。分を守って間違ったことは何一つして居りません。彼をよい人だと思い、夫の意志に従って真心を尽くして接してただけです。夫は、なおも独りで語りつづけました。

「芥川君が学校をやめて新聞社に入社しようとした時も、からだを氣遣ったぼくは、やはり規則的の仕ごとをしながら、創作に従事する方がよくないかと話して見たけれど、夏目先生もそうされたことだし、ぼくは実を言うと、機関学校へ来たのは徴兵逃れのためだった。もうそれも逃れたからって、帰心、矢の如しさ。学校勤務は別に厭な様子もなかったがね。それはそれでよいけれど、行くゆくからだをこわさねばよいが」

「本当ですわ。その随筆とかいう『佐野さん』のことだって変ですもの。これが行くゆく、からだをこわす前ぶれというものにならなければよろしいですけれど。女高師出でも一番で通したような人は、卒業と同時に死んだり弱ったりし勝ちですもの。芥川さんの秀才も、ちよつと心配になりますわね」

と、やはり日頃の彼思いに落ちて行く口憎しさ。

しかし「新潮」のその一文には私も新しい怒りの湧くのを覚えました。それはあの龍之介に対する真実の怒りでありました。唇はピリピリと震え、顔は紅潮し俄かに青ざめて行くのが解りました。あれ程、夫に対して理解のあったと思う彼が、夫のことを、

「この男が三十を過ぎて漸く結婚できると有頂天になっっているのは笑止千万だ。果たしてどんな売れ残りがやって来るのやら」

と結んであるのですが、これは私を見る前の文です。ずい分、前のことを書いたもので、そ

れだけに顔を合わせていた期間の短くないことを思うと余計腹立たしいのです。題も明らかに「佐野さん」とあるのです。新潮誌上に麗々と本名を使って発表した随筆。あまつさえ夫を見る影もない変な男とし、そして刺し殺すほどの憂き目に合わせていました。夫はよくこれを読んで怒らずにいられたものと思います。理性の優った夫。奥底に道德的善良さをいつも失わなかった夫。また、常に如何なる情熱が兆そうとも氷のような冷やかさ押え得る彼の性格。その彼にしてなんと不可解な仕打ちであろう。どのような皮肉冗談にも必ず伴う礼儀好意の片鱗さえ影を潜めてしまった文章でありました。誹謗冷笑に満ちた文辞には改めて茫然としてしまうのでした。人の好い夫、善良な夫は、彼のニヒルの笑のかげには愚鈍な間抜けとして描かれて行くのでした。そこには世間と文学との一線が見られました。一たん、その座につくや、彼の眼は既に彼自身の眼になるのです。思い溜めていたことが一度に角度を変えて変貌してしまふのです。夫はよい材料になるわけでした。それは私にもよく理解できます。私とて文学を解する側の人間でした。ただ、理解できないのは、あまりにもムキ出しに書いたことなのです。名前を本名にし、世間の昼の光の中にさらけ出してしまっている。もう少し書きようもあるのではないでしょうか。書かれた方は、その辛さに耐えられないのです。あきらかに彼は夫を憎んでいました。これを第一として、のちに抒情詩の中に、歌の中に夫らしき男が嘲笑され、刺し殺したいばかりの思いで点在しました。しかし、それは、文学の中においてであり、どこまでも、それらしさで終わりました。それでよいのです。それでよいのだと私は理解いたします。それゆえに「佐野さん」なる一文は文学とは言えない世間的の性格を帯びていました。文は拙いとは申しません。題名から判然と「佐野さん」と名を明らかにされ、内容は明らかにこの本人の本名でありますので、佐野個人、そして私、私も取り巻く知人、読む範囲の知らぬ大衆、それから目玉のかたまりの機関学校、これらを背負って夫の心身は傷だらけになりました。たのしい交際と思われたあの期間において、彼は夫を実はさんざん持て余し、心でどれほど嘲っていたのだったかと、思い知らされました。名前まで指摘して天下の新潮誌上に発表せねばならぬほど、夫は仕方のない存在だと申すのでしょうか。

それから数日後の夕食どきに夫は声ひくく申しました。

「今日、芥川君が学校に来た」

私は驚いてなお語ることばに耳を立てましたのです。

「例の新潮の随筆の件で謝罪に来たのだ。学校で手を廻したことと見える。芥川君は、学校当局にも、ぼくにも謝罪をしてね、以前のような元気はなく帰って行つたよ。ぼくはちよつと送って出て、是非うちにも寄ってくれ、ぼくは何んとも思っていないし、あれもすつきりすることだろう。一泊してもよいからゆっくり話してやってくれと言ったけれど、奥さんには君からくれぐれもよろしくお詫びしておいてくれと帰って行ってしまった。淋しかったね。うしろ姿も淋しかったよ」

「そうですね。それではやっぱり以前のようにはしないおつもりですね。あんまりですわ」私は又、涙ぐんでしまふのでございます。

「本当だ。ぼくも一生変わらぬ交際をしていい人だと思っていただけに、それだけ一入、憂鬱になるね。しかし、まあこれも成り行きだろう。何を言っても、もう駄目だ。かげながら芥川君の成功を祈るとしよう」

まことにやるせないその夜の思い出でございます。

機関学校の校長はじめ一同があゝの文を読んで憤慨し、芥川を呼びつけて謝罪させたことは、私にとつては、せめてもの慰めでありました。学校では佐野を弁護し、かばってくれたわけですが、夫が信用を受けて居り、捨てておけない人物であつたからと思えます。焼き捨ててしまった例の新潮はその後、一冊も眼にふれることなく、また、見たいとは思いません。終わりのところの文のみ覚えていたのでございますが、天下の芥川を庇う文壇ジャアナリストらの方でも、同時に申し合わせたように、あの随筆のみは彼の全集にはおろか、何の小集にも載せることなく消してしまいました。おそらく、あの文を覚えている人、所持している人もないのではございますまいか。あれば解っていただけだと思います。

その後、大正八、九年の何月号でございましたか、淑女画報に左のような文が載りました。

「やぶちゃん注…奇異に感じる方がいると思うので述べておくと、以上で、「四」のパートは終わっており、次の「五」の冒頭は、その『淑女画報』なる雑誌に載つたとされる芥川龍之介の「僕の最も好きな女性」という短文（二段落構成）から始まっている。

「或る、それは冬の日」シークエンスの時制は、「火鉢に寄りながら」でなくてはならぬ「寒さ」なのであるから、十二月中下旬から三月中旬ぐらいか。「雑誌をひもといていました」「雑誌をひもとく」という謂いはやや古風であるが、しかし「ひもとく」といっているからといって、何かの調べものために古雑誌を渉猟している、精査しているという意味であらうはずはない。以下の展開から見ても、これはその読んでいる当月発売の雑誌、遅くとも前月発売のそれを普通に読んでいると考えるのが自然である。

「ふと、私は一文を読んだのです。そして、再三読み返したのです。繰り返し、繰り返し読みました。そして、流れ出る涙を押えることができなかったのです」たまたま目に入ったある人の書いた比較的短い文章（「一文」はその意味である。だからこそ、その場で「再三」どころか「繰り返し、繰り返し」五、六度も「読み返し」すことが出来るのである）を見つ

け、そうして花子は、その内容に胸痛み、止めどない涙を流した、というのである。

「あまりにも判然と」これは前文との倒置、「あまりにも判然と私は読みました」の倒置表現ではないと私は思う。その場合の「判然と」は意味が上手くとれない。何度も繰り返し読んでそこに書かれている内容を明確に認識し、読解したというのであれば、面白くもおかしくもない倒置穂法だからである。これは寧ろ、「私は」その人の文章を「読みました」、そして「あまりにも判然と」記されてある事柄、余りにも露骨におぞましい内容が、そこに「判然と」、如何にもあからさまに書きつけられているのを、反芻するように何度も何度も読み返し、そうしてその意味を苦く知って、「そして黙ってしまいました」。しかし、そのままではやりきれなくて、誰に見せるでもなく、誰に訴えるでもなく、そうすることに何かの意味がある

かというようなことにも思い至る余裕もなく、直ちにその印刷された『文の終わりに私は、  
「この悲しさに涙ながるる」と書きつけました』と述懐しているのである。

「彼の名声の日に日に上がるのを見、彼の業績の年ごとに重くなるのを知り、彼の家庭のいや栄えゆく様を聞いて衷心から喜びに耐えないのですが、この時の文面の悲しさ、憎らしさはどうすることもできませんでした。幾たびか確かめるように読み返し、よみ返してついにその雑誌を焼き捨ててしまったのでございます。私は黙りました。夫にも申しませんでした」この段落で、花子に衝撃を与えた文章が芥川龍之介自身の文章であつたことが明示されてあると言つてよい。ここでも花子は、その文章をまた何度も繰り返し読んだとしている。さればこそ、その文章は花子の脳裏に刻みつけられ、それ以降、二度と目にしたことがない（ここがミソだが、本「伍」末尾で花子が述べているように（「終わりのところの文のみ覚えているのでございますが、天下の芥川を庇う文壇ジャナリストらの方でも、同時に申し合わせたように、あの随筆のみは彼の全集にはおろか、何の小集にも載せることなく消してしまいました。おそらく、あの文を覚えている人、所持している人もないのではございますまいか）、意識的に見ようしないのではなく、物理的にそれを現在（本「芥川龍之介の思い出」執筆時点の昭和二五（一九五〇）年八月二十六日以降。〔五〕の冒頭参照）ではまず最早、誰も見ることが出来なくなっているというのである）にも拘わらず、そのないような梗概は当然の如く記憶し（だから以下で書ける）、「終わりのところの文のみ」は明確に記憶しているのである。

「忘れぬをかく忘るれど忘られずいかさまにしていかさまにせむ」「などいう古歌」これは「藤原義孝集」（この歌集の幾つかの歌は藤原実頼家集「清慎公集」に混入して実頼の歌と誤認され、現在もそう載せる記事があるようである）に載る、

忘れぬをかく忘るれど忘られずいかさまにしていかさまにせむ

である。初句を「忘るれど」とする一本がある。この歌は「源氏物語」の第三十帖、我が道を行く女玉蔓絡みのすったもんだの「藤袴」に出る、式部卿宮の左兵衛督が慕う玉蔓の入内に憂えて詠む、

忘れなむと思ふものの悲しきをいかさまにしていかさまにせむ

がインスパイアした元歌と考えられている。

★

「私は黙って涙を流したのですが、やはり、とうとう事件が持ち上がってしまいました。或る宵のことですが、夫は浮かぬ顔をして帰宅いたしました」「芥川君はね。『佐野さん』という題で、ぼくの悪口を書いているのだよ。新潮誌上でね。今日、学校でそれを読んだ。学校当局も問題にしているよ」このタイミングは、花子が前のシーンで雑誌を読んだ時から、

長くても一、二週間、早ければ、数日（五、六日後）と考えるのが自然である。そもそもある雑誌に発表された内容がスキャンダルとして燎原の火の如くに拡散し、衆目の好奇心を集め、社会的な問題に発展しそうになるのは、発売直後の二、三日をピークとして一週間程度であろう。とすれば、この「或る宵」も、そのスパンの中にあると考えて問題ない。さても問題は、ここで与えられた、以下の二点である。

①その佐野慶造をカリカチャライズし、「悪口を書いている」という文章の題名が「佐野さん」であること

②その「佐野さん」が掲載されたのは雑誌『新潮』であると明記されていること

の二点である。『新潮』は現在も続く、新潮社発行の月刊文芸雑誌で明治三七（一九〇四）年創刊である。

①について結論を述べると、

●芥川龍之介の作品（小説・随筆・短評・アンケート回答を含む）に「佐野さん」と題するものは存在しない。

これと、以下の驚天動地の内容、芥川龍之介がこの件について海軍機関学校に謝罪に訪れ、その「佐野さん」と言う実録（風）随筆（以下の叙述からそうとしか読めない）が載った『新潮』が世間から完全に消え去り（販売された全冊が図書館などからも総て回収されたとしても）とらないと成立しない事態である）、しかも現在までに出版された如何なる全集にも、その「佐野さん」なる作品は収録されていない、というのである。しかし、もし、ここで佐野花子が言っていることが総て事実であるとしても、現在のようなスキャンダルへの異常な嗜好を持った「噂社会」にあつては、それは全集に当然の如く収録されるはずであり、仮にそうでなかったとしても（この程度の内容ではそういう全回収・全廃棄・なかったことにするなどということは完全に永遠にあり得ぬ話であることは言うまでもない）、必ず、鵜の目鷹の目の有象無象のアカデミックな専門研究者や私の如き「龍ちゃん」フリークが、鬼の首を獲ったように探し出してきて、論ずるに決まっているのである。

さて結局、佐野花子の「芥川龍之介の思い出」が芥川龍之介研究に於いて「トンデモ本」の如くに葬られてしまい、語ることもタブーというより、私に對してある芥川龍之介研究者が言い放ったように「妄想に付き合う君自身の頭が疑われるよ」的な扱いを受けるものとなつたのは、偏えにこの叙述部分に主原因がある（後は、後半部で花子が自身こそが芥川龍之介の「月光の女」の真のモデルだとする拘りであろうが、これは私にはそれほど変奇異常な主張だとは思っていない。それはまたそこで論じる）。

そうした花子の精神の変調を疑い、妄想として差別する連中が致命的に誤っているのは、この「佐野さん」の一件を妄想と片付け、一事が万事で本叙述全体の資料価値を無効とする烙

印を押して、黴臭い書庫の底に投げ去った行為にあると私は考えている。この佐野花子の「芥川龍之介の思い出」を真剣に考証しようとしないうのは、間違っている、といよりも、勿体ない、と私は真剣に感じているのである。少なくともこの「(五)」の、私が「その1」とした部分までの内容を読まれ、そこに精神疾患に基づくような全体に感染が及んだ重大な大系的妄想があるように読まれた方は、私は一人もいないと存ずる。もしおられたなら、あなたはここで私の注も佐野花子の後の本文も読むのを、おやめになるのが最善である。あなたは、自分が神のように健全で、唯一明白で、自身の感覚と知だけが真理だと思いう救い難い人間だからであり、そういう人間は佐野花子はおるか、芥川龍之介の実相にさえ近づくことも永遠に出来ぬと断言出来るからである。

前置きのように述べたが、私は実は既にある、推理をこの「佐野さん」にはしているのである。それが最初にもリンクさせた、

#### 『芥川龍之介の幻の「佐野さん」についての一考察』(二〇〇七年二月一日の記事)

である。そこでの結論を言えば、ここで言う、

芥川龍之介が書いたとする実録物「佐野さん」＝「さのさん」とは、

芥川龍之介が書いた実在する小説「寒さ」＝「やむさ」ではないか？(発音の類似性に着目されたい)という推論である。

小説「寒さ」は大正一三(一九二三)年四月の雑誌『改造』を初出とし、同年七月に新潮社から刊行した第七作品集「黄雀風」に再録された。私の作った正字正仮名の電子テキスト版があり、短いのですぐに読めるので参照されたい。短時間で何度も「繰り返し」読めるほど短い。原稿用紙でたった十二枚半しかない。

その前半に登場する物理教官宮本は、最早、疑いもなく、海軍機関学校時代の同僚であった佐野慶造その人である。「寒さ」冒頭の「口髭の薄い唇に人の好い微笑」(原本に写真版で載る大正七年撮影の写真(慶造と花子と赤ん坊の長男清一が写っている)を見る限り、彼の口髭は濃いといえない)とは、芥川龍之介にしては、明らかに悪意と皮肉に満ちた表現であることが、これ、読み進めると判明してくる。以下の、人間の男女の性愛に演繹した『傳熱作用の法則』を得意気に語る宮本のシークエンスは、まさに佐野慶造が本章で言っている、『つまり、物理学なんてやっている人間の非常識な野暮ったい面を突いて強調したような書き方なんだ。ぼくも自分のことながら、なるほどなあとと思って可笑しくなったぐらいだ。芥川君のような文学者から見たら、可笑しく見える要素が多分にあるのだろ。うな。お前から見たって、ああ見えるかも知れないなあ。』という台詞と完全に一致する内容である。

さて。本書の慶造の花子への台詞を今一度、見て貰いたい。

——芥川君はね。　「佐野さん」という題で、ぼくの悪口を書いているのだよ。——

読者のあなた！　これを声に出して、自身が慶造になったつもりで、穏やかに言ってみてみて貰いたい。

そうして次に、以下の台詞を同じように言ってみて貰いたい。

——芥川君はね。　「寒さ」という題で、ぼくの悪口を書いているのだよ。——

花子は読んで焼き捨てて以降、そのおぞましい作品を読んでいないと言っている。

彼女はあのシーンでその作品題名を記していない。

花子はその作品の名前を、内容の衝撃性から受けた強いトラウマによって、亡失したとしてもおかしくはない。そのようにさえ、見えるじゃないか！　しかも実際の小説「寒さ」は読まれる判るが、後半は女性の読者ならトラウマになりそうな、凄惨な踏切り番の轢断死の近くを保吉は通るのである！

以下、現在も私は『芥川龍之介の幻の「佐野さん」についての「考察」』で考えたことを変更する必要を感じていないので、以下、ほぼそのまま、そこで書いたことを繰り返す。

ここに至って僕は、幻の「佐野さん」という作品は、実は、この小説「寒さ」であったのだという強迫観念から逃れることが、最早、全く出来なくなっていると告白する。

勿論、これには大きな問題はある。それは発表雑誌が『新潮』であるという齟齬がある。しかし、多くの雑誌をその発表舞台としていた芥川のことを考えれば、ここでの誌名の記憶違いは容易にあり得よう。但し、佐野花子は耳にタコが出来るほど、粘着的に雑誌『新潮』の名前をこの本の中で繰り返し返している（いやだからこそ、この齟齬は実は佐野花子の確信犯的誤認識（所謂、強烈な思い込み）とも思える部分があるのである）。因みに、「寒さ」が再録された作品集「黄雀風」の出版社は「新潮社」なのである。更に言うなら、後年、この佐野慶造と芥川龍之介を巡る佐野花子の話を元に、田中純が創作した小説「二本のステッキ」が載ったのは（この話は実は本「芥川龍之介の思い出」の終りの方で実際に花子の言葉で語れる）、昭和三一（一九五六）年二月の『小説新潮』だったのである。

しかし、僕がこの推理を「強迫観念」と言う所以は、次のような一大齟齬が存在するからである。佐野花子は以下、次のように書いている。『あれ程、夫に対して理解のあったと思う彼が、夫のことを、／「この男が三十を過ぎて漸く結婚できると有頂天になっているのは笑止千万だ。果してどんな売れ残りがやって来るのやら」／と結んであるのですが、これは私を見る前の文です。ずい分、前のことを書いたもので、それだけに顔を合わせていた期間の短かくないことを思うと余計腹立たしいのです。題も明らかに「佐野さん」とあるのです。新潮誌上に麗々と本名を使って発表した随筆。あまつさえ夫を見る影もない変な男とし、そして刺し殺すほどの憂き目に合わせていました』。勿論、これはどこをどう読んでも「寒さ」に、このように読める箇所は、存在しない。そもそも、「寒さ」の物理教官宮本は結婚してい

るのである。

そうして、芥川のその「佐野さん」なる作品の文章に対し、花子は『どのような皮肉冗談にも必ず伴う礼儀好意の片鱗さえ影を潜めてしまった文章』であり、『誹謗冷笑に満ちた文辞には改めて茫然としてしまう』ほど、『ムキ出しに書いた』もので、『名前を本名にし、世間の屋の光の中にさらけ出してしまっている』と続けている。これが、「佐野さん」なる作品の文・叙述の特徴であることは押さえておきたい。そうして、それは凡そ、「寒さ」を批評する言辭としては、機能しない、お門違いな評言であるのである。

再度、言う。「佐野さん」なる作品は存在しない（国立国会図書館で『新潮』のバックナンバーを調べればいい、と私に言った方がおられるが、私は未だやっていない。というより、実在するなら、誰かがそれもやっており、見当たらないことの証左なのだと思ひ込むこととしている。私は最早、それほど、何でも出来るような身の自由な人間では、最早、ないのである）。それが存在していると信じている佐野花子は、明らかに思い違いをしている。その思い違いは確かにやや妄想的な体系的構成力を持ったものとして、その周縁的な仮想事象をも生み出している。それは精神病理学的には病的と呼び得る部分は確かに、ある。しかし、それはまた、本電子化の最後で病跡学的に考察したいと考えている。

しかし——それでも——私は——佐野花子の語りに——心から耳を傾け続ける。今後もずっと——である。

★

「この男が三十を過ぎて漸く結婚できると有頂天になっているのは笑止千万だ。果たしてどんな売れ残りがやって来るのやら」このような文字列を芥川龍之介の作品の中に見出すことは出来ないし、芥川龍之介が対象者を明確にして随筆でこんな文句を書くことは到底、考えられない。

『題も明らかに「佐野さん」とあるのです』ここで初めて自律的にその作品の題名を「佐野さん」と同定している。これは、寧ろ、夫慶造の先の台詞から、その題名を、そう理解した、思い込んだ、と理解することも、ごく自然であると私は認識する。

「夫はよくこれを読んで怒らずにいられたものと思います」私も、彼女の言う「佐野さん」が存在し、そこに、以上で述べたような叙述があるのなら、その通りである。怒らぬ方がおかしい。怒らないのは何故か？ 逆にそれは、花子が言っているような、花子が誤認しているような、以上に記されたおぞましい叙述が、とりもなおさず、ない、ということの証しなのだとは言えないだろうか？

「また、常に如何なる情熱が兆そうとも氷のような冷やかさ押え得る彼の性格。その彼にしてなんと不可解な仕打ちであろう。どのような皮肉冗談にも必ず伴う礼儀好意の片鱗さえ影を潜めてしまった文章でありました」この最初の一文の「彼」は突然、芥川龍之介になっていることに注意されたい。この表現転換には、ちよつと奇異なものを私は感ずる。激した心因反応によって、冷静に対象を認知分析し、叙述しようとする姿勢が、花子から失われている印象を私は受けるのである。

「誹謗冷笑に満ちた文辞には改めて茫然としてしまうのでした。人の好い夫、善良な夫は、彼のニヒルの笑のかげには愚鈍な間抜けとして描かれて行くのでした。そこには世間と文学との一線が見られました。一たん、その座につくや、彼の眼は既に彼自身の眼になるのです。思い溜めていたことが一度に角度を変えて変貌してしまうのです」これも同様。夫慶造と芥川龍之介の置換が、読者への配慮を無視して、突然、変換しているのである。

「あきらかに彼は夫を憎んでいました。これを第一として、のちに抒情詩の中に、歌の中に夫らしき男が嘲笑され、刺し殺したいばかりの思いで点在しました」所謂、遺稿の「澄江堂遺珠」のことを指している。それは後掲されるので、そこで問題にする。なお、私は「澄江堂遺珠」については、別の[ブログ・カテゴリ『澄江堂遺珠』](#)という夢魔で今も追跡し、探索し、考証している最中である。

「今日、芥川君が学校に来た」「例の新潮の随筆の件で謝罪に來たのだ。学校で手を廻したことを見える。芥川君は、学校当局にも、ぼくにも謝罪をしてね、以前のような元氣はなく帰って行ったよ」こうした事実は現在の最新の年譜上の記載にも一切、見当たらない。

「かげながら芥川君の成功を祈るとしよう」「しよう」はママ。

「機関学校の校長はじめ一同がああ文を読んで憤慨し、芥川を呼びつけて謝罪させた」私はこの件に就いては、別な作品（佐野さん）でない「寒さ」ではなくて、という謂いである）なら、あり得ることと実は考えている。それはやはり、[『芥川龍之介の幻の「佐野さん」についての一考察』](#)で述べたのであるが、[大正一二（一九二三）年五月の雑誌『改造』に載せた芥川龍之介の「保吉の手帳」](#)（後に「保吉の手帳から」に改変。リンク先はその初出形の私の初期の電子テキスト）である。例えば、その冒頭の「わん」に登場する愚劣極まりない海軍機関学校主計部主計官の粘着質な描写、「午休み——或空想——」に於ける「ファウスト」よろしき機関学校総体の完膚なきまでのカリカチャライズ、「西洋人」及び「恥」の学校の教師（自身も含めた）・生徒の存在の、蛇のように耐えがたいダル感覚、「勇ましい守衛」の実直と卑小の入り混じった大浦守衛への意地悪い笑みである。——そのどれもが、海軍機関学校がゆゆしき問題とし、また、謝罪を要求したとしても尤もな内容と言つてよいのである。

「焼き捨ててしまった例の新潮はその後、一冊も眼にふれることなく、また、見たいとは思いません、終わりのところの文のみ覚えているのでございますが、天下の芥川を庇う文壇ジャアナリストらの方でも、同時に申し合わせたように、あの随筆のみは彼の全集にはおろか、何の小集にも載せることなく消してしまいました。おそらく、あの文を覚えている人、所持している人もないのではございますまいか。あれば解っていただけだと思います」既に述べた通り、これは明らかに一読、現実的事実的な印象を感じさせない、かなり普通でない印象を受ける。精神的にやや正常でないという感じを私は確かに受けるのである。言わせて貰うなら、私が高校教師時代の経験上から痛感することなのである。不定愁訴を訴える生徒や親との会話の中で『これはちょっと普通でない』と感じた語り口と、花子のこの箇所の言い方は酷似しているのである。それら私が不審を抱いた生徒や親は、実際、残念なことに、それは私の杞憂や思い違いではなくて、事実、ある種の発達障害を抱えていたり、強迫神経症や

統合失調症の前駆症状であったことが実は非常に多かったのである（私は概ね、彼らには相応しい医療機関を紹介して事なきを得たものが多かったが、私の力が至らずに不登校になって退学したり、精神病が悪化して配偶者から離縁された親もいた事実もあったことを告白しておく。教師は精神科医ではないが、しかし、そうした相手を上手く導けなかった体験は今も慙愧の念に堪えない）。そうして、また、必ずと言っていいほど、彼らは非常に迂遠な語りの最後に、『あなたにはそれが分って頂けないと思います、絶対に今お話ししたことは紛れもない事実なのであり、私だけしかそれが真実であることは分らないのです。あなたにそれを知れる証拠をみせれば、必ず「解っていただけたらと思います」、だから私はその証拠を探して先生（或いはそれは学校や警察や市役所や日本国政府であつたりする）にお示したいと思います』といった絶対的な断定と断言をするのが常であつたのである。前にも述べた通り、この佐野花子の一連の心因反応（閉じられた系の中では絶対に真理と信じて疑わない傾向）に就いては後半で考察をする。

「その後、大正八、九年の何月号でございましたか、淑女画報に左のような文が載りました」冒頭で述べた通り、次の「(五)」の冒頭にそれが載る。こうした章立て構成の切り方は、やや奇妙である。事実記載をしている雰囲気というよりも、創作小説の連載で、次回に期待させるような、如何にもな書き方であり、私は生理的には不快を感じる章末である。」

(五)

僕の最も好きな女性

田端居士

僕は、しんみりとして天真爛漫な女性が好きだ。どちらかと言へば言葉すくなで内に豊かな情趣を湛へ、しかも理智のひらめきがなくてははいけません。二に二を足すと四といふやうな女性は余り好ましく思へないのです。

かつて或る海岸の小さな町に住んでいたことがありました。そう教育が高いといふのもなく又さう美人といふでもない一婦人と知り合ひになつたことがありました。この婦人に対して坐つてゐると恰も浪々として尽きない愛の泉に浸つてゐる様な気がして恍惚となつて来ます。僕はいつか全身に魅力を感じて忘れやうとしても今尚忘れられません。かういふ女性が多ければ多いほど、世界は明るく進歩して男子の天分はいやが上にも増してゆくことでせう。

右の文において私はふつと自分の胸に思い当たるものを感じます。名前も出さず、或る婦人とか、或る海岸の小さな町とか、ぼかして述べてありますけれど、私には思い当たる節があるのでございます。ははあ私のことだとわかるのでございます。これが文学的方法でございましょう。これと比べて「佐野さん」という文は何んとムキ出しに夫を刺したものだつたかと、今更のごとく比べて思いました。そしてもう一度、あの辛辣な文における彼の仕打

ちを思い返して見ました。ひらたく言えば、私は好感を持たれ、夫は嫌われ、憎まれているということになりました。それよりほかにないのだと思います。なぜ夫をそれほど憎んだのか、私はようやく解るのでございます。私は彼に好感を持たれていたのだ、愛されていたのだ、どうしようもないほど愛されていたのだと。彼の口から洩れ出た私への思慕のことばは、別に嘘ではなかったのだと。社交辞令と受け流していたのは私で、本気で言っていたのは彼だったのだと。私は彼のテストで受けていたわけになります。というのは、彼に問いかけられた愛の倫理の中で、至極、道徳的な判断と世間並みの解答しか与えなかった私を突き放し、あの地を去り、そして交際を断ち、夫を憎み、私への思慕を残して一片のハガキすら呉れないのだと。このようなことは、後になってしか解らないのでございました。そう思えば糸のほぐれるように、うっとりとした追想がよみがえってまいります。私には何のまちがいもないし、夫の命に従って、誠心誠意、尽くすだけのことは尽くしたと、正しがっている私そのものに罪があったのだと、身も世もない女身を抱く思いでございます。芥川さんは私を見るたびに深く愛されるようになって行ったのか。正しく振るまえば振るまうほど、愛されたのかと自分で自分を見ることのできない私は、後になってから気がついたのでございます。それだけに夫は憎まれ、嫌われ、随筆にまで書かれたのか、それも私のためだったのだと解りますと、罪の深さに消え入りたいようでございます。

彼との交際が絶えてから、私の家庭には平穏な月日が流れました。両手に縋る愛児と善良な夫を持った私は、変わらぬ愛情を捧げるのになんの屈託もございませんでした。けれども不思議なことが一つありました。何の文句も言わない、穏やかな夫の中に一つ脱落してしまつたもののあるのに気づきました。それは、あれほど、興味を持ち、あれほど真摯であった物理学への研究を、いつのまにか忘れたように、呆けたように放擲してしまつたことでございます。なんの変化も受けないように見えながら、その実、夫の最も重要な頭脳の部分、物理学への熱意が、欠け落ちてしまつた、そして何ごともなかつたように穏やかに笑っている夫の哀れさに気づいたのでございます。こういう形で夫は平静を保ち得たのかと涙をこぼしました。詫びたい思いでございました。それでも夫は幸福そうでございました。私は何も言わず、一そう夫を愛したのでございます。例のステッキも夫は移り住むたびに荷物の一つとして持ち歩きました。その荷作りをする毎に私の顔は翳りましたけれど、夫は例の如く穏やかな微笑を浮かべているだけでした。

その後、昭和二年七月二十四日の朝刊において「芥川龍之介謎の自殺」を知つたのでございました。仰向けの死顔の写真も掲載されているではありませんか。こういう最後の顔を写真で見ようとは、いいえ、こういう再会をしようとは思つても居りませんでした。物言わぬ再会と思ひました。小穴隆一、久米正雄、菊池寛らが死の床を取り巻いている写真も載りました。遺文を読む久米の口があげられたままで紙面には大きな嘆きの影が漂っていました。自殺をしたという女学生もあつたと報道されました。世間は芥川の死に心から驚いて居り、文壇の損失であると書き立てられました。この芥川に私の面影は抱かれたままになつたと思ひました。確かにそういうところがあつたと思ひました。

その後、夫も亡くなり、長いあいだ戦後の苦しみを味わい、そして病床に臥すようになって、しみじみと読み返して見たのでございますが、芥川の作品の端々には何かほのかに顔つて来る月のひかりがあつて、つめたく白いまぼろしが見えるように思えるのです。女性を描くとき口癖のように「昼の光の中でも月光の中にいるやうだった」と述べるのでございます。月光の女は彼の理想像であつたこと、つぶさにその口から聞いております。私に絡めた理想像でもあつたと申せない私ではございません。全面的でないとしても必ず一面においては私も加わっていると信じられるのでございます。

「月光の女」については、文壇も非常に問題にしておりますて、「一たい誰なのか」と話し合っております。久米正雄は、

「月光の女のなかで、芥川が、月光といふ言葉を、意識して、幾度かくりかへして使つたのは死に際して、過去の思ひ出の中に真に美しく感じた女に對し、愛慕の象徴として考へたものに逢ひない」

と述べて居りますし、宇野浩二も、

「私は、芥川が、それぞれ、芥川流の見方で、美しく感じた女を、みな、月光の女にしてしまつたのではないかと考へるのである」

と述べております。「昭和三十年十月二十日発行。文芸春秋新社。芥川竜之介(上)」

「月光の女」を最も問題にさせる作品は、芥川の「或阿呆の一生」でございますて、ここに出てくる四人の女性が数えられます。この四人の女性を同一の人物か、又は、四人が四人とも別々な人物か、どちらとも断言できる自信は誰にもございませず、今のうちに現存の関係人、小穴隆一、殖生愛石、大島理一郎、木崎伊作、滝井等を集めて一夕、非公開の座談会でも開いて、決定版を得ておきたいなどという問題にまでなっております。

私は陰のかげの方についてそれらを読み知り、誰も私の存在に氣のついていないのを感じます。横須賀の家には芥川さんの方から、いつもやって来られたのですし、私どもから出かけて行つたり文壇的に知られるという行動はいつさい取っておりませんので、誰にも知られず、期間も短かいことなので解らないのも当然かも知れません。それでも機関学校での謝罪問題があつたりして居りますから、少しそこらを押しひろげて行けば、たとえ小さくとも私どもが存在してりましたことから、何かは引き出せるのではございますまいか。芥川の恋人と言つて、もしくは、芥川の対象になつた女性と申しまして俗に名のあがつている人々には、松村みね子、岡本かの子などがあります。松村みね子は軽井沢の万平ホテルで、岡本かの子は鎌倉の雪の下ホテルH屋で会つたと言われて居りますが、こんなことは只の興味に過ぎないと宇野浩二は言っております。噂の女、謎の女は、みね子もかの子も歌人であり、歌人と言えばほんの噂の九条武子、柳原白蓮もみな歌人であるとも述べておりまして、世間的に名が挙げられているから、真のその人ではなからうということでございます。こういうことは何の問題にもならないとも述べております。

「やぶちゃん注…この「(六)」は実は底本では重ねて「(五)」となっている。誤りと断じて特異

的に訂した。なお、このパートは本「芥川龍之介の思い出」の最終章であるが、非常に長い（ページ数にして全体の三分の一強）ので、内容を勘案し、ここで切って注する。

「僕の最も好きな女性」 田端居士「前章末に「その後、大正八、九年の何月号でございましたか、淑女画報に左のような文が載りました」とあるものである（下線太字やぶちゃん）。『淑女画報』は博文館が明治四五（一九一二）年四月創刊（同年は七月三十日に大正に改元）した婦人雑誌（終刊は昭和一八（一九四三）年四月）である。この箇所において私は既に、『芥川龍之介 僕の好きな女／佐野花子「芥川龍之介の思い出」の芥川龍之介「僕の最も好きな女性」』で抜粋紹介をしているのであるが、実は「田端居士」の署名で「僕の最も好きな女性」という題名の随筆或いはアンケート記事は現行の全集には載らない（アンケート記事の場合は採録洩れがないとは言えず、絶対に存在しないとは言いが、それらも可能な限り渉獵したと思われる岩波新全集にも載らない（私は新字採用の同新全集を嫌悪しており、数巻のみを所持するだけであるが、それに基づいてリスト化された平成一二（二〇〇〇）年勉誠社刊「芥川龍之介作品事典」のアンケートにも載らない）。但し、これに酷似した題名で「芥川龍之介」書名の随筆「僕の好きな女」という作品が、大正九（一九二〇）年十月発行の雑誌『夫人倶楽部』創刊号に掲載されている。既に[私のサイトで公開してある](#)が、短いのので、以下に全文を引く（底本の旧全集は総ルビであるが、談話であるから、読みに確度はないので、一部の読みのみを附すにとどめてある）。なお、これは現行ではなく談話筆記である可能性が強い（ご覧の通り、末尾に『談』とある）。

\*

僕の好きな女 芥川龍之介

何しろ既に妻帯してゐる人間に、どんな女が好きか話せと云ふ、こりや註文の方が無理なんです。どうせ碌な事は話せないものと、前以て覺悟を下さい。まづ何よりも先に美人——と云ふ所なんですが、どうもこの人こそ、正銘の美人だと思ふやうな女には遇つた事がないんです。誰（たれ）でもさうぢやないですかね。皆好（い）い加減な所に安住して、美人のレツテルを安賣りに貼つてゐるんぢやないですかね。その邊がどうも判然しないんですが、兎に角一世の美人と云ふのには一度も拝顔の榮を得てゐないんです。そりや一世の美人を得る爲だつたら、すべてを拗つても惜しくはないでせう。少くとも拗つ人の心もちはよくわかると思ひますがね。その代り一世（せい）の美人でなけりや、中々拗つ氣にやなれませんか。しかし世間には二世か三世位（くらゐ）の美人の爲に、抛つ人だつて大勢あます。僕も實はいつ何時、その仲間にはひるかもわからない、と云ふのは一世の美人に惚れる事も眞理（しんり）だが、惚れると一世の美人に見えるのも眞理（だうり）に違ひないですからね、しかしいくら惚れた所で、一世の美人に見えるのは、精々二世か三世位の美人でせう。十世以上の美人がクレオパトラに見える事は、まあ僕には無ささうですね。何時か鎌倉の或自動車の運轉手が土地の藝者に迷つた揚句、女房を殺した事があつたでせう。その藝者を後

に酒席で見たんですが、これがまづ十五世か十六世位な美人なんですね。あの位ぢや僕は女房でなくつても、其處にゐる猫でも殺しませんよ。一世の美人なら、文句はないでせうが、二世以下の美人となると、浮世繪風の美人よりは西洋人じみた美人の方がどつちかと云へばすきですね。但し西洋人じみたと云ふのは御化粧を云ふんぢやない、顔立ちを云ふんです。御化粧だけで好きになれるんなら、オペラの女優は皆好きになれますからね。序だから云ひますが、この頃は日本の女の顔が、だんだん西洋人じみて来るやうですね。あれは體格が好くなつたり、御化粧が然らしめたりするんでせうが、その外にも我々の眼の玉が、西洋人じみた美しさを見つける事が出来るやうに教育されて來たんでせう。確にありや外部的な原因ばかりぢやありませんよ。

それからあまり實際的でない女が好きですが、——さう云ふより實際的でない方面にも理解のある女と云つた方が好(い)い。實際的でない女と云ふものは殆(ほとんど)ないやうですからね。少くとも大抵の女は皆實際的らしいぢやありませんか、或女が或小説家の作品が好きだと云ふから、——何、差支へがある譯ぢやありません。本名を云へば谷崎精二君の作品が好きだと云ふから、その理由を尋ねると、谷崎君は小説もうまいが、同時に又男振りが好(い)い癖に、堅さうな所が好いと云ふんです。つまりその女自身が夫を持つ場合には、谷崎君のやうな藝術趣味のある堅人(かたじん)が好いと云ふ事なんです。こりやほんの一例ですが、仔細に氣をつけて見ると、どうも女は心臓が算盤珠(そろばんだま)の恰好(かくかう)に似てゐさうな氣がするんですね。そりや女が男に欺されると云ふ場合だつて多いでせう。しかしそんな事があつたつて、女が實際的でないと云ふ證據にや全然なりやしません。精々或女が或男より實際的でないと云ふ位ですね。それさへ事によると疑問かも知れませんよ。まあそんな事はどうしても好いが、さう云ふ實際的な女なるものゝ中でも、前に云つた通り實際的以外の方面にも理解のある女が好きなんです。さうかと云つて婦人雜誌の口繪に、短冊を持つて立つてゐたり何かする、あゝ云ふ女史は落第なんです。あれ程藥の利きすぎない、森先生の安井夫人と云ふ歴史小説の女主人公のやうな、際物(きはもの)じみない女が好(い)いんですね。殊にさう云ふ人で、しつとり心に沾(うるほ)ひのある、優しい氣立ての人だつたら、何、五世か六世位の美人でも有難く御説を拝聴します。

今云つたやうな内外(ないぐわい)の美が具(そなは)つてゐる人があつたらそりや僕もきつと惚れるでせう。惚れると云ふんで思ひ出したが、スタンダールの「愛(ド・ラームウル)」「やぶちゃん注」(ド・ラームウル)はルビ。」と云ふ本に惚れ方を大別して、ウエルテル式とドン・ジュアン式と二つ擧げてありますね。勿論ア・ラ・ウエルテルと云ふのは、一人の女に惚れこむので、ア・ラ・ドンジュアンと云ふのは大勢の女を片つ端から征服して行くんです。僕は僕自身考へて見ると、どうも兩方の傾向があるやうなんですが、こりや僕ばかりぢやない、男は大抵さうなのかも知れませんね。尤も僕の友達の久米正雄君なんぞは、可成(かなり)ウエルテル式のやうです。そこでどうでせう。女の讀者に人氣のある小説家は、少くともその作品に現れた作者の惚れ方が、皆ウエルテル式ぢやないですか。(但し日本だけですよ。)どうもさうらしいやうですね。前に女は實際的だと云つたが、——さうな

ると又話が長くなるから、この邊でやめて置きますがね。ウエルテル式にしても、ドン・ジユアン式にしても、兎に角僕なぞは惚れる事に消化器の状態が關係してゐるのは、動かすべからざる事實ですよ、少し位惚れたと思つても、腹具合が好くつて、ぐつすり眠られる時は大抵二晩か三晩位すると、けろりと忘れてしまひますからね。そんな事を考へると聊か寂しくなりますよ。ミユツセやハイネを採したつて、胃袋と戀なぞと云ふ殺風景な詩は、恐らく一つだつてありやしますまい。藝術にも天才が必要なやうに惚れるのにもきつと天才が必要なんでせうね。それなら僕は惚れる方ぢや、どうも下根（げこん）の凡夫のやうです。

（談）

\*

ご覧の通り、凡そ内容は全く以つて一致しない。

佐野花子が言う「田端居士」の署名で「僕の最も好きな女性」という題名の文章（アンケートへの答えの感が強い）が、今後、どこかの雑誌から発見されることを願うものである（「佐野さん」同様、私は『淑女画報』のバック・ナンバーを縦覧したわけではないことは申し添えておく）。

これは皮肉ではない。これが佐野花子によつて創作された架空の文章であるかどうかは私には断定出来ない。しかも私は、この花子の示した「田端居士」の署名で「僕の最も好きな女性」という題名の文章自体は、芥川龍之介が書いたとして、少しもおかしくない文章だとさえ感じているのである。それは私が佐野花子の肩をなるべく持つてやりたいと感ずる人種だからである。それは——芥川龍之介を愛する等価の義務として——である。

「私は彼に好感を持たれていたのだ、愛されていたのだ、どうしようもないほど愛されていたのだ」「彼の口から洩れ出た私への思慕のことばは、別に嘘ではなかったのだ」「社交辞令と受け流していたのは私で、本気で言っていたのは彼だったのだ」「私は彼のテストで受けていた」というのは、彼に問いかけられた愛の倫理の中で、至極、道徳的な判断と世間並みの解答しか与えなかつた私を突き放し、あの地を去り、そして交際を断ち、夫を憎み、私への思慕を残して一片のハガキすら呉れないのだ」ある種の精神科医ならば、恐らくこれを病跡学的に、典型的な關係妄想の様態であると断ずるかも知れぬ。しかし、私は百歩譲つて、これが花子のなかの關係妄想であつたとしても、では、芥川龍之介はここに書かれているような恋愛感情や誘惑染みた問いかけを彼女にしなかつたかといえ、明確に「否」と答える。龍之介は花子に恋愛感情を抱いていたことは明白であると私は断言するものである。

『昭和二年七月二十四日の朝刊において「芥川龍之介謎の自殺」を知った』これは昭和二（一九二七）年七月二十五日の誤認である。芥川龍之介の自殺は確かに二十四日未明であつたが、この日の朝刊には報知は無論間に合はず（自殺の公表は同日の夜、午後九時。親族が反対したものの、久米正雄の説得により、貸席「竹むら」で久米が「或舊友へ送る手記」を発表、それを以つて自殺が公にされたものである）、しかもこの日は日曜日であり、夕刊はなく（死亡の報知だけならば、そこで公表はあつたかも知れない）、自殺の報道は翌日の朝刊となつたからである。因みに、画像で見ると、

『東京日日新聞』の同日朝刊のトップ見出しは、  
『文壇の雄芥川龍之介氏』／『死を讃美して自殺す』／『昨曉睡眠劑を吞んで』／『夫人親友らに遺書を残し』／『一般自殺者の心理を詳細に認む』（最後は「したたむ」であろう）  
『東京朝日新聞』の同日朝刊のトップ見出しは、  
『芥川龍之介氏』／『劇藥自殺を遂ぐ』／『昨晚、瀧野川の自宅で』／『遺書四通を残す』（「瀧野川」「たきのがわ」で当時、田端が含まれていた町名）  
である。

「仰向けの死顔の写真も掲載されている」「こういう最後の顔を写真で見ようとは」盟友の画家小穴隆一が描いたデス・マスクでスケッチ画。狭義の写真（フィルム）ではないので注意。上記『東京日日新聞』朝刊に掲載されてある。

「小穴隆一、久米正雄、菊池寛らが死の床を取り巻いている写真」これは確かに写真（上記二紙ともに載る）であるが、芥川龍之介の「死の床」は誤認で、「竹むら」での久米によって「或舊友へ送る手記」が部屋の中央で読み上げられ、その周囲に友人らが居るという一枚である。

「自殺をしたという女学生もあったと報道されました」不詳であるが、あっても当然の如くおかしくない。

「の芥川に私の面影は抱かれたままになったと思いました。確かにそういうところがあったと思いますが」非常に意味深長な言葉である。事実、花子はそう思ったのだ、と私も思う。

「病床に臥すようになって」花子はその後、結核に罹患している。

「芥川の作品の端々には何かほのかに頭って来る月のひかりがあつて、つめたく白いまぼろしが見えるように思えるのです。女性を描くとき口癖のようにく昼の光の中でも月光の中にいるやうだった」と述べるのでございます。月光の女は彼の理想像であつたこと、つぶさにその口から聞いております。私に絡めた理想像でもあつたと申せない私ではございません。全面的でないとしても必ず一面においては私も加わっていると信じられるのでございます」これは非常に重要な箇所である。そうして私はここに何らの妄想も感じない。私が女で、芥川龍之介とかくも親交があつたならば、「月光の女は「私に絡めた理想像でもあつたと申せない私ではございません。全面的でないとしても必ず一面においては私も加わっていると信じられるのでございます」と確かに思いたいし、思うであろう。しかもここで花子は「月光の女は彼の理想像であつたこと」を「つぶさにその「芥川龍之介自身の「口から聞いて」と証言しているではないか。これのどこが危ない妄想であろうか！

『久米正雄は、／「月光の女のなかで、芥川が、月光といふ言葉を、意識して、幾度かくりかへして使つたのは死に際して、過去の思ひ出の中に真に美しく感じた女に対し、愛慕の象徴として考へたものに逢ひない」／と述べて居ります』花子は、これを次に示す宇野浩二の「芥川龍之介」（昭和三〇（一九五五）年十月文芸春秋新社刊。これは昭和二六（一九五一）年九月から同二七（一九五二）年十一月までの『文学界』に一年三ヶ月に及ぶ長期に連載されたものに、後に作者がさらに手を加えたもの）の上巻の「十一」から孫引きしたものと判

断する。[ここ](#)。リンク先は私のブログ版電子テキスト注で、全文はサイトHTML版の[上巻・下巻](#)で読める。縦書も用意してあるので、どうぞ。当該箇所とそれに続く宇野の見解を引いておく（傍点「、」は太字に変えた。下線やぶちゃん）。

\*

さて、前の章で、『或阿呆の一生』の中に出てくる女は三四人ぐらい、と述べたが、久米が、『月光の女』のなかで、芥川が、月光という言葉を用いて、意識して、幾度かくりかえして使ったのは、「死に際して、過去の思ひ出の中に真に美しく感じた女に対し、愛慕の象徴として考へたものに違ひない、」と述べているが、私は、芥川が、それぞれ、芥川流の見方で、美しく感じた女を、みな、月光の女にしまったのではないか、と考えるのである。

それから、久米は、また、おなじ文章のなかで、その相手は、四章にわかれて書かれているから、「読者はひよつとすると、この四人が四人とも同じ人の摸写だと思ふかも知れないが、――それが私の最も危険な独断だらうが、実に、四人が四人とも、全く別な人だと思へるのだ。そして其の一々（いちいち）に、多少思ひ当る筋があるのだ。但しその推定人物が、実際に当つてゐるかどうかは私に取つても全幅の自信はなく、実はひそかに私の企画で、今のうちに現存の関係人、小谷隆之、殖生愛石、大島理一郎、木崎伊作、滝井等を集め、一夕、非公開の座談でも開いて、此の**おせつかい**な決定版を得ておきたいやうな気もするが、この顔ぶれに失礼だが、信輔夫人とそれから彼の最も近親の、藤曼俊三氏を加へて、あの『痴人の生涯』の全部にわたり、検討を加へておく事も、一つの傷（きず）いた大正作家の文芸史であらうかと考へる、」と述べている。

これには私も大賛成である。それは、「今のうちに現存の関係人」と述べた当人の久米がなくなつた今、久米の遺言どおり、小穴隆一、室生犀星、小島政二郎、佐佐木茂索、滝井孝作のほかに、芥川夫人と葛巻義敏を加えて、非公開でなく、『或阿呆の一生』の全部にわたつて検討を加える、公開の座談を是非（ぜひ）ひらくべきである。そうして、それは芥川とまったく縁故の深かった「文藝春秋」が進んでもよおすべきであらう。そうして、もしそういう座談会が実現されたら、（実現されたら、である、）佐藤春夫と私もその末席に加（くわ）えてほしい。

\*

以上の、久米の「月光の女」（昭和二六（一九五二）年一月発行の『中央公論 文藝特集』初出）は、私は未見であるが、芥川龍之介の実録物でありながら、ご覧の通り、登場人物名を変名にしてある（後注参照）。

『宇野浩二も、／「私は、芥川が、それぞれ、芥川流の見方で、美しく感じた女を、みな、月光の女にしまったのではないかと考へるのである」／と述べております』前注引用の二つ目の下線部参照。

「殖生愛石、大島理一郎、木崎伊作、滝井等を集めて一夕、非公開の座談会でも開いて、決定版を得ておきたいなどという問題にまでなっております」前注引用の三つ目及び四目の下線部を参照されたい。これは「殖生愛石」が「室生犀星」、「大島理一郎」が「小島政二

郎」「木崎伊作」が「佐佐木茂索」、「滝井」が滝井孝作のことである。

「私は陰のかげの方においてそれらを読み知り、誰も私の存在に気のついていないのを感じます」——いいえ、花子さん、少なくとも私は、気がついていましたよ、そうして、これからもずっと、貴女を芥川龍之介の思い人「月光の女」たちの「一人」として数え続けますよ、花子さん——

「機関学校での謝罪問題があったりして居りますから、少しそこらを押しひろげて行けば、たとえ小さくとも、私どもが存在しておりましたことから、何かは引き出せるのではございますまいか」……そうですね、花子さん、まさに、その通りですね、しかし何故か、沢山の芥川龍之介のアカデミズムの専門学者や在野研究家がいるのに（最近では中国人の優れた芥川龍之介研究の学者までいるのですよ）、だのに、誰一人として、それを発掘出来ないんですよ、それって、実におかしなことですよ、花子さん……

「松村みね子」芥川龍之介の最後の思い人であったアイルランド文学者で歌人であった片山廣子（明治一一（一八七八）年～昭和三二（一九五七）年）のペン・ネーム。私は彼女を追いつけている。私の彼女の電子テキスト群や、私のブログ・カテゴリ「片山廣子」を参照されたい。芥川龍之介より十四年上。「或阿呆の一生」の（リンク先は私の古い電子テキスト）、

### 三十七 越し人

彼は彼と才力（さいりよく）の上にも格闘出来る女に遭遇した。が、「越し人（びと）」等の抒情詩を作り、僅かにこの危機を脱出した。それは何か木の幹に凍（こど）った、かじやかしい雪を落すやうに切ない心もちのするものだった。

風に舞ひたるすげ笠（がさ）の

何かは道に落ちざらん

わが名はいかで惜しむべき

惜しむは君が名のみとよ。

は片山廣子である。廣子は明らかに芥川龍之介にとって最後にして最愛の「月光の女」であったと私は信じて疑わない。但し、それを話し出すとエンドレスになってしまうし、何より、花子さんが妬くだらうから、これまでとする。

「岡本かの子」小説家で歌人の岡本かの子（明治二二（一八八九）年～昭和一四（一九三九）年）。芥川龍之介より三つ年上。芥川龍之介をモデルとした実録風小説「鶴は病みき」（昭和一一（一九三六）年六月号『文學界』初出。リンク先は「青空文庫」で知られ、作家仲間として親しくは付き合ったが、私は彼女は「月光の女」の一人どころか、龍之介は一度として彼女に惹かれたことはなかったと断言出来る。少なくとも、彼女は芥川龍之介の好みの女性では、全く、ない。

「松村みね子は軽井沢の万平ホテルで」「会った」私は芥川龍之介と片山廣子の密会について、軽井沢の万平ホテルで実地に調査し、『変奏曲片山廣子「五月と六月」を主題とした藪野唯至による七つの変奏曲』という評論をかつて（二〇〇九年）書いた（藪野唯至名義）。未見の方は是非、お読みあれかし。

「岡本かの子は鎌倉の雪の下ホテルH屋で会った」先に注した小説「鶴は病みき」（リンク先は「青空文庫」）を参照。鎌倉駅西口直近にあった平野屋別荘。かの子が同宿したのは、大正十二（一九二三）年八月。

「こんなことは只の興味に過ぎないと宇野浩二は言っております」先と同じ「芥川龍之介」の「十一」の[ここ](#)。以下の引用しておく（下線やぶちゃん）。先に私が引いた「[或阿呆の一生](#)」の「三十七 越し人」を引用した後、

\*

つまり、久米の考えは、この『越し人』は、大方（おおかた）の意見によると、松村みね子夫人が「殆んど確定的」であるが、しかし、「確定的」というだけで、岡本かの子とも見られるところがあるから、これを「確認しておく必要が多分にあるかも知れない、」というのである。

ところで、私も、「確認しておく必要」はある、とは思うけれど、私は『確認』などなかなか出来ない、と考えるのである。ところが、いずれにしても、おもしろいのは、芥川は、松村みね子とは、軽井沢の万平ホテルで、逢っており、岡本かの子とは、鎌倉の雪の下ホテルH屋「註―かの子の『鶴は病みき』による」で、何日間か、となりの部屋で、同宿している事である。が、しかし、こういう事は、唯の興味のようなものである。興味といえば、時の人の謎の女（つまり、小穴のS女史）も、この、みね子も、かの子も、みな、歌人であり、噂だけでいえば、ほんの噂の、九条武子も、柳原白蓮も、また、歌人である事などである。が、こういう事は何の問題にもならない。

\*

なお、厳密に言えば「となりの部屋」ではなく、庭を隔てた向いの部屋であった。因みに「S女史」とは、かの芥川龍之介を終生悩ませた、最初の不倫相手で歌人の秀しげ子のこと。

「九条武子」（明治二〇（一八八七）年～昭和三（一九二八）年）は教育者で歌人。才色兼備として持て囃され、柳原白蓮（次注参照）・江木欣々（えぎきんきん…芸妓）とともに「大正三美人」と称された。仏教系の京都女子専門学校（現在の京都女子学園、京都女子大学）の創立者としても知られる。芥川龍之介より五つ年上。

「柳原白蓮」（明治一八（一八八五）年～昭和四二（一九六七）年）は歌人。大正天皇の生母である柳原愛子の姪で、恋に生きた女として有名。芥川龍之介の妻文が晩年、龍之介の自殺願望を知り、監視を兼ねて依頼して近づけさせた幼馴染み平松麻素子（ますこ）の師で、自死の年の四月、龍之介がこの平松と心中を帝国ホテルで企てた際（但し、これは龍之介の自棄的発作的企画であり、私は龍之介は平松を必ずしも愛していなかったのではないとさえ考えている。実は私は平松を「月光に女」の一人として数えるのさえ、やや躊躇を感じる

ぐらいである）、白蓮が止めに入って事なきを得たことを、白蓮自身が龍之介の死後に回想している。芥川龍之介より七つ年上。

「ほんの噂もみな歌人であるとも述べておりまして、世間的に名が挙げられているから、真のその人ではなからうということでございましょう」前二者（九条と柳原）の女性性は芥川龍之介との関係が「ほんの噂」として取り上げられたことは確かに事実としてあるが、それは私も「只の」世人の「興味」本位のガセネタに過ぎないと私も認識しており、少しも彼女らを「月光の女」の候補に入れようなどと考えたことは、一度として、ない。特に私は実は柳原白蓮は生理的に受けつけられない厭なタイプに女性である。

「こういうことは何の問題にもならないとも述べております」宇野浩二が、である。先の引用下線部を参照のこと。」

「やぶちゃん注」以下、佐野花子は芥川龍之介の特殊な編集になる、異様に偏執的な遺稿詩稿草稿集(抄録)である、芥川龍之介遺著・佐藤春夫纂輯「澄江堂遺珠 *Sois belle, sois triste.*」(初出は佐藤春夫編集になる、やぶんな書房発行の雑誌『古東多万(ことたま)』の第一年第一号から第三号に連載され、二年後の昭和八年三月二十日に岩波書店より単行本として刊行された)を引用しながら、叙述を続けてゆく。以下では変則的に私の字注と注を挟む形で進めてゆく。

私はこの「澄江堂遺珠 *Sois belle, sois triste.*」及びその関連資料の追跡も[ブログ・カテゴリ「澄江堂遺珠」という夢魔](#)で継続中で、既に「芥川龍之介遺著・佐藤春夫纂輯 澄江堂遺珠 *Sois belle, sois triste.* 附やぶちゃん注」として、その[ブログ版](#)の他、単行本の雰囲気を再現しようと努めた(完全ではない)[サイトHTML版](#)及び[PDF縦書版](#)(このPDF版を強く推奨する)で完成させている。従って、以下の叙述はそれらの孰れかを並べて披見しながら、[ご覧になられるのが最もよい](#)と思う。単行本「澄江堂遺珠」自体は必ずしも人口に膾炙しているものとは思われず、その単行本自体が必ずしも現在、容易に入手出来るものとは言えないからである。

また、最初に言ってしまうと、[佐野花子は単行本「澄江堂遺珠」を所持していると述べており、それを私は疑うものではさらさらないのであるが、しかし、彼女の引用の仕方は、多分に先の宇野浩二の「芥川龍之介」の中での「澄江堂遺珠」の引用とあまりにも酷似していると言えることは述べておく。無論、後で宇野浩二が「芥川龍之介」でこれらの詩群を引いて評を加えていることをも花子は述べ、引用もしている。](#)

しかし、[例えば、最初に引いている「雪は幽かにつもるなり／こよひはひともしらじらと／ひとり小床にいねよかし／ひとりいねよと祈るかな」という詩篇であるが、](#)

[これは宇野浩二が「芥川龍之介」の「上巻 十一」で「澄江堂遺珠」の詩篇の考察の冒頭で、やはり最初に引用している詩篇](#)

である（宇野浩二のそれはブログ版で示すと、[ここ](#)である）。

そんなのは偶然だと言われるかも知れない。しかし私には偶然である可能性はすこぶる低いと思えないのである。

何故か。

この詩篇は「澄江堂遺珠」の真ん中辺りに登場するもので、冒頭でも、特異な切れ目にあるものでもなく、必ずしもこれらの瘻癈的反復的詩篇の中で、目立って優れ、完成された一篇でもないからである。いや、完成どころか、

この宇野浩二と佐野花子が真っ先に引用している四行は、実は不完全な引用

なのである。私の「芥川龍之介遺著・佐藤春夫纂輯 澄江堂遺珠 *Sois belle, sois triste.* 附やぶちゃん注」を例えば、[サイトHTML版](#)で見て戴くと、「雪はかすかにつもるなり」で検索して貰うと一目瞭然、この四行詩に相当するものは一ヶ所しかないことが判る（他に二ヶ所あるがそれは以下の三行が違う）が、しかしそれは、四行詩ではなく、

ひとり葉巻をすひをれば  
雪はかすかにつもるなり  
こよひはひともしらじらと  
ひとり小床にいねよかし  
ひとりいねよと祈るかな

という五行詩なのである。

実はこの詩は、前のページ（四十三頁）に第一行「ひとり葉巻をすひをれば」があつて、以下の四行が次のページ（四十四頁）に繰り越されてあるのである。

本詩篇は四行一組の詩篇が多いために、これは確かに間違いやすいとは言えるのではあるが、だからと言って、花子が宇野と同じ感性でこれを選び、宇野と同じように誤読して一行目を抜かしたというのは、宇野の迂闊さと花子の迂闊さが偶然にも一致したという、文学を学んだ花子にとっては、これ、すこぶる侮辱的な阿呆らしい事例を明らかにするということになるからである。

——誰かの一纏まりの知られていない詩集があつた時  
——それをオリジナルに語り出そうとする時  
——最初にどの詩篇を引用するか？

これはその人の文章のオリジナリティを一発で決める要である――

まだ偶然だ、と言ひ張る人のためにダメ押ししておく。

それに続く、「きみとゆかまし山のかひ／山のかひには日はけむり／日はけむるへに古草屋／草屋にきみとゆきてまし」及び「きみと住みなば」で始まる不完全草稿も、やはり宇野浩二が前の詩篇の後に、『それから、次のようなものもある』と挟んで、引いているものと全く同じ詩篇である。ところが、これも私の全テキストで点検して貰うと判るが、これらは実は、前の詩篇とは原典では繋がっておらず、五ページほど後(四十九頁)に離れて出る詩篇二篇で、しかも、その二篇の間には、四行詩一篇が挟まっており、それをカットしたもののなのである！ 宇野も花子も二人とも、そのカットを述べて引いているのである！ これも偶然の一致などすることは、最早、私には苦しい言い訳でしかないと言ひようがないのである。

私は佐野花子を味方ではあるつもりではある。であるが、しかし、おかしな所・怪しい所・尋常な反応とは思われぬ所は毅然として批判・指摘しないわけにはいかない。そして、そうした批判も含めつつも、それでも総体に於いて、佐野花子を芥川龍之介研究に復権させたいというのが、この大阿呆の私の、大真面目な目標だからである。」

佐藤春夫が編集しました「澄江堂遺珠 (Sois belle, sois triste)」という詩集を私も読んでおります。(“ Sois belle, sois triste” ) は「美しかれ。悲しかれ」の註をもっております。この詩集は芥川の抒情を問題にしております、一つの連を幾度も直し、又、元に戻したりして、長時間を費やしながら、誰か一人を思いつめているさまを追求しています。

雪は幽かにつもるなり

こよひはひともしらじらと

ひとり小床にいねよかし

ひとりいねよと祈るかな

きみとゆかまし山のかひ

山のかひには日はけむり

日はけむるへに古草屋

草屋にきみとゆきてまし

きみと住みなば

}} 山の峽

ひとざととほき(消)

}} 山の峽にも日は煙り

日は煙る□□□□

「やぶちゃん字注…」は底本では大きな二行に亘る一つの括弧で、実際には行間下に「山の峡」「やまのかひ」と読む）は入る。また、最終行の□は底本では細長い長方形一つである。ブラウザ上の不具合から、概ねの字数に合わせて□で示した。以下、□部分は同じ処理をした。以下ではこの□についての注は略す。」

右の一連について佐藤春夫は、「即ち知る故人はその愛する者とともに世を避けて安住すべき幽篁叢裡の一草堂の秋日を夢想せる数刻ありしことを」と註しておりまして、宇野浩二も「さうだ、さうなのだ。誠に佐藤の云ふとほり、芥川は、かういふ事を（俗な言葉でいへば、「手鍋さげても……」といふやうな事を）夢想せる数刻があつたのであらう」と「夢想せる数刻が」と述べております。芥川にはこのように一人を想いつめる折々があつただろうことは、私にもよくうなずけるのです。夢想のみならず、明らかに面と向つて直情を訴えることがありました。私はその経験がごさいますのでわかります。「やぶちゃん字注…宇野の評言の箇所に違和感を持つ人があるかも知れぬが、ここは実際、『さうだ、さうなのだ、誠に佐藤の云うとおり、芥川は、こういう事を、（俗な言葉でいえば、手鍋さげても……』というやうな事を、）夢想せる数刻があつたのであらう、「夢想せる数刻」が。』と、病後に著しく文体が変容し、奇妙なくどくどしい書き方になつた宇野浩二特有の言い回しを、花子が違和感のないように何とか再現しようと試みたことが判る。宇野の原文はここ。」

そして佐藤春夫はこれらの詩とならべて、  
『戯れに』（１）（２）と題した、「やぶちゃん字注…底本では次の詩篇が行空けなしで続いているが、恣意的に空けた。」

君と住むべくは下町の  
水どろは青き溝つたひ  
汝が洗湯の往き来には  
昼も泣きづる蚊を聞かむ

戯れに(1)

汝と住むべくは下町の  
昼は寂しき露路の奥  
古簾垂れたる窓の上に  
鉢の雁皮も花さかむ

「やぶちゃん注…最初一篇の一行目「君と住むべくは下町の」は花子の誤りで、「汝と住むべくは下町の」が正しく、四行目「昼も泣きづる蚊を聞かむ」も「なきづる」と平仮名が正しい（宇野浩二の引用も花子と同じく「泣きづる」と誤っている）。なお、花子は二篇目の最

終行の次行の下方に「戯れに(2)」と記すのを忘れている。

「雁皮」は古く奈良時代から紙の原材料とされてきたフトモモ目ジンチョウゲ科ガンピ *Diplomorpha sikokiana* を指し、初夏に枝の端に黄色の小花を頭状花序に七から二十、密生させるものであるが(「グーグル画像検索「雁皮の花」」、どう考えても地味な花で、それをまた鉢植えにするというのは、如何にも変わった趣味と言わざるを得ない。そうした不審を解いてくれるのが、「澄江堂遺珠」の末尾に記された校正家神代(こうじろ)種亮の「巻尾に」という文章で、神代はそこで「雁皮」について、これ『は事實から見て明かに「眼皮」の誤書である。雁皮は製紙の原料とする灌木で、鉢植ゑとして花を賞することは殆ど罕な植物である。眼皮は多年生草本で、達磨大師が九年面壁の際に睡魔の侵すことを憂へて自ら上下の目蓋を剪つて地に棄てたのが花に化したのだと傳へられてゐる。花瓣は肉赤色で細長い。』と記している(「罕な」は「まれな」と読み、「稀」と同義。「目蓋」は「まぶた」)。まさにこれは目から鱗である。これはジンチョウゲ科のガンピではなく、中国原産で花卉観賞用に栽培されるナデシコ目ナデシコ科の多年草である別なガンピ(岩菲(がんぴ)) *Lychnis coronata* であつたのである。こちらのガンピ(岩菲)は茎は数本叢生し、高さは四十〜九十センチメートルほどになり、卵状楕円形の葉を対生させ、初夏に上部の葉腋に五弁花を開くが、花の色は黄赤色や白色といった変化に富む。[グーグル画像検索「Lychnis coronata」](#)でその鮮やかな花を見られたい。これは確かに神代の言う通り、「雁皮」ではなく「岩菲」に違いない。」

という詩を引いて「と対照する時一段の興味を覚ゆるなるべし。隱栖もとより厭ふところに非ず。ただその他を相して或は人煙遠き田園を択ばんか、はた大隱の寧ろ市井に隱るべきかを迷へるを見よ。然も『汝と住むべくは』の詩の情においては根帯竟に一なり」としております。とにかく、芥川の詩の奥にまで踏み込んで追求しようとする、結局は好奇の心と申しましょうか、まことに熱意あくなき探求心であると言えます。そして芥川の純情きわまりなさ、ロマンティストあることなど、推敲に推敲を重ねた文体から来るひやかさでは、とても想像のつかぬような浪漫心を知ることができます。私に対して言うことばも、純情きわまるものでございました。それはお読み返し下されば、おわかりのことと思います。そして、

「やぶちゃん注…ここでの改行はママ。佐藤春夫の引用部の「相して」は占つて・判断しての意、「大隱の寧ろ市井に隱るべきか」とは「大隱(たいいん)は市(いち)に隱る」という故事成句で、「真(まこと)の隱者たるものは人里離れた山中などに隱れ住んだりせず却って俗人に混じって町中にありながら超然と暮らすものである」という晋の王康琚「反招隱詩」の「小隱隱陸藪 大隱隱朝市」(小隱は陸藪(りくさう)に隱れ 大隱は朝市(てうし)に隱る)に基づく語である。「根帯竟に一なり」これは花子の誤記か或いは誤植で、「根帯竟に一なり」である。読みは「こんたいいついにいつなり」で「根帯」は植物の基幹を成すところの根と蒂(へた)の意で「物事の土台・拠りどころ・根拠とするところ」を指す。そ

の拠って立つところの揺るぎない詩根・詩心は完全に一つであるの意。」

この遺稿は、大学ノートに書かれた腹稿の備忘とも見るべきものが興のままに不用意に記入されているのを、追って推敲して行った変化のあといちじるしく、一字もいやしくしない作者の心血のしたたりが一日歴然でありますのに、折にふれては詩作と表面上なんの関連もなさそうな断片的感想や、筆のすさびの戯画なども記入されてあるよし、作者の心理の推移、感興の程度を窺うに実に珍重至極な資料として、佐藤春夫が「はしがき」に述べている通り、貴重な資料でございます。書いては筆を措き、また、書き変えて見ては、中止し、考え込んでいるあいだの長さを推測できますし、そこで誰か一人の人を確かに思いつめております。人を追いつめるのか、推敲の方法を追いつめるのか、どちらともわからなくなり、まずけれど、明らかに人进行詩を創作中なのでございますから、やはり人を思いつめているのだとも申せます。

「やぶちゃん注…この評は首肯出来、花子の穩当にしてオリジナルなものとして好ましい。」

幽かに雪のつもる夜は

ココアの色も澄みやすし

こよひ□□□□

こよひは君も冷やかに

独りねよとぞ祈るなる

幽かに雪のつもる夜は

ココアの色も澄みやすし

今宵はひとも冷やかに

ひとり寝よとぞ祈るなる

「やぶちゃん字注…太字は底本では傍点「●」。なお、これら以下も残念ながら、宇野浩二の

引用と一致している。しかもこれら以下は先の引用部より前の箇所（原本三十頁）から始ま

るものである（逆順引用の一致）。なお、花子は最初の一編の原典の傍点、白ヌキの「、」

（以下の太字部）、

幽かに雪のつもる夜は

ココアの色も澄みやすし

こよひ□□□□

こよひは君も冷やかに

独りねよとぞ祈るなる

を打つのを忘れている。」

幽かに雪のつもる夜は  
ココアの色も澄みやすし  
こよひはひとも冷やかに  
ひとり寝よとぞ祈るなる

右は両章とも××を以て抹殺せり。

その後二頁の間は「ひとりねよとぞ  
祈るなる」は跡を絶ちたるも、こは  
一時的の中止にて三頁目には再び

「やぶちゃん字注…以上の三字下げは佐藤春夫の註で、底本ではポイント落ち。私のこのテキストではブラウザの不具合を考えて一定字数で改行してある。なお、以下の詩篇本文に挿入された佐藤の註も底本ではポイント落ちである。以下同じなので、この注は略す。」

かすかに（この行——にて抹殺）

幽かに雪の

と記しかけてその後には

「思ふはとほきひとの上

昔めきたる竹むらに」

とつづきたり。その後の頁には又

「やぶちゃん字注…佐藤の注の最初の開始位置はママ。これは本書の版組の誤りと思われる。  
「又」は原典では「また」で、ひらがなである。」

幽かに雪のつもる夜は

（一行あき）

かかるゆうべはひややかに

ひとり寝「ぬべきひとならば」

（二）の中の八字消してその左側に

「ねよとぞ思ふなる」と書き改めたり」

さてこの七八行のうちには

「やぶちゃん注…底本では佐藤の注の頭は「（一）」であるが、取り敢えずかく、しておいた。  
しかし、ここは実は全体が写し誤り（複数箇所）であり、原典は三字下げで、

（二）の中の八字消してその左側に「ねよとぞ思ふなる」と書き改めたり）

さてこの七八行後には

が正しい。」

雪は幽かにきえゆけり  
みれん□□□□

とありて

「やぶちゃん字注…原典ではここに三字下げポイント落ちで「\*」が入る。」

夕づく牧の水明り  
花もつ草はゆらぎつつ  
幽かに雪も消ゆるこそ  
みれんの□□□□

などと、似たような詩句が一転二転して、書きつづられてある後に、

「やぶちゃん注…この行、ポイント落ちなので読者諸君は当然佐藤春夫の註と思うのだが、この一行は——佐藤春夫の言葉——では、ない。——宇野浩二の「芥川龍之介」の本文の宇野自身の言葉の挿入部——である。[ここをご覧ください。](#) やっちゃましたね、花子さん。」

幽かに雪のつもる夜は  
折り焚く柴もつきやすし  
幽かに いねむきみならば

「やぶちゃん字注…太字は底本では傍点「●」。」

(一行あき)

ひとりいぬべききみならば  
~~~~~  
併記して対比推敲せしか  
~~~~~  
幽かにきみもいねよかし

「やぶちゃん字注…」は底本では大きな二行に互る一つの括弧で、実際には行間下に上記の佐藤の註が入る。」

とあって、更に似たような詩句が十句あまりもあって、その書後がつぎのような詩になつてゐる。

とあり、

「やぶちゃん注…この「とあって、更に似たような詩句が十句あまりもあって、その書後がつぎのような詩になつてゐる。」も先と同じく、同じ個所の宇野浩二の挿入部である。」

雪は幽かに つもるなる

こよひは ひとつも しらじらと

ひとり小床にいねよかし

ひとりいねよと祈るかな

「やぶちゃん字注…太字は底本では傍点「●」。この字空けは原典にも宇野浩二の酷似引用にも見られない特異点である。」

幾度か詩筆は徒らに彷徨して時に

は「いねよ」に代ふるに「眠れ」

を以てし或は唐突に「なみだ」

「ひとづま」等の語を記して消せ

るものなどに詩想の混乱の跡さへ

見ゆるも尚筆を捨てず。

「やぶちゃん注…この引用も宇野にあるが、末尾の句点は花子によるもの。実は原典は読点で、続いて「尚筆を捨てず、最後には再び」として詩篇が続いている。」

と佐藤春夫が右、解説しておりますように、幾度も繰り返しては出直している詩でございませう。佐藤春夫の執念にも驚かされます。そして更に次のような詩になっているのを私は見ます。

「やぶちゃん注…この以下の引用の前には、原典の一篇分が省略されている。しかも同じ省略した形でやはり宇野浩二も以下を引用しているのである。ここまできると最早、佐野花子は「芥川龍之介遺著・佐藤春夫纂輯 澄江堂遺珠 Sois belle, sois triste」から直接、これらの詩篇を引いたのではなく、宇野浩二の「芥川龍之介」から孫引きした可能性が極めて高いことが判明してしまうのである。私には、この段落末の――「私は見ます」――という花子の胸を張った毅然とした言い放ちが、何とも、哀しく響いてきてしまうのである。」

ひとり葉巻をすひ居れば

雪ほかすかにつもるなり

かなしきひとつもかかる夜は

幽かにひとりいねよかし

「やぶちゃん字注…太字は底本では傍点「●」。」

ひとり胡桃を剥き居れば  
雪は幽かにつもるなり  
ともに胡桃を剥かずとも  
ひとりあるべき人ならば

「やぶちゃん注…原典では後者の一篇の上には音楽記号のスラーのような太い丸括弧「」が四行に互って懸けられてある。」

右の詩に関して宇野浩二は「この最後の小曲の後半の『ともに胡桃を剥かずとも、ひとりあるべき人ならば』といふ二節は、言外に意味ありげな感じがある。しかしその意味は、つぎにうつす詩を読めば、ほぼ悟れる」と述べて次の詩を写しております。

「やぶちゃん注…[ここ](#)。私はかく、「芥川龍之介遺著・佐藤春夫纂輯 澄江堂遺珠 Sois belle, sois triste.」・宇野浩二「芥川龍之介」そうして、この佐野花子「芥川龍之介の思い出」の三者を一つ一つ点検して校合してきて、ここに至って、花子が、私に面と向かって、

——私は宇野浩二の「芥川龍之介」から孫引きしてない、なんて言っていないわ。初めからそのつもりだったのですわ。

とはぐらかされてしまったような、ちょっと不快にして、少し奇異な感じを受けるのである。」

初夜の鐘の音聞ゆれば  
雪は幽かにつもるなり  
初夜の鐘の音消えゆけば  
汝はいまひとと眠るらむ

「やぶちゃん字注…太字は底本では傍点「●」。しかし、原典にも宇野浩二の引用にも傍点はない。ない、代わりに、後者の宇野の「芥川龍之介」の引用の方には、

初夜の鐘の音（ね）聞（きこ）ゆれば

という、ご丁寧な宇野のルビが振られてある。

——花子さん……あなたは宇野の「芥川龍之介」のこのルビを……傍点と勘違いなさったのではない、ありませんか？……………」

ひとり山路を越えゆけば

月は幽かに照らすなり  
ともに山路を越えずとも  
ひとり寝ぬべき君なれば

「やぶちゃん注…宇野の引用は二箇所で誤っており、厳密には（太字は底本では傍点白ヌキ「、」。下線やぶちゃん）、

ひとり山路を越えゆけば  
月は幽かに照らすなり  
ともに山路を越えずとも  
ひとり眠ぬべき君ならば

である。

——花子さん、貴女も文科の人間なら、せめてもちゃんと、お持ちのはずの「芥川龍之介遺著・佐藤春夫纂輯 澄江堂遺珠 *Sois belle, sois triste.*」と校合すべきでした。それを惜しんだ結果が、貴女のこの本全体の一つの大きな別な新たな瑕疵となり、更には貴女が芥川龍之介研究家から遠ざけられてしまった、別の一因とも、なっているのではありますまいか?…  
……」

写し終わって宇野浩二は述べています。

「これらの詩を読みつづけながら、私は本音か、絵空事か、と迷ふのであるが、編集者の佐藤は、これらの小曲の書きつづられてある冊子について『かくて第二号冊子の約三分の一はこれがために空費されたり。徒らに空しき努力の跡を示せるに過ぎざるに似たるも亦以て故人が創作上の態度とその生活的機微の一端を併せ窺ふに足るものあるを思ひ敢て煩を厭はずここに抄録する所以なり』と述べております。澄江堂遺珠に苦心した佐藤春夫を追って、また宇野浩二もこれを解するに苦心し、私も亦、これを読んで、彼、芥川の苦作三昧にさ迷いながら、ひとしお、思いみだれる気がいたします。「誰であろうか。或いは私ではないか」と。いか」と。

「やぶちゃん注…ここで唐突に、『私も亦、これを読んで、彼、芥川の苦作三昧にさ迷いながら、ひとしお、思いみだれる気がいたします。「誰であろうか。或いは私ではないか」と。』という倒置文が出現するのである。」

宇野浩二も述べています「これらの、『かなしきひと』『ひとりあるべき人』『汝』『ひとり寝ぬべき君』——などと読まれているのは、いづこいかなる『人』であるか、それは現実の人か、はた、空想（あるひは夢）の人か」と。

「やぶちゃん注…何度も挙げている宇野浩二の「芥川龍之介」（昭和三〇（一九五五）年十月文芸春秋新社刊）の「十一」の[ここ](#)である。原文は『ところで、抑（そも）、これらの「か

なしきひと」、「ひとりあるべき人」、「汝」、「ひとり寝ぬべき君」、などと読（よ）まれているのは、いずこいかなる『人』であるか、それは、現実の人か、はた、空想（あるいは夢）の人か。以下の引用も総て、残念ながら、花子のオリジナル引用ではなく、宇野のものと全く同じである。」

雨にぬれたる草紅葉

侘しき野路をわが行けば

片山かげにただふたり

住まむ藁家ぞ眼に見ゆる

われら老いなばもろともに

穂麦もさはに刈り干さむ

夢むは

穂麦刈り干す老ふたり

明るき雨もすぎ行けば

虹もまうへにかかれかし

夢むはとほき野のはてに

穂麦刈り干す老ふたり

「やぶちゃん字注…『芥川龍之介遺著・佐藤春夫纂輯 澄江堂遺珠 *Sois belle, sois triste.*』ではここが二行空きとなっているが、花子は続けてしまっている。宇野は一行空けている。」

明るき雨のすぎゆかば

虹もまうへにかか

〔れとか（消）

〕れとぞ（消）

「やぶちゃん字注…『』は底本では大きな括弧一つ。『芥川龍之介遺著・佐藤春夫纂輯 澄江堂遺珠 *Sois belle, sois triste.*』ではここが一行空きとなっているが、花子は続けてしまっている。宇野は正しく空けている。」

ひとり胡桃を剥き居れば

雪は幽かにつもるなり

ともに胡桃は剥かずとも

ひとりあるべき人ならば

註（見よ我等はここにまた「或る雪の夜」に接続すべき一端緒を発見せり。宛然八幡の藪知らずなり。）

また、

雨はけむれる午さがり  
実梅の落つる音きけば  
ひとを忘れむすべをなみ  
老を待たむと思ひしか

ひとを忘れむすべもがな  
ある日は古き書のなか

月（香と書きて消しあるも月にては調子の上にて何とよむべきか不明。）

月 も消ゆる

白薔薇の

「やぶちゃん注」芥川龍之介遺著・佐藤春夫纂輯 澄江堂遺珠 *Sois belle, sois triste.*」では「*Sois belle, sois triste.*」ではなく「*Sois belle, sois triste.*」で、*Sois belle, sois triste.*」は「*Sois belle, sois triste.*」の右に佐藤による「マ」の注記があり、それ以下の【】内は括弧なしの二行割注で、花子の四行目の「月も消ゆる」は存在せず、「も消ゆる」は「月」【割注】の下に繋がっているのである。なお、宇野のそれは正しくそれを再現（二行割注も）してある。以下、割注を同ポイントで示す。

ひとを忘れむすべもがな  
ある日は古き書のなか

月【香と書きて消しあるも月にては調子の上にて何とよむべきか不明】も消ゆる

白薔薇の

老いを待たむと思ひしが

則ち、この詩篇は佐藤の割注から推定するなら、元は（抹消線を使用する）、

ひとを忘れむすべもがな  
ある日は古き書のなか

月番も消ゆる

白薔薇の

老いを待たむと思ひしが

或いは、

ひとを忘れむすべもがな

ある日は古き書のなか

番月も消ゆる

白薔薇の

老いを待たむと思ひしが

であるということを指示しているのである。」

ひとを忘れむすべもがな

ある日は秋の山峡に

……中絶して「夫妻敵」と人物の書

き出しありて、王と宦者との対話的断

片を記しあり……

「やぶちゃん注…この「対話的」は宇野浩二及び佐野花子《両者》の誤りで、原典は「戯曲的」である。ここに至って、《完全に花子が宇野の引用を無批判に孫引きしている》事実が遂に《完全に明らかにってしまった》。「宦者」は「かんじゃ」で宦官（かんがん）のこと。」

忘れはてなむすべもがな

ある日は□□□□□

牧の小川も草花も

夕べとなれば煙るなり

われらが恋も□□□□

夕なれば家々も

畑なか路も煙るなり

今は忘れぬ□□□□□

老さり来れば消ゆるらむ

「やぶちゃん注…一行目は《佐野花子による宇野浩二の引用の転写ミス》である。「夕なれば家々も」ではなく、「夕となれば家々も」である。宇野は正しく、そう引用している。さらに一方では、最終行「老さり来れば消ゆるらむ」で、今度は《宇野の転写ミスを花子が踏襲してしまうミス》を花子は犯している。原典は「老さりくれば消ゆるらむ」である。花子は全く原典を見ていないことがバレてしまっている。ここまできると、最早、はなはだ哀しくなってくるばかりである。」

註 別にただ一行「今は忘れぬひとの眼も」と記入しあるも「ひとの眼も」のみは抹殺せり。

かくて老の到るを待つて熱情の  
自らなる消解を待たんと詩想  
は遂にその完全なる形態を賦与  
されずして終りぬ。この詩成ら  
ざるは惜しむべし。

然も甚だしく惜むに足らざるに  
似たり。最も惜むべきは彼がこ  
の詩想を実現せずしてその一命  
を壮年にして自ら失へるの一事  
なりとす。

「やぶちゃん字注…原典に「註」はなく、「別にただ一行」で改行、「今は忘れぬひとの眼も」で改行している。宇野浩二は《花子が記す通りに、繋げてしまっている》。やはり《宇野のそれを無批判にただ孫引きした結果の齟齬》である。」

と宇野は述べているのです。これを読んでいる私の胸中には亦、誰知ることのない鼓動が高鳴って来るのでございました。「夫妻敵」とか「今は忘れぬひとの眼も」などの、胸にどきりと来ることばが、或いはと早鐘を鳴らすからでございます。

「やぶちゃん注…「宇野」はママ。ここは「佐藤」でなくてはおかしい。

《こういう大きなミスをしでかしたのは、まさに全く原典を一切見ずに、宇野の「芥川龍之介」から孫引きしてきたから》  
であり、

《全面的無批判孫引きがバレバレとなってしまう致命的なウツカリ・ミスの瞬間》  
なのである。微苦笑どころの騒ぎではない。

《こうしてチマチマと一字一句を原典と校合し、宇野浩二の「芥川龍之介」とも比較している私が、これ、御目出度い阿呆》  
に見え、流石に、

《花子を出来得る限り、弁護しようとしている私でも、多少、腹が立ってくる気がする》  
場面ではある。」

そうして今までの慕情は、もはや、人を憎み、人を殺す情念へと移って行く詩になるのでございます。

ひとをころせばなほあかぬ  
ねたみごろもいまぞしる  
垣にからめる薔薇の実も  
いくつむしりてすてにけむ

「やぶちゃん注…原典はここが一行空きとなっているが、花子は続けてしまっている。宇野は正しく空けている。更に花子は転写ミスを犯している。一行目は原典は「ひとをころせど

なほあかぬ」である（宇野は正しく引用している）。実は個人的にはこの花子の誤記に対してフロイト的な「言い間違い」の精神分析を仕掛けたくなる強い願望を私は持っているが、ここはそれをやっていると、何時までも注が終わらなくなるので、グツとこらえることとしよう。」

ひとを殺せどなほあかぬ  
ねたみ心に堪ふる日は

「やぶちゃん注…続いて花子痛恨の転写ミスである。ここは前の詩篇の最後の二行と殆んど相同の二行（すて）が「捨て」と漢字表記となる以外は相同）が頭に入る、別詩篇なのである。即ち、

垣にからめる薔薇の実も  
いくつむしりて捨てにけむ  
ひとを殺せどなほあかぬ  
ねたみ心に堪ふる日は

が原典のそれで、宇野も正しくそう引いているのである。」

同じ心を歌って「悪念」と題して次の詩があります。

松葉牡丹をむしりつつ  
人殺さむと思ひけり  
光まばゆき昼なれど  
女ゆゑにはすべもなや

「やぶちゃん注…原典では前の詩篇と後の詩篇の間のここに「\*」が入る。」

夜ごとに君と眠るべき  
男あらずばなぐさまむ

ここで私は亦、胸を騒がせます。こうも憎んでいるのは、私の夫のことではないのかと。「夫妻敵」と言い、「佐野さん」の、かの文章と言ひ、あまりにも芥川は女に付き添う男を憎む詩を歌い、そして事実、本名を出して「佐野さん」なる一文を書き、明らかに夫を憎み誹謗した事実がございます。これは、もう、ただごとではないように思われるのでございます。しかもこのノートの中において、

「夜ごとに君と眠るべき、男あらずばなぐさまむ」

の二行は抹殺しありと宇野は述べておりまして、「蓋しその発想のあまり粗野端的なるを好

まざるが故ならんか。しかも、この実感は、これも歌はではやみ難かりしは既に『悪念』に於て我等これを見たり」と付け加えてあります。この上にのしかかって私は亦、読みとりながら、胸の早鐘に、のたうちたい衝動を覚えます。新潮誌上に堂々と、かの一文を載せた彼が、僅か、人も見ぬところで、ノートの上に書き直す詩中に「その発想のあまり粗野端的なるを好まざる故ならんか」と言われるほどの遠慮をしていること、何かじれじれとする感慨にも襲われます。そして、「その発想のあまり粗野端的なるを好まざる故ならんか」と人は庇い、同時に「我等これを見たり」という快哉をも人は挙げるべく声を吞むのです。

「やぶちゃん注…この『宇野』もママ。これも『佐藤』でなくてはおかしい。宇野もここを引用しており、花子が完全に原典「芥川龍之介遺著・佐藤春夫纂輯 澄江堂遺珠 *Sois belle, sois triste.*」の存在を脳からスポイルしてしまっているさまが見てとれる。なお、正確には佐藤の註は、『右二句はこれを抹殺しあり。蓋しその発想のあまりに粗野端的なるを好まざるが故ならんか。然もこの實感これは歌はではやみ難かりしは既に「悪念」に於て我等これを見たり』であり（宇野は忠実に引用している）、二つを対比して見ると、花子は自分の読者に読み易くしようと、佐藤の表記に手を加えていることが判る。そこは彼女の優しさであると思う。」

そして又、次の詩には「汝が夫」という言葉が入り込んで来ているのです。

微風は散らせ柚の花を

金魚は泳げ水の上を

汝は弄べ画団扇を

虎痢（ころり）は殺せ汝が夫を

「やぶちゃん注…原典では「夫」に「つま」とルビ（宇野も振っている）があり、詩篇末行の次行下に、「夏」と芥川龍之介は記している。」

まあ、なんと、すさまじいことでしょう。好きな女性がいるのに、その夫が邪魔でしかたがない、いっそ「虎痢（ころり）は殺せ汝が夫を」「あなたの夫はコレラにかかって死ぬがよい」という悪念の追い打ちなのでございます。仮りに、私は愛されてまことに嬉しいございまして、あの善良な夫が、私ゆえに、これほどまで憎まれるなら、なんという、哀れなこととございましょうか。ただ、ほろほろと泣きくずれて今は亡き夫を、心から気の毒に思い、私の罪の深さを嘆かずには居られません。このモデルは私なのだと仮りに解つてもなんと悲しい宿命でございましょうか。夫は生前においても、精神的に殺されたように穏やかな笑いを浮かべ、自分の好きな道も忘れてしまいました。その上に、名こそ出さね、詩の中において、このようにまで憎まれ、殺されているのでございましょうならば。「やぶちゃん注…末文の「しよう」はママ。」

この身は鱧の餌ともなれ  
汝を賭け物に博打たむ  
びるぜんまりあも見そなはせ  
汝に夫あるはたへがたし

「やぶちゃん注…三行目「びるぜんまりあ」は原典では「びるぜん・まりあ」（宇野も中黒を打っている）。詩篇末行の次行下に、「船乗のざれ歌」と芥川龍之介は記している。」

この詩においても明らかに夫は憎悪され、彼は「お前に夫のあるのは堪えきれぬ」と言っているのです。思い当たる胸には突き刺さって抜けようもない剣なのでございます。

ひとをまつまのさびしさは  
時雨かけたるアーク灯  
まだくれはてぬ町ぞらに  
こころはふるふ光かな

梅檀の木の花ふるふ  
花ふるふ夜の水明り  
水明りにもさしぐめる  
さしぐめる眼は□□□□□

などには「眼」という語があります。「奥さんの眼はきれいだ」と言ったことが立ち返ってもまいます。

「やぶちゃん注…あたかも花子が原典から選んだように読めてしまうが、残念ながらこれらも宇野浩二の引用からのチョイスである。」

ゆふべとなれば海原に  
波は音なく  
君があたりの  
ただほのぼのと見入りたる  
死なんと思ひし

これには、まあ、横須賀の海が漂っているではございませんか。私には本当にそうとしか思えません。繰り返して読み、彼が、もう、会うまいと決意して、帰って行ったうしろ姿が見えてまいります。

「やぶちゃん注…これも宇野が引いているのであるが、花子の謂いは一つの可能性として、十分にあり得る、そのように読めるものではある。そうして、私はこの詩を読んだ芥川龍之介の心の中には、確かにあの〔三〕の冒頭の印象的な映像が過ぎったものと強く感じてさえいるのである。」

澄江堂遺珠、芥川龍之介の未定稿の詩は、佐藤春夫を、宇野浩二を、そして、私を悩ませたと思います。とりわけ私の苦悩は夫の分まで引き受け、誰にも知られぬ、打ちあけても信じて覚えぬ、取りつく島もない不安定に揺り動かされました。

全集第五巻の詩集を見ますと「相聞」という題の詩が三つ出ておりますが、次の詩をよみますと、そくそくとして私には懐かしさがよみがえってまいります。誰が読んでもいい詩なのですが、私の感懷は亦、別なのでございます。

また立ちかへる水無月の

歎きを誰にかたるべき

沙羅のみづ枝に花さけば

かなしき人の目ぞ見ゆる

私の横須賀の家の庭には沙羅の木もあったのでした。ただ、その家も今は無く、沙羅の木もどうなったか解らず、私には多く思い出の実感ばかりが残されておりますので、このことを人に語ろうとも、誰も信じはいたしませんまい。宇野浩二も、「澄江堂遺珠」の中にある、あの詩の大部分を仮りに相聞詩とすれば、そうして、あの詩を空想の恋を詠んだものとすれば、芥川には空想の恋人があったということになると申しております。「空想の恋人なら何人あっても差し支へないであらう」と言っておりますけれど、その空想の恋人と申すところには、やはり現実上の恋人が根ざして居り、それが翼をひろげ、月の光を呼び、詩の中の恋人、文中の恋人とならないと誰が申せましょうか。作家といえどモデルは周囲から採るのでございます。よく採られ悪く採られても自由なのでございます。ぜんぜん根も葉もない恋人は存在しないのでございましょう。覚えのある私には、こういうことが言えるのでございます。私どもと芥川が交友関係にありましたこと、また、とり分け彼が私に関心を持ちましたことなど、不用意に人に語りまして、人は次のように申して信じないでしょう。

「やぶちゃん注…『全集第五巻の詩集』とあるが、これは巻数から見ても、恐らく現在、『元版』と呼ばれている、昭和二（一九二七）年十一月から昭和四年二月にかけて岩波書店から刊行された最初の『芥川龍之介全集』と思われる。」

『「相聞」という題の詩が三つ出ております』恐らくは以下の詩形の三篇である。

\*

あひ見ざりせばなかなか  
空に忘れてすぎむとや。

野べのけむりも一すぢに  
立ちての後はかなしとよ。

## 相聞 二

風にまひたるすげ笠の

なにかは路に落ちざらん。

わが名はいかで惜しむべき。

惜しむは君が名のみとよ。

## 相聞 三

また立ちかへる水無月の

歎きを誰にかたるべき。

沙羅のみづ枝に花さけば、

かなしき人の目ぞ見ゆる。

\*

元版が載せるこれらを含む詩篇のパート部分の原資料は現在、所在不明であり、且つ、また、この「相聞」と題する詩篇群には幾つかの別稿が存在する。それに就いては「[やぶちやん版芥川龍之介詩集](#)」でそれらの異なる稿を含めて詳細に考証してあるので、ご覧にならいたい。

また、芥川龍之介には大正一四（一九二五）年六月一日発行の雑誌『新潮』に掲載された「[澄江堂雜詠](#)」（リンク先は私の電子テキスト）の最後に、「六 沙羅の花」という一章があり、そこに、この詩が載る（恐らくはこれが本詩篇の公式上の初出と判断される）。

\*

## 沙羅の花

沙羅木は植物園にもあるべし。わが見しは或人の庭なりけり。玉の如き花のにほへるもとには太湖石と呼べる石もありしを、今はた如何になりはてけむ、わが知れる人さへ風のたよりにただありとのみ聞こえつつ。

また立ちかへる水無月の

歎きをたれにかたるべき。

沙羅のみづ枝に花さけば、  
かなしき人の目ぞ見ゆる。

\*

以下、『[澄江堂雜詠](#)』で私が注したもの載せる。

\*

「また立ちかへる水無月の」の後には読点などはない。ママである。本詩は大正一四（一九二五）年四月十七日附の修善寺からの室生犀星宛書簡（旧全集書簡番号一三〇六）に『又詩の如きものを二三篇作り候間お目にかけ候。よければ遠慮なくおほめ下され度候。原稿はそちらに置いて頂きいづれ歸京の上頂戴する事といたし度。』とし（この原稿とは以下の詩稿を指すと判断する）、次の二篇を記す。

歎きはよしやつきずとも

君につたへむすべもがな。

越こしのやまかぜふき晴るる

あまつそらには雲もなし。

また立ちかへる水無月の

歎きをたれにかたるべき

沙羅のみづ枝に花さけば、

かなしき人の目ぞ見ゆる。

詩の後に『但し誰にも見せぬように願上候（きまり悪ければ）尤も君の奥さんにだけはちよつと見てもらひたい氣もあり。感心しさうだつたら御見せ下され度候。』微妙な自負を記している。

「沙羅の花」ここは、わざわざ「植物園」としている点、温室でなくても南方の地域では植生可能である点、更に芥川龍は特に「花のほへる」と花の香りを強調している点から、これを私は本物の沙羅双樹、即ち、被子植物門双子葉植物綱アオイ目フタバガキ科 Shorea 属 サラソウジュ *Shorea robusta* と一応、同定したい。これはサラソウジュ・サラノキ・シヤラノキ（沙羅双樹・沙羅の木・娑羅の樹）ともいう（異属のナツツバキも、かく呼称されるので要注意。後文参照）。インドから東南アジアにかけて広く分布し、南方域では高さ三〇メートルにも達する巨木となる。釈迦がクシナガラで入滅した際、臥床の四辺にあったこの四双八本の木が、時ならぬ不思議な鶴の群れの如き白い花を咲かせ、忽ち枯れたとされ、涅槃図によく描かれる。ヒンディー語では「サール」と呼ばれ、日本語の「シャラ」または「サラ」の部分はこの読みに由来する。春に白い花を咲かせ、ジャスミンに似た香りを放つ。但し、耐寒性が弱いため、本邦で育てるには通常は温室が必要で、稀に温暖な地域の寺院に

植えられている程度で希少である。各地の寺院では本種の代用としてツバキ科のナツツバキが植えられることが多く、そのためにナツツバキが「沙羅双樹」と呼ばれるようになり、ナツツバキ＝サラソウジュという大誤解が生ずることとなってしまった（ここまでは主にウィキの「サラソウジュ」に拠った）。本注を作成するためにネット上の多くの記載を縦覧したが、サラソウジュ *Shorea robusta* とナツツバキ *Stewartia pseudocamellia* の両者を全く同一種と考えている致命的な誤りを犯している記載から、ナツツバキを仏教の沙羅双樹と取り違えている寺院や愛好家グループ、両者が別種であることを知りながら、分布や花の記載の途中で両者が混合してしまっている記載等々、甚だしく錯綜していることに気づいた）。一応、沙羅双樹として本邦で多く誤認されている双子葉植物綱ツバキ目ツバキ科ナツツバキ属ナツツバキ *Stewartia pseudocamellia* ついても以下に記しておく。和名ナツツバキは仏教の聖樹であるフタバギ科のサラソウジュ（娑羅双樹）に擬せられて、別名でシヤラノキ（娑羅樹・沙羅・沙羅双樹などとも）と呼ばれているが、以上見たように全く異なる植物である。原産地は日本から朝鮮半島南部にかけてで、本邦では宮城県以西の本州・四国・九州に自生、樹高は一〇メートル程度。樹皮は帯紅色で平滑、葉は楕円形で長さ一〇センチメートル前後。ツバキのように肉厚の光沢のある葉ではなく、秋には落葉する。花期は月から七月初旬で、花の大きさは直径五センチメートルほどの白色の五弁。雄蕊の花糸が黄色い。朝に開花、夕方には落花する一日花（以上はウィキの「ナツツバキ」の拠った）。但し、ネット上の混乱と全く同様に、芥川龍之介が「植物園にもあるべし」と言ったのは、サラソウジュ *Shorea robusta* のことであったが、後の「わが見しは或人の庭なりけり。玉の如き花のほへる」も方はナツツバキ *Stewartia pseudocamellia* の誤認ではなかったか、という推理は可能性として残る。何故なら、高木のサラソウジュ *Shorea robusta* は相当に成長しないと植物園の温室内でも花を咲かせることが出来ないとネット上の記載にあるからである。

「植物園」この時代の小説などで、東京でただ「大学」と言えば東京大学であるように、この「植物園」も一般名詞ではなく、芥川は現在の文京区白山にある小石川植物園（現在の正式名称は東京大学大学院理学系研究科附属植物園）のことを指しているものと思われる（筑摩全集類聚版ではそう断定している）。

「太湖石」中国の蘇州付近にある太湖周辺の丘陵から切り出される穴の多い複雑な形をした奇石で、太湖付近の丘や湖に浮かぶ島は青白い石灰岩で出来ているが、かつて内海だった太湖の水による長年の侵食によって石灰岩には多くの穴が開き、複雑な形と化した。太湖石は蘇州を初めとする中国各地の庭園に配されている（以上はウィキの「太湖石」に拠った）。

「わが知れる人」不詳であるが、文脈から言えば沙羅の花を見た庭の持ち主「或人」と思われ、また詩の「かなしき人」が芥川龍之介が最後に愛した『越しびと』片山廣子である以上、この「わが知れる人」にも既にして女人、しかも濃厚な廣子の影が被っていると私は見る（これは二〇一二年十月十五日に「澄江堂雜詠」のテキストを注した際の私のそれをそのまま転載したものである）。

\*

さて、私が上記最後に注したように、一般には、この詩篇は芥川龍之介の最後の思い人であった『越し人』片山廣子に捧げられたものと考えられており、私もそれを現在でも基本、疑うものではない。

しかし、この花子の「私の横須賀の家の庭には沙羅の木もあったのでした。ただ、その家も今は無く、沙羅の木もどうなったか解らず、私には多く思い出の実感ばかりが残されておりますので、このことを人に語ろうとも、誰も信じはいたしませんまい」という言葉には非常な重みとリアルさがある。そこからフィード・バックして、芥川龍之介の「沙羅の花」（こちらのリンク先は私の最古期の「沙羅の花」だけのテキスト）の「わが見しは或人の庭なりけり。玉の如き花のにほへるもとには太湖石と呼べる石もありしを、今はた如何になりはてけむ、わが知れる人さへ風のたよりにただありとのみ聞こえつつ」という一節を虚心に考えた時、私はこの「或人」、その「わが知れる人さへ風のたよりにただありとのみ聞こえつつ」と追懐するその人とは、佐野花子ではあるまいか？ という思いを強くするのである。今、この注を附している私は、

……或いは……

……この詩篇の……

……「沙羅のみづ枝」の「花さけ」る向うに立っている女性――

「かなしき人」――

そ「の目ぞ見ゆる」女人の《原型》は

実は――佐野花子その人ではなかったらうか？！……

とさえ感じていることを告白しておく。

『宇野浩二も、「澄江堂遺珠」の中にある、あの詩の大部分を仮りに相聞詩とすれば、そうして、あの詩を空想の恋を詠んだものとすれば、芥川には空想の恋人があったということになると申しております、「空想の恋人なら何人あっても差し支へないであらう」と言っております』宇野浩二の「芥川龍之介」の「十一」の[ここ](#)。正確には『ところで、先（さ）きにくどいほど引いた『澄江堂遺珠』の中にある詩の大部分を仮りに相聞詩とすれば、そうして、あの詩を空想の恋いを詠んだものとする、芥川には空想の恋い人があった、という事になる。（空想の恋い人なら、何人あっても差（さ）し支（つか）えないであろう』である。」

「芥川の恋人と言え、既に皆、名前が挙がり、研究され、書き残されているではないか。佐野花子などという者の名は、どこを見ても見当たらない。どこかに何かに残る筈だ。残ってもいないものを信ずるわけには行かない」

「やぶちゃん注…これは花子によるオリジナルな仮想発言であるが、実際、私はこれに等しい、花子を精神的におかしい妄想家と言うに等しい、誹謗としか思えない不躰な発言や記述

を数多く見てきた。」

ところが彼は自分の周囲にいる文士連の口を恐れて要心していただのでございました。ちよつと話しても大きくされてしまう、オセツカイな彼らには口を固くしておりまして次のような手紙があります。

「やぶちゃん注…「彼」生前の芥川龍之介を指す。」

「朶雲奉誦

東京へ帰り次第早速意の如くとり計らふべし

（四行半除去）

それから君、久米へ、勢以子（註―ずっと前に鵠沼の東家の事を書いた時に出て来た元谷崎潤一郎夫人の妹）と小生との関係につき怪しからぬ事を申されたれ由、勢以子女史も嫁入前の体、殊に今は縁談もある容子なれば、爾今右様の事一切口外無用に願ひたし、僕大いに弁じたれば、この頃は久米の疑ひも全く解けたるものの如くやつと自他のため喜び居る次第なり、これ冗談の沙汰にあらず真面目に御頼み申す事と思召し下されたし、谷崎潤一郎へでも聞えて見給へ冷汁が出るぜ」というのでして、この手紙を貰ったのは秦豊吉でございます。うっかりすると口の端のうるさい文士連ということ知らされます。私のことも彼は要心して、一切、誰にも洩らさなかつたのでございます。別に深い関係もなく誰に遠慮するわけではなくても、要心に越したことは無く、かつ、めんどろを恐れて口外しなかつたわけ、誰も私の名など知りませんし、私と横須賀時代に交際があつたなど知る由もありません。それに右の手紙を見て宇野浩二も、はじめて、ずっと前から、芥川が、勢以子と近づきであつたことを知るのですからなかなか恐ろしいことです。宇野浩二はその著（芥川龍之介（上））の中の一節に右の手紙を挙げ、「そこで芥川が仮りにまだ生きているとすると、私は（私も）芥川に手紙を書き、その最後に『冷汗が出たぜ』と書くであろう。閑話休題」としてございます。まことに小うるさい環境と思います。彼もなかなか忙しかつたのでしよう。それが作家の生活と申せましょう。右の手紙は大正八年八月十五日に芥川が金沢から秦豊吉に宛てて出したもので横須賀の私どもとは交際も果てたのちのことでございます。小説を書くための交際がさかんになり、とかくの人の名を挙げさせそれでもなお、「月光の女」は誰であろうかなど幾ら話し合つても解らないこの種の迷路は、有名になつた作家に特有の廻り道でありましょう。その迷路がどこへどう抜けていたか、解りかねる部分がありましょう。著名な女性の名が挙がると人はその方へ気を取られます。いわばその人々は一種の目集めのような役をも兼ねないとは申せません。人の眼はそこに集中され、それらを記名し、あとには誰もいないよと済ましてしまいます。

「やぶちゃん注…以上の書簡は旧全集書簡番号五六五。大正八（一九一九）年八月十五日附・秦豊吉宛（秦豊吉（はた　とよきち…明治二十五（一八九二）年〜昭和三十一（一九五六）年）は翻訳家・演出家・実業家。七代目松本幸四郎の甥。東京帝国大学法科大学卒業後、三菱商事（後に三菱合資会社）に勤務する傍ら、ゲーテ「ファウスト」などのドイツ文学の翻訳を行い、昭和四（一九二九）年刊行のレマルクの「西部戦線異状なし」の翻訳はベストセ

ラーとなった。昭和八（一九三三）年に東京宝塚劇場に転職、昭和十五（一九四〇）年には同社社長となった（同年より株式会社後樂園スタジアム（現在の東京ドーム）社長も兼務（昭和二十八（一九五三）年迄同社会長）。敗戦後直後に戦犯指定を受けるも、昭和二十二（一九四七）年から東京帝都座に於いて日本初のストリップ・ショーを上演、成功を収めた。昭和二十五（一九五〇）年には帝国劇場社長・国産ミュージカルの興業で成功を収める。後、日本劇場社長時代に小林一三に買収され、東宝社長となった（以上は[ウィキの「秦豊吉」](#)に拠る）。岩波旧全集より全文を引く。

\*

朶雲奉誦 東京へ歸り次第早速貴意の如くとり計ふべし「やぶちゃん注…ここに全集編者注で『(四行半削除)』とある。」

それから君、久米へ勢以子と小生との關係につき怪しからぬ事を申された由勢以女子史も嫁入前の體殊に今は縁談もある容子なれば爾今右様の一切口外無用に願ひたし僕大い辯じたればこの頃は久米の疑全く解けたるものの如くやつと自他の爲喜び居る次第なりこれ冗談の沙汰にあらず眞面目に御頼申す事と思召し下されたし谷崎潤一郎へでも聞えて見給へ冷汗が出るぜ

九月初旬より東京に居る可く日曜は必在宿の豫定に候間御光來下され度道樂者どもも少々は遊びに参り候 この頃僕の句も新進作家にて君の水仙の句にも劣らず名句を盛に吐き出して居り候へば左に一二を録すべく御感服御嘆賞御愛吟御勝手たるべく候

「やぶちゃん注…以下の（ ）内は底本では二行割注。」

宵闇や殺せども來る灯取虫

もの云はぬ研屋の業や梅雨入空（これをツイリゾラと讀む素人の爲に註する事然り）

時鳥山桑摘めば朝焼くる

青蛙おまえもペンキぬりたてか（この句天下有名なり俗人の爲に註する事然り）

秋暑く竹の脂をしぼりけり

松風や紅提灯も秋隣（この句谷崎潤一郎が鶴沼の幽棲を詠ずる句なり勿體をつける

爲註する事然り）

八月十五日

秦 と よ 吉 様

「やぶちゃん注…以下の「二伸」本文は、ブログでのブラウザの不具合を考え、改行を施してある。」

二伸 君の原稿は何月號へのせる心算に

や 除隊後に書くと云ふにや隊にゐて書

くと云ふのにや もし隊にゐて書くなら

匿名で書くにや

右諸點に關して田端四三五小生宛御回答  
を得ば幸甚なり

近來句あり

春の夜や蘇小に取らす耳の垢（美人の我に侍する際作れる句なり羨ましがらせる爲に註する事然り）

\*

実はこれも宇野浩二の「芥川龍之介」の「十一」の[ここ](#)に引かれており、宇野は以下のように述べている。

\*

これは、大正八年の八月十五日、芥川が、金沢から、秦 豊吉にあてた、手紙のなかの一節である。が、これを読んで、私は、この文章のたしか第五節あたりで、鵜沼の東家（あずまや）にいろいろな人が集まった話を書いた時、このせい子の事も述べたが、芥川が勢以子とずっと前から近づきであつた事を初めて知ったのである。

そこで、芥川が仮りにまだ生きているとすると、私は、（私も、）芥川に手紙を書き、その最後に、「冷汗が出たぜ、」と書くであろう。閑話休題。

\*

書簡冒頭の「朶雲」は「だうん」と読み、相手から受け取った手紙を尊んで言う書簡用語（唐代の韋陟（いちよく）は五色に彩られた書簡箋を用い、本文は侍妾に書かせて署名だけを自分がしたが、その自書を見て『陟』の字はまるで五朶雲（垂れ下がった五色の雲）のようだ』と言ったという「唐書」韋陟伝の故事による）。

さて、何故、長々と秦宛書簡を引用したかであるが、花子がここだけをかく引用すると、恰も龍之介が小林勢以子（明治三二（一九〇二）年〜平成八（一九九六）年…谷崎潤一郎の先妻千代夫人の妹。後に映画女優となり、芸名を「葉山三千子」と称した。谷崎の「痴人の愛」の小悪魔的ヒロイン・ナオミのモデルとされる）とのありもせぬゴシップを深刻に捉えているように思われるかも知れないが、これ、陰悪でも深刻でも、実はないところが肝心である。宇野のこの引用ではまるで『潤一郎にでも』（この実はやっぱり私通に近いものだったことがばれたらと思うと）『冷汗が出るぜ』、とでもいうようなニュアンスに読める。そうではない。龍之介は潤一郎絡みで小林勢以子と交流があったものの、芥川龍之介の恋愛狙撃のスコープには小林勢以子は絶対に入っていないかったと私は考えているからある。――では、『冷汗が出る』のはなぜか？――明白である。後年の「文藝的な、餘りに文藝的な」論争でも分かるように、先輩作家谷崎は芥川のライバルである。そのライバルの義妹とのゴシップは芥川にとって如何にも不都合である。更に言えば私は、谷崎がそれを知ったらどうするかを考えてみれば、『冷汗が出る』に決まっているのである。則ち、谷崎なら、そこでニヤリとして、即座に芥川と勢以子をモデルにしたゴシップ恋愛小説をものすに決まっている、と芥川は直感しているからなのである。そうしたおどけた余裕が、後半の句の開陳によく表われているではないか。」

私は自分でもこういうことに気づきまして病人になりましたから、ノートに覚えていることを書きはじめました。小説の形にせず書き残しても見ました。また、文壇で問題に

している「或阿呆の一生」中の四人の女性を私であるとも仮定して断定的な口調で書いても見ました。または、手当たりしだいの紙片に覚え書きを記しました。娘の耳にも語り聞かせました。病いは既に治りそうもなく先も長いとは思えず、書いたものは、ちぐはぐであるようです。私の言いたいことは一貫して頭の中にあるのですが、死後それはどのように語り伝えられて行くのでしょうか。

「やぶちゃん注…「病人」それを指しているかどうかは不明であるが、花子は戦争直前或いは戦中に結核に罹患し、臥床している（底本の長女芳子さんの「母の著書成りて」に拠る。但し、以前にも注したが、昭和三六（一九六一）年八月二十六日の彼女の六十六歳の逝去がそれによるものかどうかは不明）。

『小説の形にしてまず書き残しても見ました。また、文壇で問題にしている「或阿呆の一生」中の四人の女性を私であるとも仮定して断定的な口調で書いても見ました。または、手当たりしだいの紙片に覚え書きを記しました』『病いは既に治りそうもなく先も長いとは思えず、書いたものは、ちぐはぐであるようです』これは非常に重要な発言である。花子は最初、

1 この芥川龍之介との思い出について「小説の形にしてまず書き残して」「見」た。

と言っている。さらに、

2 『文壇で問題にしている「或阿呆の一生」中の四人の女性を私であるとも仮定して断定的な口調で書いて』『見」た。

と述べているのである。しかも、そうしたことを、

3 「手当たりしだい」「紙片に覚え書き」として「記し」、しかもそのバラバラに書き散らした「ものは、ちぐはぐであるよう」に私自身にも見えるようである。

ともはつきり記しているのである。この命題は次のように展開して書き直すことが出来る。

1・1 自分の書いた断片が芥川龍之介に纏わる体験を素材としながらも、事実とは必ずしも言えない創作であったことがあった。

2・1 文壇で問題にされている「或阿呆の一生」中の意味深長な謎の《月光の女》と称する「四人の女性」を「私である」と敢えて「仮定し」、しかも《月光の女》と称する「四人の女性」は「私である」と、幾つかの点で身に覚えがないにも拘わらず（事実、芥川龍之介と『或ホテルの階段の途中に偶然彼女に遭遇し』、しかもその時、龍之介と『一面識もない間から』であったことはなく（『或阿呆の一生』の「十八 月」より。リンク先は私の古い電子テキスト。以下同じ）、『或廣場の前』で龍之介と秘かに密会し、『疲れたわ』と言つて頬笑んだ

りし』『肩を並べ』て歩き、タクシーに乗り、『彼の顔を見つめ、「あなたは後悔なさらない？」と言』い、『彼の手を抑へ、「あたしは後悔しないけれども」と言』ったこともなく（『或阿呆の一生』の「二十三 彼女」より）、況や、龍之介と、『大きいベッドの上に』『いろいろな話をし』『一しよに』『七年』も『日を暮ら』したことなどあろうはずもない（『或阿呆の一生』の「三十 雨」より）のに（以上は総て『或阿呆の一生』の四ヶ所の内の三ヶ所に現われる『月光の女』の設定である。花子が生きていれば、確かに完全否定する内容と断言出来る。一ヶ所だけ、『或阿呆の一生』の「二十七 スパルタ式訓練」で、『彼は友だちと或裏町を歩いてゐた。そこへ幌（ほろ）をかけた人力車が一台、まっ直に向うから近づいて来た。しかもその上に乗つてゐるのは意外にも昨夜の彼女だつた。彼女の顔はかう云ふ晝にも月の光の中にゐるやうだつた。彼等は彼の友だちの手前、勿論挨拶さへ交さなかつた。』『美人ですね。』／『彼の友だちはこんなことを言つた。彼は往來の突き當りにある春の山を眺めたまま、少しもためらはずに返事をした。』『『ええ、中々美人ですね。』』と出る女性も留保するが、『昨夜の彼女』というところで私は佐野花子は直ちに否定すると思つてゐる）、無謀にも敢えて「断定的な口調で書い」たことがある。

3・1 「手当たり」次第に「紙片に覚え書き」として「記し」散らした結果、それらは現実に即して、或いは論理に照らして、冷静に考えた際にはこの私自身でさえ「ちぐはぐであるよう」に感じられるものが混在してゐたと感じられる。

これは、いい加減な敷衍解釈などではない。先の「1」「2」「3」の花子の言う命題から導かれるところの、

☆最終的に佐野花子が本「芥川龍之介の思い出」の最終決定稿を書いた際に彼女が置かれていた外延的環境或いは事実関係の状況を可能且つ自然と私が判断する様態として措定したものの

なのである。しかも、その時の佐野花子の心身の状態はと言えば、

★「病いは既に治りそうもなく先も長いとは思え」ぬという死への『ぼんやりとした不安』（知られた芥川龍之介の遺書の一種「或舊友へ送る手記」から、花子をこんな目に遇わせた芥川龍之介に対しての皮肉を込めて（佐野花子へでは決してないと言ひ添えておく）てわざと引いた）の意識、その非常な「生」の孤独感の中で、意識を緻密に論理的に冷静に保ち続け、本「芥川龍之介の思い出」を〈事実即して〉書き上げるといふことは、私には至難の業（わざ）のように思われる

のである。もっとも、本稿（小説などにする以前の初期稿）の起筆は冒頭の叙述から、昭和  
二五（一九五〇）年八月二十六日前後以降で（黒澤明監督の映画「羅生門」公開日前後）、花

子が亡くなるのは、それから十一年後の昭和三六（一九六一）年八月二十六日（思わず、あっ！）と思ったが、この日付、偶然であるが同一日である）であるから、どれだけの年月をかけて本「芥川龍之介の思い出」が書かれたものかは不詳ながら、起筆の時点では、死を目前にした切羽詰まった状況であったとはちよつと考え難くい、とは言える。

ともかくも、以上から、以下の推論を主張することは出来る。則ち、

◎佐野花子は、最終的な「実録」としての本「芥川龍之介の思い出」を書く過程の中で、当初、自分の書いた「小説」仕立ての中の架空のそれや、やや強引であったであろう「月光の女は私である」主張のあれこれのシークエンスや文々（もんもん）の内、事実としては彼女も実は受け入れられない幾つかの叙述を、後に心身ともに疲弊した晩年の花子自身が、あたかも若き日の自分と芥川龍之介との間にあった事実であったように誤認してしまい、それをこの決定稿に混入させてしまったと考えることは可能である。

という措定である。多くの自分が書いた、虚実皮膚のメモランダが周りにいっぱいあって、それには小説化した架空の断片や、或いは、一度、『文壇で問題にしている「或阿呆の一生」中の四人の女性を私であるとも仮定して断定的な口調で書いて』際の、やや牽強付会な叙述があったとして、それを後年、肉体的精神的に弱った花子がある一部を実際にあった事実、虚心坦懐にして素直な自身のかつての確かな感懐であったと無意識に読み換え（それは十分に弱った花子の強い深層心理的願望でもあったと私は断言するのであるが）、そう思い込んでしまった可能性である。

これは架空の記憶の再構築と偏執的確信という点では、正常人の域を逸脱してはいるように見えはする。しかしだからと言って、べらべらした市井の人間が言い放つ〈妄想〉（はつきり言えば「頭がおかしい」的発言）という一語で片付け得るものではないし、また、記憶障害や、ある種の精神病の一症状として処理し、その叙述全体を無化・無効とすべきものでもないとは私を考えるのである。恐らく、この作品を精神科医が病跡学的に検討した場合でも、ある種の文学研究者や自称芥川龍之介研究家などのように〈妄想〉の類いとして一蹴することはな  
いと思う。そういう点に於いて、近現代の文学研究者は、私は実は前近代的で非科学的な輩が  
ゴマンといるさえ、実は秘かに感じているのである。

「私の言いたいことは一貫して頭の中にあるのですが、死後それはどのように語り伝えられて行くのでしょうか」……今、私がこのようにして語り伝えておりますよ、花子さん……」

もっとも私は私の所持しているこの話題を田中純氏によって小説化されたことがございます。氏は「二本のステッキ」という題で、昭和三十一年二月「小説新潮」誌上に発表され、芥川の「知られざる一面」として興味を呼びました。ついで同誌三月号において、十返肇氏は「文壇クローズアップ」の欄に、「芥川への疑惑」と題して次のように書いています。

「やぶちゃん注…二本のステッキ」既に注した田中純の実名小説（芥川龍之介）は本名で登場、佐野花子の娘と山田芳子と思しい『一人娘』『山口靖子』なる女性が、その母が晩年に書き残して置いたノート』を『私』送付してくるという設定（母は『昨年』の春、老いのために廃人同様の身となつた」と『靖子』は記す）「二本のステッキ」（昭和三一（一九五六）年二月発行の『小説新潮』初出）である。私は既にブログ記事『芥川龍之介の幻の「佐野さん」についての一考察 最終章』でも取り上げているが、私はそこで、以下のように述べた（一部の記事を変えた）。

\*

佐野花子はこの小説発表後の昭和三六（一九六一）年八月二十六日に六十六歳で亡くなっている。

佐野花子は何故「老いのために廃人同様の身となつた」という屈辱的な言辭を受け入れているのか。そもそも、この叙述から佐野花子は「二本のステッキ」を少なくともしっかりと見当識のある中で読み、またその次号に載った評論も理解し、後に（同作品の発表から彼女の死去までは五年ある）それらを自作の「芥川龍之介の思い出」の末尾に自身の記述の素材として組み入れることも出来たのである。それは「廃人同様の身」では、できない。いや、自身が「月光の女」であることを自認し、それが世間に知られないことへの焦燥を隠さず、また「澄江堂遺珠」の女性暗示を自分自身に引き付けないではいられなかった彼女が、何故、「老いのために廃人同様の身となつた」という屈辱的虚偽を問題にしないのか。

それが小説だから？ そうではない。「二本のステッキ」の告白体部分は、客観的に見れば現行の佐野花子「芥川龍之介の思い出」の出来の悪い覗き見趣味の圧縮版である。

田中純自身は前書で「その追憶の甘さ、叙述のくだかしさとははじめのうち多少私を屈させた」とするが、彼の小説の方が臨場感も、山場も、ぶつ切りで、すこぶる退屈である。何より、この小説は、山口靖子の求めたような「どうして芥川が父母に對してあんな仕打ちをしたのか、その理由が自分たちには判らないけれども、その頃の芥川と親しい交遊があり、且また文學者の心理にも通じている筈の」田中純によって、「何かの解釋を」、少しも下されてはいないのである。これは、告白体の直前で田中がいくら「従つてこの一篇の文章は全部作者たる私にあることを斷つて置く」と言つても、それは読者にとっては完全に無効なのだ。この「二本にステッキ」は作者田中純が小説という前提で書いたとしても、佐野花子にとっては紛れもない『佐野花子の告白』なのである。

佐野花子は、既に、この「芥川龍之介の思い出」のプロトタイプである「芥川様の思い出」（写真版で見る原ノートの題名）を『小説の形にしてまず書き残してもみ』たと述べている。田中の手に渡ったのは、そうした小説化されたもの、もしくはそれも含んだものろの覚書（そこには小説的虚構の覚書さえも含まれる）であつたと思われる。それが、彼女の思い通りのストーリーで田中純によつてさらに虚構化されたのである。ところが、それは「二本のステッキ」の前書を無視すれば、佐野花子の私小説そのもののなのである。

結論を言おう。この「二本のステッキ」を佐野花子は『小説』として読んでいない。

佐野花子の原小説「芥川様の思い出」

←

田中純「二本のステッキ」

←

抽出された「二本のステッキ」内の佐野花子『芥川様の思い出』

←

佐野花子の体験錯誤

←

佐野花子自身によって実録として認識されたこの佐野花子「芥川龍之介の思い出」

へと至り、それが強固に彼女の意識に定着してしまったのであると僕は思う。これは精神医学的には、閉じられた系の中でかなり強固に事実とは異なる対象を事実と誤認して改めることが難しい心因反応の一種と言える。それを病的なものととるかどうかは、留保する（そもそも私は正常／異常・健常／病的といった区別は単なる「文化」が秩序を維持するために産み出した境目のはっきりしない、それこそ「架空」の「妄想」に近い「強引な」線引きに過ぎぬと考える人間だからである）。敢えて、精神障害の候補を挙げるとすれば、現在の最新の世界的な精神障害の診断マニュアルである DSM（Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders：精神障害の診断と統計学的マニュアル）-IV-TR に拠るならば、旧来の「偏執病」の範疇に相当する、  
妄想性パーソナリティ障害（paranoid personality disorder）  
妄想性障害における被害妄想タイプ（persecutory type）  
或いは、統合失調症のサブ・タイプとしての、  
妄想型統合失調症（paranoid schizophrenia）  
が挙げられるかも知れぬ。しかし、花子の思い込みはある極めて特定の部分

（狭義には「佐野さん」という架空作品の存在とその全回収と書誌上の完全抹消、及び、芥川龍之介の海軍機関学校へのその幻の「佐野さん」発表行為への謝罪行動。但し、これらには夫佐野慶造の台詞が絡んでおり、その被害妄想の内部では辻褄が合うように構成されている点では極めて良く出来ており、特異であると言える。所謂、狭義の精神医学上の「妄想」所見の多くは、花子の話の中にたまに出現する時制齟齬のような単純なものを除くと（こうした記憶違いは我々の日常にも頻繁に見られるからそもそもそれを異常とすることは出来ない。それをし出すと、ほら！ あなたも〈妄想だらけの狂人〉のレッテルを即座に貼られますよ！）内部でも明らかに奇体な矛盾が露呈していることが多いが、それが花子の場合には殆んど認められないのである）

だけに限られており、それらを隔離して全体の叙述を見ると、書記法も花子の意識も感情も平均して実に穏やかであり、異様な亢奮や論理矛盾を示している部分は殆んど見られない。

従って、私はこれは「強い思い込み」、「被害妄想様のその周縁」を花子は彷徨しているに過ぎないと考えるのである。無論、それを強迫神経症やノイローゼの副次的症状をする方もいるであろうが、ともかくも私は、彼女を精神医学的に、閉鎖された系に於いて高次元な偏執妄想を強固に構築した（ゲーデルの不確定性原理によれば、そうした系にあっては系の中の矛盾を認識することは出来ないと言われる）病者であり、社会的学術的に「異常な発言による無効で無意味な叙述」と断じ、「隔離し」「葬り去る」らねばならぬような必要性を全く以って感じないのである。

\*

則ち、田中純の小説「二本のステッキ」は佐野花子の中の夫慶造を救助し、芥川龍之介の中に創られた「月光の女」という女性像の一人は自分であるという意識的主張（私はそれを基本、肯定する人間である。但し、「意識的」と条件したのには自ずと「無意識」の別な願望、則ち、花子の中の慶造や龍之介に対する依存的願望、所謂、「シンデレラ・コンプレックス（Cinderella complex）」の存在を私は強く感じているのである）を公にするという切なる希い精神をなお、再三言うが、来年二〇一七年一月一日午前零時零分を以って田中純の著作権が切れるので、来年早々には、このブログで「二本のステッキ」の全電子化をしようと考えている。なお、これもクドイが、TPP関連法案が本年中に承認されても、著作権延長はそれでは出来ない。何故なら（私も関連条文を厳密に理解しているとは言いがたいが）、著作権延長は「TPPが日本に於いて《発効》した日を以って変更される」と規定されているからである。勘違いしてはいけないのは、TPPは複数の国の協定であり、その《発効》と、日本の国会でのTPP承認可決は自ずと違うものなのである。

『「十返肇氏は「文壇クロースアップ」の欄に、「芥川への疑惑」と題して次のように書いています」十返肇（とがえり はじめ 大正三（一九一四）年〜昭和三八（一九六三）年）は香川県出身の文芸評論家。この「芥川への疑惑」の原文を私は読んでいないし、所持もしていないが、佐野花子の以下の引用は、宇野浩二の「芥川龍之介」の引用がほぼ正確であることから考えても、問題のない正しい引用と信じてよいと思われる。」

「前月号のこの欄で、芥川の出生問題が、近ごろ話題を呈していることを報告しておいたが、同じ号に掲載されている田中純『二本のステッキ』もまた、芥川の実生活についての一つの興味ある事実を紹介している。本誌の読者は既に読まれたと思うから、ここにあらためて、その梗概を紹介することは省略するが、おそらく、芥川が横須賀海軍機関学校時代に同僚の人妻に、ある程度、感情を動かせたというのは事実であろうと思う。」

この人妻は、芥川が、なぜ、突然、良人を戯画化し、自分たち夫婦に絶交を宣言するようになったかが理解できずに悩んでいるが、この『二本のステッキ』から、それを解く能力は私にもない。

ただ、ここで感じられることは、芥川が、或いはこの夫に嫉妬をかんじ、それを克服するために、そういう文章を書いたのではなからうかということである。しかし、事実、それは大した問題ではない。

ただ、私には、文学に理解もなにもない海軍機関学校教官たちの前で、その一文ゆえに謝罪しなければならなかった芥川龍之介の痛ましさが、ひしひしと感じられるのである。ここに生活に極端に臆病なために、新進作家となりながら、なお、教官勤めを止めなかった芥川の悲しい姿がある。すまじきものは宮仕え、と芥川もおもったに違いない。

私は芥川が、新進作家となり、文筆一本で生活しようとすればしえたにもかかわらず、この教官生活をやめなかったという事実、つねに大きい不満を感じている。この点、谷崎潤一郎の生き方に私はたのしい強さをいつも感ずる。『二本のステッキ』のなかに、谷崎潤一郎と論争して、芥川がヘトヘトになったことが書いてある。そして『谷崎は偉い。僕をこんなにヘトヘトにするのだから』と芥川がいうところがあるが、おそらく芥川の本音であろう。

この論争は、今日読みかえしてみても、その論旨の当否は措くとして、文章の中にみなぎっている気魄において、自己の文学的主張にたいする自信において、芥川の方が完全に敗北しているという印象が強い。芥川は、谷崎との論争で、あんなにも『ヘトヘトになっている』が、おそらく谷崎の方では、そのことで、いささかも疲労を感じてはいなかったであろうことが、はつきりと想像されるのである。

それにしても、さいきん芥川龍之介について、また芥川家について、つぎつぎに、さまざまな新事実がこのように紹介されるのは、芥川というひとが性格的に、いかに多くの苦しみをただひとりで耐えてきたかを痛感させるのである。芥川はハダカになることを極度に嫌ったひとである。

その芥川が、死後三十年のちの今日、かくも多くの人々によって、その実生活をあばかれねばならぬとは――私は、なんとも痛ましい気持をおぼえないわけにはゆかない。

芥川が、どのような私生活をしていようと、その文学の価値にいかなる関係もない。しかし、芥川の文学を理解するために、その私生活の実相がわかることは望ましい。しかし、それがたんなる好奇心によってなされるのでは、文学理解のためにも多く役立つとはいえない。ただ一篇の読物的興味によって、芥川の私生活を曝露してはならない。曝露する側にも、芥川が、傷ついたと同じように傷つくべきものがあるのでなければ意味は低いものとなるであろう。

私は、実名小説を全面的に否定するものではない。しかし、実名小説も小説として成立してこそ意義はある。それは作者の側にあえて世に訴えたい問題がある場合にのみ許されることであるまいか」

「やぶちゃん注…まず、この評を花子は誰から教えて貰ったのであろう。自分の原作の小説が載ったのだから、或いは翌月号でその評が載るかも知れない、と感ずるのは自然だから、彼女自身が見つけたとしてもよい。或いは、原作ノートを提供した娘の山田芳子さんが見つけて母に見せたというのにも首肯出来る。反して、あり得ないと私が思うのは、資料提供を受けて実名小説を書いて、稿料を貰った田中純自身が知らせた可能性である。何故か？ 私のこのブログの多くの読者は気づいていると思うが、この十返肇の評は、暗に、いうより、か

なり明白に、芥川龍之介の実名を用い、彼のプライベートな女性関係を興味本位で暴露したスキャンダル小説の体裁でこれを書いた作者田中純を批判しているからである。十返は「芥川が、どのような私生活をしていようと、その文学の価値にいかなる関係もない。しかし、芥川の文学を理解するために、その私生活の実相がわかることは望ましい。しかし、それがたんなる好奇心によってなされるのでは、文学理解のためにも多く役立つとはいえない。ただ一篇の読物的興味によって、芥川の私生活を曝露してはならない。曝露する側にも、芥川が、傷ついたと同じように傷つくべきものがあるのでなければ意味は低いものとなるであろう」。「私は、実名小説を全面的に否定するものではない。しかし、実名小説も小説として成立してこそ意義はある。それは作者の側にあえて世に訴えたい問題がある場合にのみ許されることであるまいか」と言う。十返は田中純の実名小説「二本のステッキ」は「たんなる好奇心によってなされ」た、「文学理解のため」でも何でもない、「ただ一篇の読物的興味によつ」た、スキャンダラスに「芥川の私生活を曝露し」た文学的小説的価値のすこぶる低いものであり、こうした実名小説を書く小説家はその「曝露する側にも、芥川が、傷ついたと同じように傷つくべきものがあるのでなければならず、そうしたのつぴきならない覚悟を以って作家が書いたのではない限り、文学的「意味は低い」、殆んどない「ものとなる」と指摘しているからである。田中純がそれを読めなかったはずはない（読めなかったとしたら、これはもう、小説家以前に、人間として最早、失格である）。自分の小説を皮肉に批評しているものを原作提供者に伝えるはずがないからである。以下、次注に続ける。」

と結んでおります。右の文の中で私が心をひかれ、そして私が言いたいところは、終わりの方の「作者の側にあえて世に訴えたい」問題があることと、少し前のところの「芥川が傷ついたと同じように傷つくべきものがあるのでなければ」というところにございます。

「やぶちゃん注…さて、もうおわかり戴けたであろうか。ここで佐野花子は、何と、十返の田中への痛烈な「二本のステッキ」の根底に関わる実名小説の是非に関わる批判を、批判として読むことなく、自分の個人的な凝り固まった意識の中にそれを引き込み、さらにそれを

——「私が」その批評に強く「心をひかれ」たのは

——しかも「私が」十返氏以上に声を大にして「言いたいところは」、その批評が述べているところの、『作者の側にあえて世に訴えたい』問題があること』と、『芥川が傷ついたと同じように傷つくべきものがあるのでなければ』というところに』こそある

と変容・換骨奪胎しているのある。より正確に言うならば、十返が田中を指摘するために突き出した太刀をにつこり笑って奪い取り、それを融解して読者に向かう際の強力な鎧に仕立て直したと言ってもよい。但し、花子に好意的に考えるならば、これはこれで、原作提供をした花子にしてみれば、当然の謂いとは言える（それを「奇襲戦略」と言う、と、花子は十返の皮肉に気づいていることになるが、私はそれは、ないと断言出来る）。

しかし、それ以上に驚きの問題点がここにはあるのである。それは、

——実はここで花子は田中純の小説「二本のステッキ」は、自分が核心の資料を提供した以

上、花子を書いたものと全く等価である《これは私の作物である！》と読み換えている点

である。でなくて、どうして『私が言いたいところは、終わりの方の「作者の側にあって世に訴えたい」問題があることと、少し前のところの「芥川が傷ついたと同じように傷つくべきものがあるのでなければ」というところ』だと胸を張って言えようか。佐野花子ここで、

——私の（原作である）芥川龍之介の実名を用いた小説「二本のステッキ」には私佐野花子が『「あえて世に訴えたい」問題があり、そうして「芥川が傷ついたと同じように傷つ」いた人物がいた、私佐野花子及び最愛の夫慶造がそれであるのに、それを今まで誰一人として理解してくれてこなかったし、今もない、これはすこぶる不当極まりないことである！だから！私は胸を張ってそれを読者に訴えずにはおられないのです！

と叫んでいるのでいるのである！

「芥川の出生問題が、近ごろ話題を呈していることを報告しておいた」現物（前号）を見ることが出来ないので確かなことは言えぬが、これはこの記事が載ったのが、昭和三一（一九五六）年三月発行の『小説新潮』だとすれば、これは前年の『東京新聞』（昭和三〇（一九五五）年十月六日附）で『芥川龍之介出生の謎判る、小穴隆一氏が近く公表「母親は横尾その、實家新原牧場の女中」という記事（記事名は翰林書房「芥川龍之介新辞典」の「家族の回想」に拠った）、及び翌年一月三十一日（クレジット上は本記事の一ヶ月ほど前）に中央公論社から刊行された芥川龍之介の盟友で画家の小穴隆一著「二つの繪」の中の、「横尾龍之助」のことを指している」と判断してよい。これは龍之介葬儀の日に妻文が棺桶に差し入れた龍之介の臍の緒を入れた袋に「横尾龍之助」と書いてあったという驚天動地の話である。そう、その姓は「芥川」でも「新原」でもない「横尾」であり、しかも名前も「龍之介」でなく彼が誤って「助」で送られてきた手は開封しなかったとさえ伝えられる（これはどうも嘘っぽい）ほど毛嫌いとされる「龍之助」であったというのである。なお、これは昭和三〇（一九五五）年十二月発行の『文藝春秋』で、小穴の単行本刊行前に、芥川龍之介の長男比呂志が「父龍之介出生の謎——『新事実』は事実ではない——」によって否定しており、現在、研究者の間で問題にされることは、まず、ない（この単発の小穴証言以外には立証者や賛同者はなく、それを証明する物件も存在せず、可能性はないとは言えない（但し、龍之介の実母新原敏三の女性好きは事実であり、私は龍之介の実母フクの精神疾患の原因はその辺りに求められると考えている）が限りなくゼロであろうとは私も考えてはいる）。なお、来年二〇一七年一月一日午前零時零分を以って小穴隆一の著作権が切れるので、来年早々には、このブログで「二枚の繪」を全電子化をしようと考えている。

「そういう文章」本作の「佐野さん」であるが、田中純の小説「二本のステッキ」では「Sさん」となっている。十返は、この芥川龍之介の「Sさん」という文章が実在するものとして

書いていることは疑いがない。検証もせずに、である。これでよく、文芸評論家を名のれるな、と私は思う。

「ただ、私には、文学に理解もなにもない海軍機関学校教官たちの前で、その一文ゆえに謝罪しなければならなかった芥川龍之介の痛ましさが、ひしひしと感じられる」十返は、幻の「Sさん」同様、現在、その事実が確認されていないこの事件をも、事実としてあったと安易に無批判に断定して書いている。 お目出度い奴である。

「ここに生活に極端に臆病なために、新進作家となりながら、なお、教官勤めを止めなかった芥川の悲しい姿がある。すまじきものは宮仕え、と芥川もおもったに違いない」「私は芥川が、新進作家となり、文筆一本で生活しようとすればしえたにもかかわらず、この教官生活をやめなかったという事実、つねに大きな不満を感じている」「生活に極端に臆病なために」という謂いが、完全に小説家一本で立っていることの経済的な不安ということならば、まあ、正しいと言える。芥川龍之介は養家芥川家の父母と伯母フキそして妻文らを、たった一人で「河童」の中に出てくる河童の一家の男のように、支えなければならなかったからである(但し、それは晩年に近づくにつれ、その擁護すべき対象は三人の子や親族へとますます拡大していった)。しかしこの十返の言い方は、私には生理的に不快極まりないものであると言いついておく。すまじきものは寄生虫の如き評論家、と応えておくこととする。

「『二本のステッキ』のなかに、谷崎潤一郎と論争して、芥川がヘトヘトになったことが書いてある。そして『谷崎は偉い。僕をこんなにヘトヘトにするのだから』と芥川がいうところがあるが、おそらく芥川の本音であろう」「この論争は、今日読みかえてみて、その論旨の当否は措くとして、文章の中にみなぎっている気魄において、自己の文学的主張にたいする自信において、芥川の方が完全に敗北しているという印象が強い。芥川は、谷崎との論争で、あんなにも『ヘトヘトになっている』が、おそらく谷崎の方では、そのことで、いささかも疲労を感じてはいなかったであろうことが、はつきりと想像されるのである」〔三〕で指摘した通り、この部分は全く時代的が合わない(十返は明確にこれを龍之介自死の年の三月以降の〈筋のない小説〉論争ととっている。この齟齬は芥川龍之介好きの高校生にでも判ることである)。それにさえ、気づいていない十返は、世間で言われるような〈文壇事情通〉だとは、凡そ、私には思われない。谷崎通であった自分を自慢して、見当違いの誤りに気づかない十返の、救い難い阿呆部分である。」

私は作家を友人に持った素人の男として、夫がどのように傷ついたかを訴え、そして私がそれによって、淡々しくも、激しくも愛され、いかにおぼおぼとした光の中に、一人立たされるかを書き残せばよいのでございました。天下の芥川を庇う文学者はございましたも、善良な夫を庇うのは妻の私よりほかには無いのでございました。

「やぶちゃん注…「おぼおぼ」副詞。臆げなさま、ほんのりとしたさまを意味する、平安以来の古語である。歌人であった花子らしい用法である。」

思えば芥川さんは私の才能については庇い認めて下さったものでした。

「教官夫人の中で僕と話の合うのは、佐野夫人だけです」

という具合に。また、芥川さんが退官され、ご帰京後、「新潮」でしたか「文芸春秋」でしたかに、

「或る、会社で芥川が初めて会った城夏子という閨秀歌人に、翌日、著書を贈って、「昨夜は楽しかった。あなたが、僕の非常に好む或る女性に似ていられたから」

という手紙が出ていたそうでした。皆が、それは一たい誰だと騒ぎましたところ、

「夏目先生の二番目のお嬢さんではないかなあ」

ぐらいで終わったとのこと。事実、それが誰であるのか、芥川さんしかご存知ないわけですが、夫は、

「芥川君は、どうも、お前のことを、いつまでも忘れられないようだね。それは有難いけれど、そのため心持が乱れて、あんな、ひどい文章を書いたりしてさ」

などと申しておりました。人の好い夫のことを思うにつけて、いろいろと追憶が生まれて参ります。どうしたものでございましょう。とにかく、長々と書きつらね、疲れたように思います。永の眠りも遠からぬことと思います。

「やぶちゃん注…『或る、……』以下の鈎括弧はママ。『或る、会社で……』という手紙が出ていた』とするか、或いは、冒頭のこの鈎括弧を除去すべきだろう。

「城夏子」（じょう なつこ 明治三五（一九〇二）年〜平成七（一九九五）年）は作家。和歌山県出身。本名は福島静。和歌山県立高等女学校卒。在学中から少女小説を書き、大正一三（一九二四）年に「薔薇の小径」を刊行。『女人藝術』『婦人戦線』などに小説を発表した。戦後は少女小説や童話を書いている（以上はウィキの「[城夏子](#)」に拠った）。芥川龍之介と同年であるが、芥川龍之介とこの女性が関わりがあったとは、私は寡聞にして知らぬ。私の所持する芥川龍之介関連連書の複数の人名リストを見ても彼女の名はない。芥川龍之介の現在の著作物や書簡にも彼女の名は載らない。ここで佐野花子が述べる『新潮』或いは『文芸春秋』の城自身の記事（としか思えぬ）も不詳である。識者の御教授を是非、乞うものである。

「僕の非常に好む或る女性」言わずもがな、花子は——百％——私佐野花子ことだ——と言うのである。「歌人」というところがミソだろう。現行では城夏子を「閨秀歌人」とはしないし、女学校時代から小説を書いて発表している女性を私は「閨秀歌人」とは言わないと思う（少なくとも私は絶対と言わない）。寧ろ、花子は自身をそのような歌人として意識していたと断言出来る。だからこの城夏子という女が、自分に似ているというのが許し難いのである。

「夏目先生の二番目のお嬢さん」とすれば、夏目恒子で明治三四（一九〇一）年一月二十六日生まれ。芥川龍之介より九歳年下。彼女の事蹟は私自身、よく知らない。芥川龍之介の文章には彼女について言及したものはないと考えられ、また、親しい接点もないと思われる。

さて。

それにしても城夏子への芥川龍之介の手紙の一件……これ……花子がわざわざ、それも、

本作のまさに大事なコーダの部分に書くぐらいだからね、よほど、花子は口惜しかったのだからなあ……………

えっ？

「誰に対してか」だって？！

芥川龍之介が齒の浮くような文句を言った芥川龍之介に、じゃないよ！

この城夏子という歌人に対してに決まってるじゃないか！

あれあれ……

あなたは、まだ、気がつかんのかね？……

佐野花子は、まさに、強烈な愛憎半ばするアンビバレントな意識の中にいるんだよ！

——佐野花子は、誠実であつたにも拘らず、芥川龍之介が自分を愛したが故、それだけのために、あの「おぞましき龍之介」から憎まれた亡き最愛の夫佐野慶造の魂を鎮めんがため、復讐させんがためという強い意識的願望

とは裏腹に、

——佐野花子は実は——「自分は確かに芥川龍之介に愛されたのです！——」「自死の最後まで、否、死してなお、芥川龍之介は私を愛しているのです！——」「彼の理想の女性たる『月光の女』に最もダブる私佐野花子を、です！——と呼ばわっているのである！ 今現在も！

これは謂わば佐野花子の〈信仰に近い確信〉である。

そうでないなら、あなたは一体、最後に掲げられている、捧げられている次の詩を、誰へ向けたものとして読むというのか！？！

——そこで花子は聖母マリアとなり

——慶造も龍之介も一体となった赤子キリストを優しく抱いているのである……………

以上を以って私の注は終わりとする。最後の十二行詩は佐野花子の畢生の絶唱である。それは評を拒絶する美しさを持っている。

……この詩……私はとっても好きです。花子さん……………」

君に語らん術もがな

涙と過ぎし幾年は  
絵巻となりて浮びくる  
老いて病む身の昨日今日  
悲しき君がまぼろしよ  
空のいづくにおはすやと  
窓辺によりて仰ぎ見ぬ  
此の大空の遙けさや  
命はかなく消えん時  
君に見えんうれしさよ  
若かりし日のつれなさよ  
空のはてにて相逢はむ

(完)